



089458-000-0

特11-802

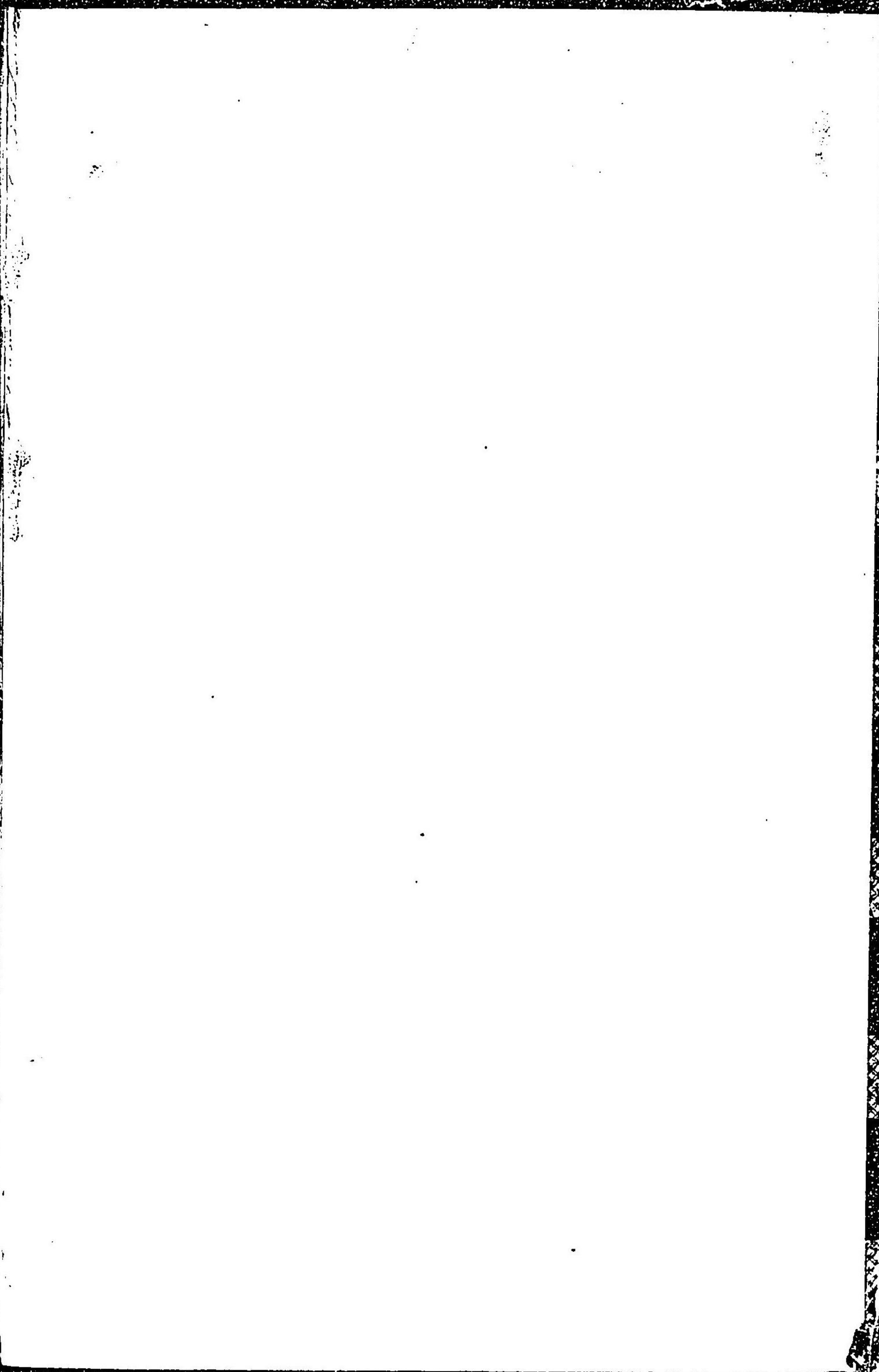
雙蝶記 (吾妻餘五郎)

山東 京伝 / 著

M19

DBM-1167





雙蝶記自序 明治十九年八月二十七日内務省交付

此物語稿をいりて人に叙を乞ふとおもへどかゝる拙作なれば讀てくれる人もあるまをどこの
のすゝめ前うすうすもあつて自緒をどかんとおもふにこれを漢文にのぶれば之乎者也
の置所酢の麹麴のち面削り書得所が餅屋の餅もあらば素人としらへの柏餅皮がわつくて
味なしといひむかひを和文にしるさんとするにしれ字一ツを論ずるさへ過去未來現在な
らば三世因果の業をまらし誦の文を淨琉璃節に語るやうにてあたいらいさ事おほしと
が不文を識なりん蟹の甲に似せて穴うるさ世間具やおもふにつけ具とぬふ字を縁にし
て此草紙を讀むにたへて見るに繪の則顔姿なり作の則意氣なり板木彫り
紅白粉ひかり摺仕立の嬪入衣裳なり板元の親里なり讀でくだる御方様の婿君なり貸本屋
様のお媒人なりさて顔容にたとふる繪の歌川豊國の筆なればまうしふんなし板木彫の小刀
にて紅白粉の化粧もよく摺仕立の嬪入衣裳も不足なく板元の親里も欲をいなれて随分安賣
の嬪のれを肝要の意氣あるとふる作が愚にてしうも田舎言の其うちに都言を横ぐりへお
ひひませて聞ぐるしとことおほけれ讀でくだる婿君のお氣にいらぬぐちあるべし所を

貸本屋様方のお謀人口にてかやうくの娘がござる顔かたちいひぶんなし心バへんすこ
しおろかな生れなれど其かひりにと舅姑のこどバを背す婿君を大事にして律義一へん所
帯形氣の娘でござる先見合をして見給へと拙をおほひめしきをよきにとりおしてそめ
こんでくだらば縁とほき此娘もよき婿君おほくつくべき野猪も伏猪といへばやさしく馬
鹿も結構人といへば聞えよし是則方とたのみ奉るお媒人の貸本屋様のいひなしによる所
あり然則板元の親里の喜びおほく祝儀の小謠千秋万歳の千箱の玉をまこさめて追摺の御
注文冊くの聲をたのしむに至るべしおほくおもふ所をありのまゝにしるして以て是を序と
し物前に残り本のかへるといふい忌詞大福帳おめでたうひらさますといふ

醒醒齋京傳識

文化十年癸酉春二月

附てらふ

書名を雙蝶記と号のあり二ツ蝶々といふ傀儡の戯曲にもとづきてつくまばなり
しるせる事のはげしうならぬの雛のうちを行雁の音をのみ聞てかたちを見ぞ
るが如くなればまたの名をしかよべるなり常言にそら言に似たり實にいふとも
實に似たるそら言にいふべからむといへるも人を誑をいたふあるべし此草紙に
しるせる地名年月日時人の姓名のたぐひ都てそらごとにてあながちに實をもと
めずたましく古人の名に似かよへるもあれどその唯假用するのみなれば實記に
くらべていふがふ事おろかり見む人これをいふのるよどおのれ素童をなぐ
さむるのみなれば俗耳にどほし雅言を好す無下いやしき言をもてしるしッ辭
勢をもいらすればにいと誤ッとおろかりたましく耳なれる雅言をもち
うるの戯曲の文をまぬかれん爲なり唯勸懲の意旨をうしあひざるを微意とす
るのみ



○ 燈臺鬼

源平盛衰記 卷之十 云 昔經大臣の遣唐使に渡されて形を他州にやつされ燈臺鬼と名されつゝ、
歸事を得ざりたり子息彌宰相其向後覺束なさる大唐國に渡つたづぬれとすく目の前に有
ながら明すものことなかりけれ父は子を見知つゝ角といひまはしけるとも物いひぬ藥をの
ませ瘧となされたりけれバそも叶ひを頼み燈臺を打れつゝ宰相に向て只泣より外の事な
し宰相はやつれたる父なれば面を並てしゝざりけり燈臺鬼涙を流しつゝ指端を食切て其血
を以て宰相が前角を書連ける

我元日本華京客

汝是一家同姓人

爲子爲爺前世契

隔山隔海戀情辛

輕年流淚蓬蒿宿

逐日馳思闕菊親

形破他鄉作燈鬼

爭歸舊里寄此身

書あらしたりけるにこそ宰相ハ我父の輕大臣共知けれ云々」

是正史實錄に見ゆすといへども盛衰記下學集等に載たればふるくハ傳たる事なるべし和
漢三才圖繪に此故事を記て大臣の歌を載

燈は影耻し身なれども子を思ふやみのかなしかりけり

大臣の子の名一決せず時代も詳ならず然ども河州古市郡に輕之墓あり知州高市郡に法輕
寺あり丹波の桑田郡に輕神社あり皆輕大臣の名を立り但皇極帝の弟宮み輕皇子あり是乃
孝徳天皇也其外輕と稱る名を聞き以上和漢三才圖會ノ説

雙蝶記總目錄

- ①夏草やつりものどもの 夢路の落人
- ②蛇くふと聞バおそろし 老女の懺悔
- ③五月雨やある夜ひろかに 遊偵の曲者
- ④木枯の果とありけり 記念の竹刀
- ⑤藪屑に花を見捨て 胡蝶の狂亂
- ⑥紫の蜘蛛あけけり 池邊の盗人
- ⑦さられたる夢とまことか 茂林の闘打
- ⑧宿かして名をさのらす 化石の鍋蓋
- ⑨鶴をりて日こそお不死に 和睦の酒宴
- ⑩むざんやな兜の下の 亡者の計略
- ⑪かひ無駕に夢をとられて 身賣の愁歎
- ⑫陽炎としきりに在ふ 牡丹の睡猫
- ⑬我雪とおもへをうろし 身受の千金
- ⑭白露や無分別ある 性命の質物
- ⑮窓鏡のうら世をいなす 主人の合力
- ⑯蟋蟀をくらる床も 野宿の妖怪
- ⑰面白ふて頭てかなし死 鵜養の腹切

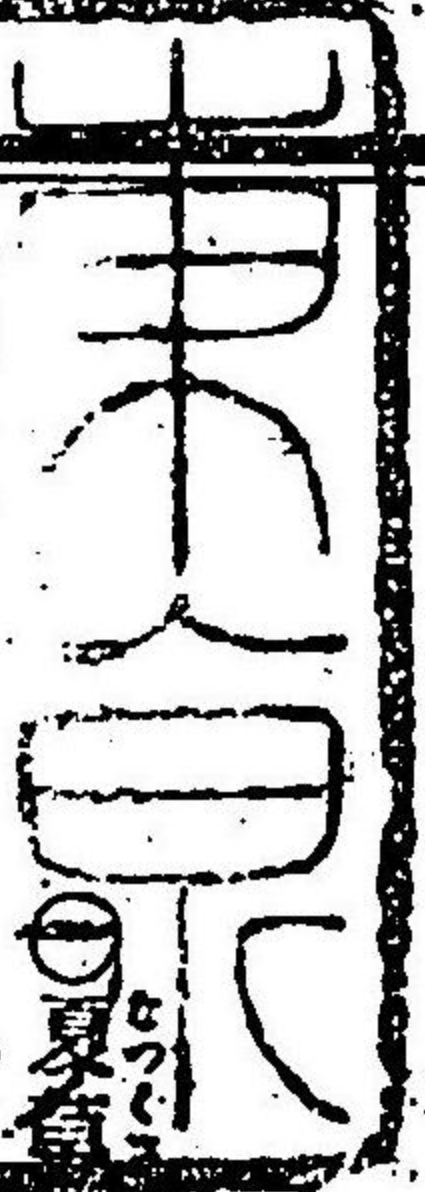
通計十七回

總目錄終

特11
802

吾妻 雙蝶記

江戸 山東庵京傳編



夏草や兵どもの夢路の落人

往時元弘三年夏草の露と消にし夢の跡愛世語を残したれ相摸入道宗盛か二男相摸次郎時行
 一家亡し後は天高しといへども 踏地廣しといへども 踏して一身をぬくに安さどころも
 なかりしかバ 傳國を 懸通し深山幽谷のうちに整して 再天日を見る代もがなと時節を待
 てるのりし 別れ給ふと聞てひそかに使者を吉野の皇居にまゐらせて奏
 しけるハ亡朝高時臣たる道を辨せしつひに滅亡を勅諭の下に得たりといへども 天誅の理
 はわたるもるを存せるに依て時行一座も君を恨を奉る處を存ひし天鑑あさくらに下情を
 照したまひ枉て勅免をくらふらしめさなり 宜官軍の義戦を扶け皇統の大化をあふさ
 げしと委細に奏聞したりけれバ主上これを聞し召れ不義の父を誅し忠功の子を召仕例
 なきよしもあらず 爵其罪あわたり賞其功に感ずれと善政の最なりとて 則 恩免の給旨の文

を日月打たる錦の御旗の裏にしるしてぞたまはりたるかくて延文四年二月のはじめ時行信濃國宮形の城よたてこもり此彼に身とひそめ居たる平家の餘類を催促したりけるに去る年箱根の水飲峠の合戦を父を打れ子を打れて仇を悪くむ兵等宿望たちまちひらねど喜ひ日をひて馳集る兵凡七千餘騎とさこえけれバ鎌倉に急を告る早馬磯打波のひまなきが如く礎打手のしげさよ似たりこれによりて鎌倉の管領諸將に對して軍略いかかど議せられけるにこれより逆寄して其不意を攻銳氣を挫き荒肝と拔にまっじと軍議己に決し月影个谷の判官照影を大將として鎌倉勢一万三千余騎日わらず信濃國宮形に馳着戦騎前よすんで蹄をぞろへ勇騎後お隊して誓をひかへ軍旗を翻し金鼓をあらまて関を控とぞつくりける城中より敵不意の逆寄に軍慮をこらし衛計いまぶ十分にどゝのいすといへども累年憤積して義心金鉄の如き兵どもなれり更お慮する氣色もなく變に應じて進退度を失ひせおめさ叫びて攻戦ひ射ちがふる箭は夕立の軒端をすぐる音よりも猶しげく打合太刀の鏗音のそらに應る山彦の鳴やひ隠もあかりけり爰に故相摸入道の家臣に大佛九郎貞直といふものあり前年敵をわざひさで一旦鎌倉をのかれ出相摸次郎をもりそだて、始終とあれす今いすでに

年五十歳に過ぬれども力量武藝ますます減せずなや當城にわりけるが此とき唯一騎城を遠くへあれて敵陣に馬をばしめ鎌倉勢の總大將月影个谷判官をえらみ打にせバやとこゝろざしけるり大膽不敵のふるまひなり敵兵にまさればやと兎をば著を白綾の鉢巻して乱髪を頭に颯と振かけ白糸威の鎧のうへに雲鶴の地紋ある丹地の錦の陣羽織を着き青鈍の大口をり貝鏑の太刀に豹の皮の尻鞘のけるる金作の小太刀を帶副大長刀と右の小脇に引そはめて白瓦毛なる馬の太逞、螺鈿の鞍を置燃立ばかりある厚總の鞆をかけてぞ乗たりけるかくて鎌倉勢のひらがる中へまされいり東西をいらひ南北へ追まひ黒煙を立て切てまゐるに寄手大勢ありといへども唯一騎に切立られて四方へ颯と引けるがさす大將のはとりへんちかづくとあさひざればむなしくおのれも知具麻川のこなたまで引退き手綱をひくりつ、早咲の藤波のかかれる松蔭に汗馬をよせて息をやすめ乱れたる髪を押あけて城の方をかへりみるにむらふの山間に白旗赤旗いろくの旗弄風にひるがへりて雲より落る花の波霞にまがひてすさましく貝鏑太鼓鯨波のとりまひすく聞へけり扱と敵城邊ちかく寄たりとねがねたりあな氣づりはしとおもふとりしも雜兵二人貞直が妻女更級といふあつさそひ

此ところまで落来りていひける敵兵一の木戸と打やぶりて城中へ攻入ひゆる御懐胎の内
 室をこれまで御供いししといへば更級もいなく妾懐胎の身にあらす女ながらも敵よ
 むかひて一方をふせぐべきよをりわしく産月なれば産の矢猛にやりいべれを身のいた
 き自由ならず彼等に扶かれてをめぐり避足をいせしとくちをしきいといふ大佛九郎これ
 を聞て打驚きさしていよいよ味方の安危ころもどなし我のこれより城中へひきかへ今
 一軍して敵兵をおひりへすべしといひすて馬をすいめんせしたるに更級は此とき急に産
 のりつきければ彼方も氣づかひ此方もさすだに見すてかなく馬をといめて飛くたりけるが
 此處のすべて墓原にて辻堂一つあるのみあれば雑兵どもに下知あして更級を辻堂ふすけ
 ゆかしめ堂中の頼をおふぎ見るに子安地藏尊とかさつけあればこれ産所に幸ひの表事と
 よるこび地藏菩薩十種の福を得せしめ給ふうちに一者女人産産と地藏經にもあれば佛前と
 穢ともさまでにくみ玉ふまじとて堂前に楯の板を敷ならへ桑山子のふる簀をとり來らして
 其上にしきかさねて更級ををらしめ駒口の鉦の緒と産綱とあしてとりつかしめ雑兵を腰抱
 としおのれもかたのらにありて介抱するに一人の雑兵うろたへまきひすいをぐねしき事

のいでさしど胞衣桶のつくにめる産節のいかに産湯のつくにて煖すべきあせいひつゝ
 馬盤をかへてあち走りこち走るを見て貞直の氣をいらち愚なる奴のあ人家に遠き野邊と
 いひかゝる戦場にていりでかゝある自由のたるべきやとく川水と汲來れと呵ておひやり産
 婦にそひてひたすら力をつけけるが陣鐘太鼓の音矢叫軍呼の聲知具麻川の張る音にひい
 さあひていとすさまじく聞へければ更級のしづ心なくどくくなやみて産かねたりりるを
 りまも郎等魚淵劍太といふ者汗もしどに走來りてひざまづ御註進つうまつると呼り
 ければ貞直のこれをさしていそがしく様子いりりいとくいと氣をせけり劍太の息もつ
 さあへすされれば敵兵すでに城中に攻入りいへをも味方の兵命を惜ます二の木戸にてふ
 せき戦ひといまづいひもをりらざるうちよあなた産婦息もたもけにいとやまじき体
 なれば貞直のあかたを聞さして産婦の背中を撫さす折もをり時もどさとして此産氣催生藥
 だにたくのへぬ戦場の火急の節さわり心弱くと産得まじおん身の常の女に似ず日來雄
 々しき心もちて男まさりの女なるよ四十歳すぎてのうの産といひいなたらなぞてさばり
 り心よわざと自よく氣をいげましてとく産といひて介抱しつゝのなさにひかひマテ其あ

どのいのにくと問うれば、剣太の汗をのぞひッ、まといひける、今中うせし如くにて、雌
 雄いまご決せずいへとも、味方の必死をさめぬて、戦ひ引鐘を聞て、怒りす、む太鼓とよるま
 びて、勢曾てたのみまうさ、敵は遠路を押来りて、勢はどくつうれいへ、旗色あしく、金鼓
 の聲も濁りて聞へいと、勢ひこみて告るに、ぞ真直のやうく、色をなはしてよろこべ、剣太の
 いく拙者の今度走かへりて、様子を見といけ、再、又御註進つかまつらんといひすて、飛が
 どくに走去ぬ時、又陣鐘太鼓を乱調に打らして、吹とわけさる、鯨波天地もくづる、ばかり
 あれば、産婦のこれに氣のやりして、あややと叫ぶ、勢ひに子がへりして、産おとししきりに、産聲
 をわけしうも、男子にてありければ、真直の味方の勝利の註進を聞え、又此安産あれ、轉よろ
 こびにたへす、雑兵に命と陣笠を盥むかへ、川水をくましめて、生子の身をさよめ、襦袢よりゆ
 ぎ物ぶにきければ、陳羽織をぬぎて、これより、み幸ひこれ、雲鶴錦世見の、いささ千歳の鶴
 の羽をのし、且青雲の志をおませしと、心の裏にいひ、抱きあげて、雑兵等にむかひか
 いる火急の時節、あれをかうくせよと、命ずれば、二人の雑兵のこゝろぬいといへ、辻堂の片
 扉を引ひきして、更級をのせ、おとささる、くぐりて、山越よ、ち行ぬ、扱真直おもひける、此所に

ありともし、敵にかこまれな、足場あしければ、便よからせ、且廣場に出て、城中の様子、味方の安
 危とも聞べしと、辻堂の鉦の緒をひきちぎりて、生子を我身にひしどく、りつけ、馬引よせて、ひ
 らりと、乘長刀を莖短に、牽りて、東の方へ、おかんとする、よ敵ちかく、寄りと、おねて、おめささ
 りふ、壁すま、まじく、さこゆ、生子、これにおび、なて、しきりに泣いたが、よく、犬の子と背をた、
 さ、おり上ッ、駒のかして、をひきかへし、西の方へ、ゆのんとする、に、な、よ、敵充滿して、鯨
 波を、吹と、あぐるに、ぞ前後の道を、よ、ぶ、おれて、いか、ます、さ、と、行、ま、よ、ひ、な、ほ、も、泣、子、を、な、ぐ、さ、め
 ッ、し、バ、した、お、ふ、を、り、し、も、め、れ、東、西、よ、り、敵、兵、颯、と、寄、来、れ、バ、長、刀、を、打、ぶ、り、て、三、方、へ、追、捲、り
 八面に、斬て、ま、り、真、額、立、割、軍、斬、或、ハ、母、衣、付、腰、車、袈、裟、に、り、け、て、ハ、左、右、に、さ、バ、ク、せ、双、膝、な、ぎ
 て、ハ、の、つ、け、に、お、ら、せ、抱、し、生、子、を、か、バ、ふ、に、ぞ、十、分、に、ハ、た、ら、さ、が、た、し、と、い、へ、ど、も、力、量、武、藝、普、通
 奇、ら、す、三、歳、の、幼、主、阿、斗、を、抱、て、長、坂、坂、又、戦、し、趙、雲、に、も、を、さ、く、お、と、ら、ぬ、其、骨、柄、神、變、不、思、議
 の、ハ、ら、ら、に、敵、し、り、ね、た、る、木、葉、武、者、四、方、に、ハ、ら、く、散、失、た、り、真、直、ハ、な、ほ、も、生、子、を、ゆ、り、あ、げ
 ッ、息、を、休、め、て、居、た、る、處、よ、以、前、の、郎、等、劍、太、裸、身、に、雜、鎧、を、着、城、の、水、吐、の、穴、を、く、り、出、し、と、見
 ぬ、て、身、上、ぬ、れ、て、平、を、た、ら、し、ッ、走、來、り、陣、笠、を、地、上、に、お、ら、り、と、投、捨、て、手、を、つ、の、へ、又、御、註、進、ハ

と告るにぞ貞直のこゝろならず様子いかにとためねれば劍太一息ついていひたる味方の兵必死の戦に敵の人馬の大につうれて己に落足にありたる處におもひつけず月影ヶ谷判官の家臣山咲庄司雪森といふ者荒手の兵數千騎をしたがへて押來り城の後にたちまひりて矢を射ると雨の如く精兵あまらざる面もふらす掛やぶひへばさすがに猛き大將も軍略盡給ひて後をのらんとし給へば前の敵是をのたまんとすみより前にむかひんとし給へを荒手の兵後よ打ち入り變化自在の術尽給ひて味方のこらす打死し御大將も御腹めされいとしとれりへりて告げれば貞直のまれを聞て大にたどろき喜びの色忽變て愁眉を翠何御主君のはや御自殺ありしとか智勇万人にすぐれ給ふ御大將十に八九も勝べき軍に甲斐なく打負たまふことまつたく南朝の王威おどろへさせ給ひ聖軍徴にならせたまふかもあるなりあなくちをしや残念やど或の怒り或の悲しみ牙を咬拳を握て落涙し主君の命といひあから我一騎遠く城をのちれ總大將を打んとして打も得ず主君御自殺の場にあらざるの不忠の至なり己に大將うせさせ給ふらへり我一人生どいまりて何かせん此ところにていふ言よく打死して死出路の御供いたせしなりながら今生れたる此孩兒を此儘こゝに捨給きて敵

の馬の蹄よかけ殺せんも不便あれば汝の此子を抱きて山越に落行更級があとをわひて渡しくれよ此子成長の後父の遺物を見るべきため此一品とぞいふしとて鐘のひき合せより香包をとりいだし此裏あるの身摺といふ名香あり是乃揚貴妃が椅子の木のきざりにて常に貴妃が身をよせておのづから摺る木まるゆゑに身摺といふ名づけたり此子づゝがなく成長なれば語りさせよといふ折しも友におくれたる歸雁雲井におどづれければ矢立の筆を染

まゝさんと頼の雁の別路の待問ひさしき名残なりけり

といふ一首の歌をかか香包の裏まきつけ親子の三世の縁なりといへど父子再會は待問ひさしき百年の移冥途のみたのみなり今生れ出て今わかるるといふよく海を親子の縁なりと猛き心も子によどりツ、目をもる涙はらくと落のれれば矢並つくらふ針のさへに敷たばしる如くなりてかか香包を孩子よそとて陣羽織に包たる儘劍太に渡せし劍太これを受け取て悲歎の涙せだあへど主人のわれをしてけるがすでに苦形落城せしと見ぬて黒烟さちのり烈々たる兵火天を焦しあまたの敵兵あはくおちと凱歌をまぐる聲百連の

雷の一度にみつ如くひいさ渡りけれぬ貞直のこれを見て無念の落涙はほとよめかねしが
が剣太にむかひ汝此處に猶豫しても老敵兵に山道をふさがれお其子を扶て行とあたふ
へうらす名残と盡すといく行といそがられん剣太は是非なく涙をのこひ山道をこしてお
ち行ぬ貞直の子とおとしやつて今心安しいでく花くしき軍して敵兵に目をさませ
せさのやの打死せばやとれもふにぞ日來の勇氣百倍して敵ある方を馳ゆりんとしたる折
しもむかひの方の森のうちより弦音たそく漂とひいきて一節の箭飛來りくはらなる松の
木にのりしと立ぬ貞直これを吃と見るにこれ矢文なりけれぬ馬をよせて矢をぬきとり結ひ
つけたる文をひらき續をりて打うなづき巻おさめんとしたりけるに忽一陣の颯颯と
吹來り地をすりて砂を飛しくの文を虚空のるかに吹とりなれば其おとをしひ行んとした
るをりしも鎌倉勢及腕波を吹とつくりて四方より馳來り貞直と取りこみて我討とらんと競
けり貞直のこれを見て阿々と打わらひ命あらずの業武者をも我と打んと寄來れぬ夏の虫焰
を惹てみつら身を焼よ異ならずいでく汝等が體にかりに宿せる魂どもを我此大刀の
下に追出して冥途へすみのをかへさすへし手なみを見よやとよバトリツ、大長刀をひらめ

かしてむらがる敵の真中へわつて入御手結東十文字縦横无盡にかけやぶり火花を散して戦
おど駒の足あみとらくといるさ鎧のりな物からくどありひいさ火雷神のあれたるも
かくやといふ勢にて組んどちかつく兵の鎧の揚巻かいつかんで三杖五杖をのり投わた
せば其人礮にあたりたる兵等の四五人つれて前なる川中へまつさうさまにぞおち入ける
敵のなや横合より矢ぶすまをつくりて敵くりに射りけるが貞直のこれにも屈せず射かく
る矢を幾筋もなく切落し逃敵とおひうけてのるうかなたへ馳おさしがをりしも川霧立へ
だてしをらく其姿見ぬすやありて山風霧を吹いらひ貞直が又こなたへ來るありさたを
見るに馬も乗たふしけるにや歩立にありて長刀を杖につさよるめく足も痛手のよこり身上
あまたた矢を折おけて枯野に残る冬草の風に臥を異あらず全身血よそまりて白糸威もうち
まちは緋威と變じ鎧の袖の三の板を切おさされ草摺の横縫皆つぎ切れを威し毛バウリを續
きける今のこれまでとやおもひけん跡をつけきたりて組つらんとせし敵二人を左右の小脇
にかいはさんで提のうへにかたのぼり汝等死出の供せよとよバトリツ、知具麻川の深淵の
淵巻うらそをと入り白濁つと飛散てをしむし庭の氷屑となり果つ唯張る水の音の

みぎ振りける鴨呼此日いかなる日かやすなるは是延文四年三月十五日の事なりとぞ

○じさんやか兜の下の亡者の計略

さるやとに魚淵太刀生子を抱き山道をさして落ゆさしが鎌倉勢のやとて、良も立まのりて道をふさぎ落人をつちとんとらへたる様子なればせしむるべき處の所に立もどり東の道より落ゆかんとしたるにかなたよも敵兵のめく懸すまじく聞ぬて近よみ寄さるる様子なれば心の矢猛よのやれさも双拳四手に敵もたたく殊に生子を抱きたればもし此所まで敵にとりかこまればなをめぐりと打るべし目身をかきし敵の退くを待てのたれ行ばやと思ひかの辻堂のうちに入て見まのしけるに軒端かたふさ壁くづれたる古堂あれば雨風通ふせきあふき体はて本尊の大なる木佛の地藏なるが楞目に苦あめらかにして肱のあたりは寓木を柱し箭幹竹膝をうぐちて生出より石の佛具のありながら香華を供養するとも見へす盛うづたかくつもり木の葉まじりて狐兔の足あとを印し梁にの燕子巢といとなみ蜘蛛網を對すべりいせせまき堂中なれと身を隠すべき所なくいのにすべきと思ひけるお地蔵尊の背後の隅のかに箱の所にわたらしき箱桶一ツありてふるさ卓圍をおへりこれ幸に

人の氣のつかぬよさかくれ所なりとおもひ繩をとさ蓋をとり死人を引いさして佛坐の下の空なる所におしこみおさたのれい生子を抱きながら桶のうちに身をちよめて卓圍をひさのづき息をこらし居たりけりかゝるとりしも百姓とおぼしき者四五人道心坊を前に立或の卒塔婆を持あるひの櫛の枝を提念珠をつまぐるもありて此堂中に入かの箱桶をかかげ出んとして繩のとけあるをいふありやがて卓圍とりのけたるに劍太の敵に見いざされしと思ひさかへ運輪のつきたる所とおもひつゝ桶のうちよりをどりいで片手にの生子を抱き片手にの太刀を扱よらる切んと身がまへたり道心のこれを見て且さきに魂をうしなひ亡者おはやく幽霊になりて出しと思へたがへわつとさけびてのけさまに倒たり百姓をもと皆將共だふしに尻餅つきてうちわなゝ人ごゝるのあき体なり劍太のこれらをよく見ると敵兵よのあらで野邊おくりする者等とおぼまければ太刀を鞘よをさめていやく汝等おどろくうべあり我の子細ありて此桶のうちにかくれ居たりといふ百姓どもこれを聞てやうやく人ごゝるつゝ俄に強くあがりてまくり手しツ、いふやう汝何等の者なれば他の箱桶にとりもあかくれ居て我くにはゆゑ肝をつぶさせたるぞ亡者をばいかにせしむと腹立げに

いへば剣太いひく亡者なりしに隠れぬまづ汝等いつくの者ぞといふ百姓ども剣太が
ありさまでよく見れを裸身に鎧を着太刀と帯たれば又少しこいげつき言とあらためて
いひく我くのかしこの山の一ツあなに住者もなるか今日此邊軍あらんと思ひい
はす此桶の亡者の村に住者もなるか今朝往生いたせしゆえ日暮なれば此所よて烟
とあさばやどりりに此堂中に入おきたるに此邊すべて戰場とありて往來ありたければ
しこの山道とふさぎたる軍卒にやう／＼とわりをまうして此に來りいといふ剣太いふや
うかの山のあなに住者ならば故相模入道殿の御恩をうけゆる百姓どもなるべしかくいふ
我の故人道殿の家臣大佛九郎貞直が郎等あり此生子の主人九郎殿の子なり九郎殿の今日此
所にて打死し玉ふ我の主人の遺言にまかせ此子を抱きて落行んとおもへども四方に敵充滿
してのがれ行べき道なればせんすべなく此桶のうちを隠居たり汝等故入道殿の御恩を忘
れずのからくしてくれよとさ／＼やけに百姓ども口をそろへさて左様にいひ代々入道殿
の御恩をうけゆる我々なればいひのでか仰を背くべきといへば剣太喜びやがて佛坐の下より
亡者を引出し鎧をぬぎて亡者に着せかう／＼せよとまた毒の百姓どもに打うなづき堂前よ

すてありし陣笠と長刀をひろい取てまづ笠と亡者にかぶらせ卒堵を横に亡者の両手をく
りつけて長刀を杖につかせ一人の百姓がいひけるいひくに鑑平これ見よよと武者ぶりに
あらせやといへばいりさす鉄助がいふ通り馬子にも衣裳亡者にも鎧じやとても薪にしてし
まふ死骸土はせりの身でかりよも一騎の武者とあり百姓の身で着ることならぬ鎧を着麻幹の
杖にとかりて長刀を杖につき死花咲せてお役も立どい仕合せものをつぶやきッ、松の木
によせかけておけを剣太は裸身よ太刀をわさばさみ生子を抱て桶にすつぱり身をくす百
姓どもに立寄て蓋をおひひ繩からげにして卓圍をかけ棒をどやしてあ／＼けいづれを道心坊
のさきに立鈴をあらし經を續ッ、山道をとみて行けるにむかふよ羣る鎌倉勢うれ落人よ
どひしめさしがちかく來るをよ／＼見てみるしづまれ落人へのあらずささやきとひりを
ゆふて通りたる野邊れくりの百姓どもあり戰場にて棺桶の見るもいまいしとく／＼行とい
ひて顔を背け道をひらきて通しければ桶の内の剣太いしすましたりとおもひさいひに生
子の泣ざるも神佛の擁護ならぬとよろこびぬ百姓どもい足をこやめて過去ぬ嗚呼生子われ
ハ亡者なり生死流轉も一時に修羅の街を騒がしきさて此とさいすでに黄昏のころにてや

彼の暗くなりけるがこなごにの鎌倉勢馳集て松の木よせかありし亡者をのるかよ見
 つけたるか大佛九郎がいたらきよ手とりして臆病神のつきたる者せもなればちかくもす
 ませ且評議していひなるのあれ見よ松と小ぶてあと長刀を杖につき大手をひろげて立
 るの大佛九郎が郎等にうたがひあし彼奴もなみくならぬ者のよし立合の勝負にやくあ
 骨ををらんよと這矢にかけて射殺せといひて矢ふすまをつくして射かくる矢雨霞の降
 るにひとしけれぬやと射ても身じろさもせされを哀や彼奴の立すくまになりぬいで
 で首をとりて手柄おせんきといひて我先とありそひて粗んどちがつ兵の肩へぐにや
 とたふる亡者どつこいさせぬと身をひねりて唯一打と斬つくる血さへいでざる死體
 るめく亡者の生るが如くうなごにうぐいふ兵の背中よせつさ手ひならくンヤこしや
 くまりと叫びりッ、とらふる手ささの冷さにも心のつかぬ臆病武者さこもついてもひ
 るまぬ亡者うち物業にてうなまじと大手をひろげて粗つけばこなたも加勢に亡者と相手
 くんづはぐれつあい／＼聲操合ひやうしにバつたりと亡者の隨笠地に落たり二人の武者の
 いぶかりてよく／＼見れば髪を亂して色かへり頼み三角の紙をあて経帷子のうへお鏡を着

て居ふりければ兵等はあされのて是に正しく亡者なり千刃破の城の藪人形捕もささの
 謀計にのせられてあたら矢種をつひやしつるくやしさとといへを跡にひかへし兵どもは
 と笑ひて一同に陣所をさして歸りゆきぬ〇かくて東西の山／＼に吹立る揚貝の音幽谷響ひ
 ひいさてすさましくちちこちに散在したる兵どももひく／＼に集りなれば總大將月影个谷
 判官甲冑美しく馬上にて歩卒にあまたの明松をとらしめ知具麻川のはとりまで出來りて
 諸軍の戦功を賞けれハ家臣山咲庄司雪森馬をくぐりてひさまづら勝軍のよろこびを相のぶ
 るかゝるをりしも庄司が郎等南方十次兵衛といふ者南朝の帝相模次郎にたまひりる日月
 の御旗をうばひ取て馳來りうやく／＼とくさ／＼けて主人庄司は渡しければ庄司はこれを判官
 にてまつる判官これをおさめてなめならす喜び陪臣なれども十字兵衛が大功拔羣あり
 と賞美のあまり朝鳥となづけたる刀を手づからたまひりければ十字兵衛の面目身よあまり
 あまた／＼び押戴て帯たりけりさて判官の陣所をさして歸りゆくをりからの臘月も明松の
 光りにけをされ馬のいな／＼聲さへいさましくぞおやえけるが山咲庄司もふた／＼び馬に打
 乗十字兵衛等を率て後驅をしだりけるが忽颯と吹ぬるして夜風につれて一ひらの文虛空よ

りひらめき落て庄司の兜の鍔形にどか、りける是則かの矢ふみなり山れるしに吹もどされ
て此所に落たるならん庄司のこれをとりに十字兵衛が明松をちかづけ夜露にしめりて讀がた
死をからうじて讀をいり何か心よ思案して打うなづれ行列打せてす、みゆさぬ

③蛇くふと聞バおそろし老女の懺悔

さても時光のすぐること水の流るゝに異なり金鳥玉兔の足いちばやく走り一夢ばかりの
間に十歳あまりの星霜と経てとやく應安三年よどいよりける此とき相州鎌倉の小動といふ
ところに駕籠の塵兵衛といふ貧しき者里をとなれて一つ家を作て住けりこゝの古き歌よも
こゆるぎの磯の松風音すれバ夕浪千鳥たちさぱくなりとよみたる所にて浦ちかき苦家なれ
ば風いどあしくものすこくて浪の音松れ風常あたへさる所なりかれを駕籠の塵兵衛といふ
いかなるゆゑぞなれば常に此鎌倉道に駕籠をり、げいで、往來の旅人をのせわづかの賃
錢をとりて朝夕の煙をたつるゆゑに異名をしりよびけるなりかれ今年齡三十七歳に至妻の
於破矢といふ年の夫に二ツまさりて四十歳まらうし前の夫は樂人にてありしゆゑこれのつ
から舞をなりひおぼいたるが今も諸社にやどいれて神樂をまひこれを活業のたすけとし子

の男女二人をやしあひぬ姉の名を小蝶といひて十四才弟の蝶吉といひて十二才なり兄弟と
もに貌容うつくしく花よりも清く雪よりも妙にて玲瓏たる一双の珠玉をあらべみる如く楊
貴妃のをさな立業平の童姿もろくありつらめどもゆるゝをかりなれば里人等これを
て驚の巢に鶯を育るにひとしなせいでうらやまぬ親の身の勝更にいづくしみ深くかの
竹取の翁が赫奕姫をやしなふ心にてするたのもしくぞ思ひける弟の蝶吉をば物學びのため
霧が澤の月輪寺といふにつかはしおき今い姉の小蝶をのみ家にやしあひおきぬさて一日塵
兵衛つねのとく駕籠をり、けて出行稻村が崎の松陰よふろしをきて人のやとふを待居たり
るも此稻村が崎と東北の經路盤曲して極樂寺の切通につゝら西南の海水森漫として江之嶋
を眺望す月影谷の木枯の梢をゆせりて黄葉を飛し七里濱の高波の磯をあらひて白玉を散せ
り遠山遙峯平砂曲岸の好景いひ盡くすべうもあらささて塵兵衛の駕籠のうちより尻りけて
往來の旅人よひかひ駕籠よめさすや駕籠くどよび居たるに諸社の宮奴にやといるゝをな
りひとける幣又といふ者烏帽子に白張をひたかけて極樂寺の切通しの方より來つねな
松陰よあぐみ居て天道邪こりしッ、塵兵衛に向ひいつもくよく精が出るよといへば塵兵



周茂

衛いにく昨日の大雨にて旅人もまよされ少しの銀も取す素手ふりてりへりまゆる今日と
 昨日に引ひへてよき天気なれば二日振の銀をと思ふて聲かるるバウリに呼ひくれぬふり向
 てみる奴ごになきつといへ幣又は打笑ひ昨日星の御堂の軒下でさしかける將基の勝負せよ
 いか「チ、昨日の駒組おぼけて居る銀がとれぬで此方も退屈」チ、慰にさして見やれと幣
 又いたづらへる懐中將基を取出して盤の紙を芝のうへにおしひらけと塵兵衛もひらひ合
 らうひまならぶる駒の數磯の小石を貝殻の歩の不足とぞ見ぬにけるならべをひりて塵兵衛
 いとくゆふべから盤上をぞくと見さため工夫をさ相手とさす「ちと強もの先手は和主か」
 イヤさしやれ「まづ飛車さこの歩をつかふとこれを將基のいじめにてたがひに手敷をさし
 けるが幣又の類づゑついで盤上をつらくと打あがめ「これ塵兵衛此通双方の碁子をゆら
 ぬるの魚鱗鶴翼常蛇の形是乃戰場に敵味方の對陣したるに異ならずいやしき我等
 タ口からせうばはかしてけれと今己に南朝北朝二裂にわかれておはしまはす此盤上の王
 ん駒の二枚あるに同からずやといへば塵兵衛打うなづさいのさま和主がいふ通二枚の王の
 南朝北朝角よひとしき名大將足羽の深田に駒をおとし飛車とはたらく楠ぞのも湊川よ

ひだ駒を打ちらし武藏野の手見禁に勝はこりたる頭のとのも桂馬の高上りして家の鼠の
 歩の餌食と成果られそれ見や和主の駒のやうに南朝の王の駒の吉野の奥盤上の片隅あれ
 ひしまし一手か二手で撥にならふ哀な事といひければ幣又の胡盧イヤさふいやるな北朝方
 の足利家今の盛に不これせも此方の手にも駒があることこのいづくも名將がかくれあらんも
 ひうられぬ金將や銀將が王城をいかはと堅固にうづつても歩も成金の時を得て官軍の桂
 馬の駒をかう打こんぶらなんとする「イヤ香車の鎗の野猪武者桂馬の高飛およとぬ事」とこ
 ろをおれがと打こむ駒「歩であしらふてせかす駒」なむさんこれいど退駒たがひにいどみあ
 らそひておはも手敷をさしけるが寂前よりかゝいらに鷹をうぶりて書寐えて居たる野ぶせ
 りの乞食目を醒して欠し伸し頭を掻ッ、此方の將棋をさしのぞき「あなあやうや油断した
 ら北朝方も揃づめにならふもしれぬとへば塵兵衛のこれをきいてふりうへりとちらぶ
 口からいらざる助言がまづて居よとねめつくれぬ乞食の口をつぐみて天窓から鷹をすつば
 り又臥ぬ將棋と勝負またつかすなはしばらくさしけるが幣又がかの負色にて不ぞく撥べ
 く見ゆければ幣又は負ばら立駒をかきよせひつ摺て大地へぐわらりと投付れり塵兵衛も目

尻引あげ目にうとてたがひに面をのからめけるよくくおもへば身も應せぬやくささ
 詞のあらそひと心つきこなたが笑へばかなたも笑ひさのひに呵々と笑ひけりうくて幣又と
 投ちらしたる駒を集て懐にそさむる折しも極樂寺の切通しの方よりぶつさる羽織に野袴
 のき肩を打ふり臂おしとりていいつがまじさ旅さふらひ落葉を踏分ッ、こゝに來り膝澤の
 宿まで此繩籠をやとふべしとく乗よといひければ塵兵衛のこゝろぬひといひッ、相棒
 の泥大いづくへ行しやとあたりを見まひしけるにゐるかひりふの十一人塚のはとりの沙
 深き所に倒ふして居さりければいそがしくはしり行てよび起せと熟睡して目をさます
 旅さふらひは氣をいらち我急の道中といひのる日みじかのときなればすましの間も猶豫
 あらむ相棒が間に合すは先へおきて別の繩籠を雇ふべしといひすてよゆかんとするを幣又
 よりてまづしぱらくとひさといめこれ塵兵衛の泥太ぬいたく酔たる様子あれが呼び起し
 る所が急な役よの立べからせ今のあらそひの中なほりよこちが片棒手つたふて行べけれを
 はやく此御方を乗まいらせよといへば塵兵衛の喜ひッさふしてくれ、都合よしとめし
 ませと繩籠をとりておしむくるさふらひは賃錢を論じてやうくさめ今何時よやと問

ふ塵兵衛日さしをみふぎ見ていまだ未の下りにもぬんかといふ幣又もどもに此松の影異
 よかたふきて見ゆればいかにも其ころよははんといへばかのさふらひは打うなつた日みじ
 かのころの旅なれば心いそぐとし随分いとげといひッ、駕籠に乗うつる前棒と塵兵衛と
 棒と幣又が烏帽子白張宮奴の形もろくむぬ片相手我肩のかさじけなくも神輿をかつく肩
 れと駕籠をかつくも讀と歌酒代の錢をねもへばこそとつぶやきッ、かつきあげらる旅駕籠
 の垂に吹込沙烟「ヤッサコリヤサ」ちやうさやようさとかけて聲も足もそろぬ富士三里七
 里が濱の波打ぎのを千鳥ぐけにぞはしり行ぬ

○寶珠座無二堂宇一勝康縁容二數百人一と萬里居士のつらねたる鎌倉深澤の大佛のかた
 らに人あまた羣り物をかこみて立たり釣する翁牛おふ童磯菜つひ姫貝とる蟹のたぐひまで
 旅人まじりにおし合て我ささどおしあひぬこれ何と見るなれば白髪をいたく旅の老女礎
 む尻かけちいさあじろの笈と管笠をうたひらにおき竹杖にすぶりてやすみ居るを見るな
 りけり此旅の老女や、ありて諸人にむかひ妾が身の因果物語を懺悔のため語りて聞せま
 うすべし妾の丹波の國の山奥に住獵師の妻なるがま、娘をふかく憎みて平日に身上を撮爪

たていたためくるしめたるをま、娘のあまみ谷川に身を投てむなしくなりぬ其報いにてつ
 ねに娘を撮る大指のささしきりに痒くなりてたえがたかりしがつひに蛇となりて人のま
 じりりなしぬ身といなりぬこれ見たまへどもひて右の手先にねはひたるものを取のけてさ
 し出すと見れば大指のささ目口、鮮ある蛇にて心のあしにやうとめくやうにて見るさへ身
 の毛とバぶちぬ老女又いひけるこれよよりて妾先非を悔ちちまち日來の悪念をひるのへ
 して菩提心と起し諸國の靈場をかみめぐらば罪障を滅するよすがともなり指ももとの如
 くになりもやせめどかう思ひたちはべりぬ懺悔に罪を滅せるとかうけたまひればみづか
 ら此事を語りて聞せまうすなり此鎌倉より蛇谷といふ所もあるよし昔語りとして聞しとも
 とべりそれは妾の事なりて嫉妬の心よりどうけまいるされど大指の蛇となりし因果
 のおなじとなれを當地の靈場を拜むつひでに其舊跡をも見むやと思ひはべるなりといひて
 いどわびしげあり立集ひする人々これ聞いてあなれそろし物のむくいづらぐぞあきるの
 いる奇怪をそのあたり見されを實しき事ども隠すこの世の人のよき戒をといふもあり
 あきめづらし前代未聞又たぐひなき話柄ぞかれを見せ物にせよ福を得べきに錢も

とらで見するの惜き事にといふも有り轉の心ある者の一錢二錢をたへて去心せし輩と
詠歌うたひかけてゆくも有りおのがさましく敷行ね彼老女もやめて身を起腰をのしッ、笈
を背おひ笠をたづるへ竹杖をつき稻村が崎の方へ去ぬ

④かゝる駕籠に夢をとらきて身賣の懸歎

夫は初おき駕籠の塵兵衛の旅さふらひを乗駕籠をうけて道を急ぎ黄昏の頃藤澤の宿に到
りけるにさふらひは駕籠ををりて賃錢を拂ひいそがひしげに足をはやめて過去の塵兵衛の
幣又に賃錢の半をわかち與へてうら駕籠を穿つらみちから四方山の物語りしッ、小助に
歸けるが幣又は塵兵衛の住家の門ぐらよて別をのけてかへりけり塵兵衛の我宿の片折戸を
おしわけて裏に入ら娘小蝶走り出けふはいつより御歸の遅りしさを草臥まひつらん
足そよぎてまゐらせんといひッ、盥に水を汲入て持出すつから父の草鞋腰巾の紐をときて
足をそよぎきとするかひくしさに常の孝心あつたぬ塵兵衛之身上の埃と打拂ひて簀子
のうへにはおかり圍爐裏のはたに寄て薪火焼足ふみ出し胸うちひろげてあたり居る娘のまつ
茶を汲て父よすしめ夜食もどく持ちへて待おひぬたふへ給ひなんやなど詞やさしうもてあ

しぬ塵兵衛の家内を見まこま放破矢のいづくへ行しをとなづぬれば娘のいづく母さまの前程
鶴ヶ岡の夜神樂にやといれてゆき給ひつるが酒も買て戸棚におり老爺さまの歸り給ひいお
けませといひたて出ゆき玉ひつといふ塵兵衛おれを聞鶴が岡の夜神樂といつも終夜なれ
を明日の朝さらでい歸るまじこれやと夫婦ともかせぎにしても前の世から持來る貧乏とせ
んすべあしなと云ッ、もの喰酒飲や身うちあたまりておのつうら盡の疲出けるにや覺す
ぬふけいで臂枕して横になりはやく野の聲いでぬ娘は父は裾に物かけんと庭にそゑおれた
る駕籠の蒲團ととりたるに其下に柳條絹の財布有ければいふかしまッ、父をとり起し駕籠
蒲團の下にうやうなるものありしおおねあるものにやといひッ、父にみすれば塵兵衛と
これを手にとり灯火のもよて毒をあらためみるに小判金七十両ありければ大におどりた
あれはまさしくかのさふらひ我駕籠の内に忘れおきたるに疑ひなし今夜と藤澤の宿りもま
さらすに近くて平塚遠くて大磯には宿りつらんはやくこれを持もきて旅宿をたづぬりへさ
やといひいひとがどしく身じたく財布を懐よして走りいでしが波間より氷で出る月影
を雲にふらして暗かりたれば立ち立もどりて明松をどもし娘さみしくと留ませよといひすぞい

又走りいでし夕里遠のらぬ鐘の聲の月に和まて聞ゆるをかぞふればや子の刻なれば立と
 いまりて思案しけるはかのさふらひの旅宿をいづくところかしらされをうく夜ふけては
 たづぬるにも便わし、かのさふらひかゝる大金と忘れたればよも先へはゆき過まじあどへ
 もせりてたづぬるの必定なり駕籠の座兵衛といひては此道すぢに誰しらぬ者もなければも
 しのなたよりたづぬるも知れやすからん今夜と且どいまりて明日未明にいでぬき彼道す
 ぢをたづねてかへさばやと心を決して又立もどり娘ももうやうくと思ふやうを語り聞せ
 かへさぬ内之兎角心すまされども今夜こそせんすべあしといひてかの財布を佛壇の下なる戸
 棚の中にしまひおき娘に酒飯の器などとりをさめしめてみづから門を鎖し着がぬだにきけ
 れば着の儘よて親は古夜着子は薄き蒲團をおはひ寒夜をしのご浮梁鳥籠屏風にすぎ間もる
 濱風をふせぎッ、しばらく睡につさけるが小夜もやうやく更わたり巖ふわたる波の音吹々
 とひいさ松につるふる蒲風飄々どありさやぎうちよろおひふる苦家おれば地震のふるやう
 にゆらくと動いていささがしきければ住まれし身は常となりて耳がしましとも思はず殊に
 座兵衛は壁のつうれすよく睡ぬ常に目さとき娘も一ツの胸いでくへさつしよやわりけん

どもに熟睡したりけりゆる折しも蘆垣をぬし破り壁をこぼちて盗人しのび入ぬこれと晝
 のほろ稻村の崎に臥居たり野ふせりの乞食あり前程ふと此ところを通りゆよりて様子をと
 くと思といけおきたれば杖足しッ、親子が寐たるうへをまたき越て佛壇の下戸棚をさぐり
 かの財布をうらひとりて懐にし立出んとせし夕灯臺を枕上におさてよく寐入る小蝶が
 寐顔のうつくしさにふと目をとめて立もどりしばらく見とれて居たりけりこの娘貧家に
 養れて養脂白粉のいろとりを假ざれどもおのづからなる美態なもいられず玉もてつくれ
 るやうにて寐乱髪の種類にこぼれかゝりたるさまとつ花のさくらひらたたるに青柳の
 糸を乱し懸たるにやと思ひる、ばりあり此盗人のさたいりなれを月代の毛長くかひのび
 て面をつゝむ手拭の破れ目よりあなめの薄のやうにつらぬき出の眼光り髪がちにて身材高
 く身には海松のやうに破れぬるとさ衣の襟襷を着てうへに破れたる帆席をまとい繩を帯
 にして身上すへて垢つさいとさたなけなるが娘の寐顔をさしのぞき光るまなじりをひるか
 へして見るさ中翫の巢を角鷹のうらゝんに異あらず此盗人心のうちよさても世にいかゝる
 うつくしき娘もあけりよと思ひ現心もなく後ふはちのうと顔さしよせてなほ見とれ

けるが此とき塵兵衛ものにおりぬれやしけん寐がへりしければ盗人おれに必つきて足バやに逃出七里が濱の方へ行ぬ時に此あたりちから蘆屑村の獵師夜釣のりへり愛の濱ふ獵船をのりつけて陸に上り立まよふ雲も夜風に吹はらひて影すさまじく住月の光りにつきて見るにかの盗人波打ぎこの巖に尻かけて懐より財布を出し金をかきへて居りければあやしき奴と思ひつゝつと寄に盗人と手バやく金ととりおさめて優々と歩行獵師どもと其ゆくさき立ふさがり後にも立ておのゝ擡をれつどり盗人の眉間をのぞみて打かゝるを盗人の懐手しながら身をひねりてこれをさくれバ一人の獵師と盗人の向脛をなきたふさんと拂ひ打にうつをさそくをわけてをどりこの高砂と蹴散してしばらくあらしけるが獵師どもとなほすさまもなく左右ひとしく打かゝるをとく身としつめて背後に立バ三人の獵師ハ入身になりさぐひに頭を打合て眼くらみ擡を撲地と取落きて隣踏所をぬす人は二人の獵師の首頸を両の手にかい掴み絞んとしたる後より又一人組つきぬこれも屈せず盗人の二人を左右へ投のける腰をひねり足を飛して一人をいつしと蹴たりければ三人どもに四五間飛て海中へまづさるさまにおちこちの浮巢鳥の群をたどりまさはつと立たる水煙めと白波と

盗人の行方もしれずありにけりかくて時刻やうつりて冬の夜の長さもすではあけおんと去て鳥のこゑ聞ゆれば塵兵衛ぬふりを醒して見るに壁くづれて其おひびより江の島のあさりまで深ながら目見わたされければこわともかにとおどろき起上りよく見れを泥足のおともわれバこの盗人の入るあらんといそぎまきひて戸棚のうらを見るも財布なけれバますくおどろき扱の何者ありの財布の金の事を知て盗みにいらたるにうたぎひなし何にもわれ盗まれてといひわけなし今にもかの侍たづねて取に來らバぬすまれさりどいふとも豈實とれもふべきや我かく貧乏身おれバうたがとるは必定なり天道は人を殺し給ふかこゝいかにせんくといひて虹のやうなる島を吐手を拱頭をたれて居たりしが娘も目を醒して此事を聞どもにおどろき父の驚るさまを見つ胸つぶれて泣居たり塵兵衛のさく思ひけるの彼金の事を別に知者のあるべきいれなしうたがはしさと相棒よたのみし幣又也彼奴昨日將甚におどらへてさぐりおひたる詞のはしく唯者とは思はれそ彼といひ是といひうたがとま事おかしまづ彼奴を捕て執明すべしと思ひさだめて走いでんとしたる折しも昨日のさふらひ蘆屑村の百態どもに案内させてこゝに來る塵兵衛と走出る門

首くちらめて丁ちやうと面おもてを合あせけるがさふらひは塵兵衛ちんべいを内うちへつゝ入いれそがひしく息いきをつきていひける
 の汝なんぢの柄やうをうらうじてたづね來きつ我昨日わがけふ汝なんぢが駕籠かごの敷蒲團しきふとんの下したに柳條絹りやうじょうきぬの財布さいふに金七十
 兩りやう入いるを忘れおきたりさぶめて汝なんぢ取とりさつらんとくくかへしくれよといふ塵兵衛ちんべいの今
 さら狼狽ろうたふ何なにと答こたへ詞ことばもあつくしバし答こたへたゆたひけるがわりの儘ままにいふにしかじと思おもひある
 はせ其金そのかねの財布さいふのゆふへ宿やどにかへりて後のち見みつけ早速さつそく御返ごへんをすしたく存ぞんせしかど御旅宿ごりょしゆくも
 存ぞんせず殊ことに何なにくれと夜更よよけの故ゆゑせんすべなく今朝けふあしたにいたるバ御ごあををしひ返しやすすべしと
 大切たいせつにしまひおさひにわれ御覽ごらんせよ昨夜けふあのとく壁かべをこぼちて盗人ぬすびとのび入い財布さいふともに金
 をのこらず奪はひ去いはといひせもはてささふらひの微晒あせりツ、四邊よっぺを見みまとし汝なんぢみづから壁かべを
 穿うち足あしあををつけなせし盗人ぬすびとにうごれしあんと詐いつはりは愚おろかる計策けいさくなり小兒こわらを欺あざむくともよ
 くあざむかるべきや我昨日わがけふ道みちをいそぐよ心こころせられて金かねを忘れさるよ心こころつかを大磯おほいその宿しゆくまで
 ゆきやうく思おもひ出しあをへ歸かへらんと思おもひしが一昨日けふの大雨おほあめの落水おちみづにて折おわしく馬入川うまいりがわと
 まりて渡わたるとあたとす必かならずならず夜よをあかせし夕ゆふ夜や丑うしする比水ひみづ落おしと聞き夜中よぢゆうあかしこを
 立出たついで藤澤ふじさわの宿しゆくにて汝なんぢが名なと住所しゆくじよを聞きて爰こゝに來きれりさる悪計あくけいを爲なはるへりて汝なんぢが身みの爲ためあ

しかるべしとくく金かねを出だせといふ塵兵衛ちんべいの頭かぶを低ひかく資し者しや者しやをればうたがひ玉たまふりう
 べなれど奪ははれさるはいつりならずいかある誓ちかひも仕つからんりの盗人ぬすびと少せこ心こころ當あたもいへバ
 倉儀くらぎの間ましぱらく日ひをのべ玉たまれかしと身みを打伏うちふしてぬがひけりさふらひは眼まなこをいからし刀かたなの
 鑷くわをそらさまゆひるダへし臂ひをおしはりてぬはく盗人ぬすびと猛まくしとの汝なんぢがさくひいふならん
 詞ことばをやひらかにいへバつけあがりする不敵ふてき奴やつ我われを誰たれどの思おもふ此この鎌倉かまくら縁喜里えんきりの梅个うめこ谷郡領やぐんりやうの
 家臣かしん袴田かまだ紺九郎こんくわうといふ者ものなり彼金かのかねの都みやこへの不し主人しゆじんの用金ようかんなれば片時せんじゆも猶なほ豫よなしガふし汝
 さのり肝かんふとくての一通ひととほにての金かねを出だすぞ梅个うめこ谷やに率ひらて去い園おん園えんにつなぎで乱明らんめいせん百
 姓ひやくしやうも彼奴かのやつとくれと下知げちすれば百姓ひやくしやうどもいありあふ繩なわをとり塵兵衛ちんべいと押伏おしふて両手りやうてを背そむへ
 ぬぢかへせば娘むすめいかなしく走りよりのうゐるしてとさゆれをさふらひの情氣なさけもなく妨さまたせ
 せば汝なんぢもくゝりて率ひらてもくぞ退しりぞき居ゐよど呵あッ、刀かたなの鑷くわよてつきやれば背後せうごにありし方灯かたなと
 ともに撲地ふたてかしてへ倒たげり百姓ひやくしやうどもいなほ塵兵衛ちんべいに繩なわをかけんとしたる所に最前さいぜんより門首かどぐち
 ぶ内の様子ようすとるかたひ居ゐる妻つまの於お破矢やいとさとしく走り入いて百姓ひやくしやうどもをかしとゆめさ
 ぶらひの前に手てをつきて添つくひひけるの妾めかけと此塵兵衛このちんべいが妻つまあてに前まへ程ほどよりかしてよて様子ようす



をのこらせうけたまとりひか夫にをきていさある悪意のとへらねども御うたぐひは無理な
 らすぬすまれしとてまうまきけにとなりたけれバ別に金をとゝのへておんかへまやすべ
 し何とぞ午過る比まで御まぢくたされうしひとへ願ひたてまつるといへばふらひり少
 し面をやいらげ金さへかへさバ片時の猶豫はぬしくれんそれまでは蕪屑村まで相待八
 ツ時に金うけとりに来るほごに其詞を違るないよ〜金を返ささバ妻子までもとらへるさ
 圍圖につなぎて乱明するぞ後悔すなと詞とげしく罵りッ、百姓どもに案内させて蕪屑村を
 さして出たぬ塵兵衛はため息を吻とつさッ、いかに思ひかへまてらたのしさと幣又な
 りといひッ、又走出んとするを破矢のしバしとひさどめ幣又とらたかひ玉ふはよしな
 さことなり幣又のゆふ宵のほごより鶴が岡にやどり来り妾もあひて昨日片棒を手つた
 ひたる事をも物語終夜庭火を焼彼所にて妾ととも夜を明し今朝販たるの妾が目前みた
 るところなりいかでう幣又が二人ありてこへ盗みに来べきいはれあらんやといへ塵兵
 衛のこれを聞しかしとあるのしからバ彼が仕業にあらず別人なりとありて盗人を斃す
 べし心當りもなし汝今さふらひは晝時までと約せしがいかにして金をとゝのふる心ぞやと

いふかれがやはやのつと立わたり軒につりたる鳴子をとりにて圍爐裏の柴の燒さしを筆となし鳴子のうらに物うさて手バやく娘の戀にかけこれ御覽せよといへば塵兵衛の眉を凝此鳴子のうらに此娘賣物と書くるハ小蝶が身を賣て金とのふべきころよまな其志の過分あれど此小蝶のちとそちが運子にて我血をわけざる娘ゆる身を賣せての義理たす別に思案を仕のへてよと打しはるればおはやははく鳴子とばおのガ羽風にまのせつハ心どさハ雀さへ養うけし思ハしる生れつきも相應にて金に鳴子の此小蝶七ツの時かき養育され大恩うけしやしなせ親の難義を救ふ身を賣といかであういどひはべるべき夫のためありおのダ身を賣妻もわり我身年今すこしわのくあらをなとで娘を賣べきを娘をちもさぶめて得心ならめといへば娘のころびさすのたまふまでもいはずふつハある我身にては金になり父うへの難義だお救ふならべいづくへなりとやりてたべ君傾城のたろかなととへハ人身御供にならざるも露バかりもいとふべき心にあらせさりながら活業はゆとまなき父うへ母うへさぞ不自由におぢされん夫のみ心にかゝるぞのしどいひてかなきさかく針目衣類におぢへる振袖のうちよりもれて縫わけにつたふ涙をまとなる塵兵衛の目をしをたゝさかゝる禍の出

來べき時節も有べきがおもへばくやしき身の不運垣もまのらふ扉のしまりもあつそのなる此家ハ大切の金をひづりあぐら熟睡せしと我一生の誇りありさばかり深き孝心の不と限なくうれしけれおのに難義よせさればとて親の身として子と賣る人喰鬼もいせぬ業これバウりのやめてくれまとうけがの義理をかさねお山坂に重荷をかつく息杖の休むひまなきおもひなりたのやのちかく身をよせてしかのたまふころうべなれと前程さふらひの詞にいよハ金をのハさすハ御身をくハ行て圍圍につなき責問べしといひしにあらすや妻子の身としていりであれを忍べらん此事と我々親子が心にまかし給われかしと詞は心つよけれを目に涙の村しぐれ今も降へく見ゆるがやうハ心をとりなほしさらぬだに日の短きころなるよ何くれと隠どらば時刻うつりて彼さふらひつがへたる詞れちがひ事のやぶれとなりぬへし昨日人の語ると聞バ手越の里の妓家が江之島で逗留きて居るとあれハ幸あり妻わ一走に彼所へもらて妓家を建來るべし一世のわりれといふにもあらず道のほども遠からぬ手越なれば伊豫羅の間もとむる風のたよりもありぬべし水の泡の消かへりてもよる瀬のちとてなかるべき娘髪ととりわけ化粧してまちてよとらぬとてハ涙をぬる

へ小裙ひきまわげッ、出ゆさぬ塵兵衛の胸ふさざりてあるにもあられず隔の奥へ泣にゆく娘
 の鏡盥取いだしむかふ鏡も泣顔にくもりがちなる冬の月常は化粧もまねなれぱちりバむ匣
 を打ひらひ眉かく黛も遠山に雪の白粉屑を色どる燕脂も薄の葉髪のはつれのをらくと
 おつる涙を水櫛にとりわけかぬる亂れ箱よせていかへる波枕身を浮草のつとめといふいと
 ふした物どまけも白齒のわさまへぬ恍惚子娘の心にと鬼住國に行思ひまはおもへども賣物
 お花并もさしうざり姿つくれば常よりも猶まざりたるうつくしさいまだ十四のつ花を
 垣に突せて路の邊の柳とともに手折せんいいと憐むべき事ありけりうくて時刻もうつりし
 が母の放破矢のゆそがひしく妓家を連歸り娘を見せて身のしろと七十兩にさだめ塵兵衛も
 涙れさへて出来りけれバ妓家は七十兩の金を塵兵衛が前におき矢立を出して筆ばやに証文
 を書れり是に手形を押し給へといへばうなしさは限なければ今更せんすべもなければわさ
 さく手形をど押たりけるおみやと妓家よひかひかりとめならぬ親子のわかれなればいひ
 ふくめたる事もあり証文と渡せしうへに連行事はしむし猶豫をしてたびいへといへバ妓家
 と打らなづきそれもつともしからば暮六ツをかざりにむかひに來る不ぞに夫まで身じ

たくさしておきめされといひおきてぞ歸りたるさて於破矢夫にむのひていふやうとかくす
 る間よとや午も過ぬべし彼さふらひの來ざるうちにねん身其金をたづさへて少しもいやく
 返しておかせといふにぞに兵衛のころなつといひて七十兩の金をたづさへッ、門首まで
 立出しが袂よりからりと落たる將基の駒をひろい取これ昨日稻村が崎にて我手に取し
 しかも金銀二ツの駒ありこれを忘て今まで袂よ入おきしも金の難儀よさしつまる前表にて
 ありなかるが思へバこれはいまいしといひッ、地上に投して、歎息してぞ出ゆさぬりる
 折しも七里が濱の方より禮服刀さらくしく出さちたる若侍 袂箱持草履取を具し來り
 て駕籠の塵兵衛といふのこれなるかといひて案内を乞を於破矢立出いかあもそれは此方に
 ていべるがあるとは今宿に居合さす何の御用かほどのべられバ彼さふらいの遠慮もなげに
 打通りあると他行とあらバしばらく待對面の上よて委細の事を語るべしといひて座につき
 居たるがやとさく塵兵衛立歸りて外の方よりいひける於破矢も小蝶も安心せよ金を返して
 何事なく受取のしるし文までとりて歸りしぞといひッ、裏よ入て彼さふらひをみつけてつ
 いにみかけぬお歴々いつくの御方にやといふかれバさふらいと威儀をつくるひ塵兵衛とい

ふの和主よなわふと今がいのじめあれと賤と業をいとむむべき人品とこみぬすおのれは當地
 月影个谷判官の家臣箕腹蟻右衛門といふものあり今日和主とたづね來つるは別義にあらざ
 頃日若との玉兎之助との金澤にて漁獵遊覽の歸と霧个澤の舟輪寺に立られ彼寺に居る蝶
 吉が容貌世にたぐひなき美質なるを見玉ひて心にかなひ小扈從にめしうへんと望れしに
 彼寺の上人はすでにうけがはれて吹嘘有んとの答なるが和主は蝶吉が父にてもこはよしわ
 る弓取よて今零落せられたるよし上人の物語にさまじめされ和主をもめしいごしものと武
 士に取立たまんとの事なり親子一時の出世なればよもや違背のあるまじといひて挾箱の裏
 より衣服両刀を取出し是と則主從契約のしるしにおくらるゝなりといひて塵兵衛が面前
 にさまおさぬ塵兵衛はこれを聞案じ煩たる氣色おてしはしらへもせざりしがやゝありて
 いひけるは彼上人吹嘘のうへに兒子が事せんすべく伺うけとつかまつるべし拙者事は
 今のたまふが如く昔と武士のまねをもせし者なれどかく零落して両腰を一條の息杖にうぬ
 なし案山子の弓矢ごに手にとらぬいやまき身となりくぐりいへどもゆるるわり任官をのぞま
 す況弓馬の沙汰も及ばず兒子が美貌のゆゑによりて立身する事本意ならねばよろこばし

くも存せす貴人の賜を受ざると不禮なれど此品は此儘返上仕るゝ案外なる返答に蟻右
 衛門としはし詞もたゆまひけるが偶れたらにありし鳴子に目をつけ取上見えて打うなす
 鳴子の裏に此娘賣物どかさるは察れる所貧苦にせまりうれある娘を賣しあらん娘を賣
 程の所存にて蝶吉が美貌による立身を好ぬといふゝろえずゝしと又使者に立たるやつが
 れをうるしめての返答りと釘打詞の理につき「イヤ其儀のどくちごもる」心をくみて蟻右
 衛門「もしまた仕度なきよさしつかへてのとなるゝ其儀もとくに察せし故これ此金子をた
 まいるなりこれよても得心なきやとぬいッ、僕より百兩包を取出して塵兵衛が前にた
 く塵兵衛は此金を見て「と心の裏に思ひめぐらす事ありて忽ち武士魂を枉詞をあらた
 めてぬひけるのさばり厚き御恩をうけおぼえざるゝおそれおやき事さればおほせにし
 がひ是等のたまものを頂戴いたしむべしといへば蟻右衛門と心もちつきて喜びしからば目
 見ぬの儀ハ吉日をえらび追ていひ越しむべしといひて別と告て歸けり塵兵衛の門おくりし
 て内に入何思ひけん口をそとぎ手をあらひて佛壇の前ひびきまづさしぱたく拜して扉をひ
 らけは苦蒸るる五輪の石塔を安置して香華を手向おさぬゝて妻娘にむかひていづくわれ此

春旅より歸しと云此五輪と取來りてりやりに祭るを汝等のふかしみいかなるいれありや
 と問ければ亡父の非をあらわすにしのびされ其體もせざりまが今日はいのねばならぬ
 時節とありぬれをやむとを得ず語るぞうしそも我亡父の五木院左衛門宗繁とまうして故相
 摸入道との、重恩をうけたる人ありし人道世の亡びたまひしみぎり預りたれたる御嫡
 子相摸太郎邦持殿を嘘し出して情なく敵と打せざる不道人なれと人毎に爪弾して悪み鼻息
 の罪身を隨けるにや一身とおくに處なく舊友のはしどいへども一飯を與ふる人なく遂に道
 路に餓死して終給ひしと聞其初我が幼稚く何事もしらすしかるよ此春人の語を聞は父の終
 焉の地は越中國經牙山のうちあるよし其所を尋ばやと此春旅立して彼山に到からうとて此
 五輪の塔になつぬわたり五木院宗繁と知るしあるにて疑ひもなき亡父の心るしなりとお
 もひ彼山中の者につきて聞しに此塔の情ある山人等が集て建佐たるよし我おもふよ此塔を
 長く彼山中にひき若故相摸太郎をの、所縁の人の目にかゝるべき塚を築ねるはうられねば
 此塔ととり去て跡をかくすにしろしと思ひ旅荷物の中よりつくりなして遠路をいととす
 つらへかへりしかるべき寺院にも健おかばやと思ひけとともこれも人目にかゝらんとす

どひてかく我家の佛堂にするれきて其盤を祭なり我他人の情にて成長のしつれせも漸々
 に零落してゆく賤しき業をあし貧窮するも皆是親の因果の子に報道理にて我身をくるしむ
 るは父の罪科を滅すべし便ありともへば少しもいどいす況仕官なきする心の露ばかり
 もあらざれども小蝶も蝶吉も養子なれ二人の者よ我身の因果をおよぼして貧乏くらしと
 さするとの歎けしく一ツにのさしあたりて小蝶に身をうらるぬゆめニツにの蝶吉が身を立
 る爲とれもへば日來心よ替ひたる儀をやより仕官をすべくおもふなりといひて又古草履の
 内より錦の服紗よつゝまたる横笛を取りさし小蝶にむかひていひけるは是世笛の濡髪と名
 づけたる名管なりこれの汝が實父伊勢國の樂人二見太夫是次といひし人の秘藏ありし物な
 るが於破矢が我あつげかさぬ我これまで貧苦にせまりても買代なさぬが亡人の是次との
 へ義を立るところなり今あらためて汝に是をあたふる間うみの親の遺物と思ひ肌身のあさ
 き持て居よといひて渡しければ小蝶のまれをれし敷これタラみの親人の遺物にていかど
 いひて渡さしやみつ、懐にたさめけり於破矢の夫の物語を聞いていひて其素性をしり父
 の罪を隠孝心といひ義理ある養子をつつくしむ慈悲深き志を感じて小蝶ととも此ひと

ら涙にむせびけりかくて又時刻やうつり落日烟をぬびて碧霧を生じ彩雲水に映て紅の光を散し釣する翁の舟を移して家路を急ぎむれぬる驚の友を集めて沙汀にくたり芦花の雪をふらむ旗風の苦深き軒端をめぐり赤蜻蛉の紅葉をちらす枯枝にふくれ聲をる山鳩も宿にかへりていや黄昏の頃となれば於破矢と涙の目のおひ灯籠を取出して火をともし門の戸をさしかさめんとしたる所お彼手越の里の妓家駕籠とつたせでつて來り約束の時刻ゆるむかひに來つといへば塵兵衛のいそがはしく佛壇の扉をたて、妓家もむりひ且笑うけつ、こあへへとむりへ入ていふやうさて娘の事につさてわりなき無心あり別の事ともいひき前程証文に手形を打てかたくさくめし事にいあきと此方までいかず金を得たるによす前程受取る身の代七十兩をかへすべければ何とぞ約を變じ証文をもととしてよ此儀をひとへにたのみまうすと夫婦口をひどしうしていひけるに妓家の色をかぬ御身等ハ妓家のさぶめを知いハすや一旦金を渡して証文をうけとればもいや此方の奉公人にて其方の娘にあらずいのでか元金にて返すべき道理あらんやといふにぞ夫婦のうべとねもひなぐらいかにもしてうけひのすべしと頭を擡もみ手しめくさまゝ詞を盡しけるかなを聞入さればしからば元金

に三十兩より百兩にして返すべければ聞入てたびねといへば妓家は耳にも入すと立てやくなき詞を費すなといひつ、さゝぬる夫婦をつきのけて灯籠のかけよ泣伏する娘の手をとり引立つ、駕籠の裏におし入て垂と撲どおろしとくくやれと駕籠をいそがし走り去ぬ夫婦は跡を見たくりつ、尻居にさふれてめきたる口をふさぎもせずしばしあされて居りけりをりしも海士の子ども等々磯に遊て吹すさむ漁笛の音へ哀れなり稍ありて塵兵衛は片手に鳴子片手に金の包を取上て双方を打ながめ歎息していひたるは嗚呼禍福吉凶の糾る纏の如しといふもうべなり今二時のやく此金を得たるならば此娘賣ものどかくかなしと文字を見ましものを立身をのぞまぬ我身のかへりて仕官とせねとならぬ義理となり愛目を見せじと思いつる娘ハ人手に渡りゆくこれ此如く百兩の金を手に握るが子を賣て泣因果な親が世に又とあるべさかつらく思ふにくる禍で來りて今日一日にする事なすと贖の替やを組歸もすべて是我身宿業のつたなきゆゑなるべし娘と妓家へのあとして此金も何にかせずといひて金の包を投出しうひや娘をいびさして鳴子を抱き泣伏けれをこらへこらへし女房も氣を弓張の弦されて聲をもち身をもちだぬつ、悲歎の涙にむせび身かゝる

折しも藻屑村の獵師をもこゝに來りて門首よりさきのさき塵兵衛の内はりもふべ物をぬす
 まれたといふ噂を聞て告々來と我々三人ゆふ夜釣のりへりがけ七里が濱でもやしき奴
 撒出あふたゆゑ打倒してとおもひのはり手づよき奴にて取に夕せし夕ゆふ此家へしのび
 入しもおほりた彼奴にさはまれり彼奴はさしかに穂波村に野ふせりの乞食ようたひをし
 と海をこらく高聲に囀てぞかへりける塵兵衛のこれを聞さて昨日の野ふせりめわや
 しき奴と思ひしか彼奴の業にせありけるかはやく捕へて糺明すべしとおもひッ、走りいで
 しがいやくさくさぬすみませまやつかはさちりうき穂波村の居もせまじゆくへいつくとし
 ら浪の何を目めておとつぬべさと思案しうへて立戻り縁鼻に尻かけて溜息つきて居り
 けれと女房の愁々拂ふ玉帯と襦袢さうせてついでさ茶碗の酒も冷氷る夜を鳴あけす捕手
 鳥いとい眞をさぬよけり○夫は扱おきこゝに又離々原上の草壘々白骨叢に纏て影す
 さまじくすむ月の山もあらとに木の葉ちる蛇个谷の葛原に雪とあまむく白髪のお女たす
 みであら見まはし懐より呼子の笛を取いだして吹ならずとひとしく竹藪とおもわけてあ
 ちのれ出しの別人ならずかの宮奴の幣又なりとさきま老女聲をひろめていひけると我諸國の

銀場をめぐる娘の女に身をやつし太指を離につくり成して水を欺き因果婆々と異名をよバ
 れて此鎌倉を徘徊するの別儀にあらす一ツに菅原家は動靜どうかひひ二ツに味方を集
 めんためなり汝のいかにかといひひられ幣又の懐中より一巻を取いたし拙者も命にまうせて
 うく宮奴に身をやつしあつむる味方の連判状いざ御披見とさしいだす老女のとりてさらさ
 らど押ひつき月影をうけて讀おひりよくせしを幣又かくの如きおひく味方集るうへり時
 節を親義兵の旗をひるがへし多年の積徳をひらくべしうなら老人に悟られおひひひひ
 一巻をもせしけれ幣又のうけとりて懐中し此はとかなのしを聞おひきつる小動の駕籠の
 塵兵衛とす者た者あらずと存るゆる近づきて物よせいろく探りこゝろみるに彼
 のまさしく不忠者の五大院左衛門の子にうまひなくいへを折をうかがひ打取て義兵の血
 祭にいらすべく思ひ居いと語るをりしも稻村のかけより塵兵衛が相棒の泥太をせりいでか
 くあらんと思ひしゆゑ跡とつけて爰に來つ其一卷をこちへわたせ褒美の金にのめるとよバ
 たりッ、幣又が懐に手をかけたり幣又の其手をとりてねぢかへし足を飛させて彼方へ蹴や
 れバ老女の手バやく竹藪を仕籠し刀を抜き放し陽炎稻妻ひらめくかげに泥太が首の前は知ら

軀は後またふれたり幣又白張の袖をひさちぎりて刀の血しやを拭ひとる老女は刀を鞘におさむるとさんの拍子背後なる茂竹のうち霧夜を寐かねて羽たしく雉二聲三聲鳴ければ老女いやくや幣又此奴も鳴て射られた雉ありかを人にしらすなと腮をもつて下知すれば幣又は打うなづき首もひくろもつたはらの苦の清水に投入たり老女の小裙とりあげて互にさやく耳に口右と左へわかれ行ぬ

五月雨やある夜ひそくに遊債の曲者

扱月遊个谷判官照影と相模次郎を亡したる勤功によりて足利家より所領を増たまはり威勢もおのづから盛なりしが子息玉兎之助清影の花谷の下館においしけり塵兵衛が兒子蝶吉の小尾従となりて勤之助と名をかえ側近く仕へて寵遇あつて塵兵衛も家臣の列につらなりて今と姓名を常元濫右衛門とあらため心よもあらぬ仕官なれども一旦君にするうへへと思ふにや忠志をかたふけて仕へよくへりくぶりて人愛おほかりければ諸傍輩も彼が賤業をせし時の串をいはずおのづから用る人れば昔の艱難をかかりて何不足なき身となり唯不運なるの娘小蝶のみみればいかよもして贖いせし烟花中活地獄の苦みむすくゆめと思ひ

けれとも今い都五條坂に賣かえられ千金にあらざればもどすまじとゆふにぞさすがお高金なれば力およばずもとより他聞をいひて口外せ唯夫婦日毎に彼々を言出して歎ぬときもあがりけりかくて又光陰移換年々馳るが如くにしてしばらくもといまらず流水の海に歸するにひとしく機杼の篋をなぐるに異ならずすでに六年をすぎて永和元年にぞいたりけるさて勤之助のいま前髪若衆すがさにて今年は十七歳になりぬりの箕腹蟻右衛門のうねて隠謀あるより玉兎之助の行跡を乱さんためすゆめて勤之助を小尾従となしけれども勤之助と忠義の志ありて殿のこゝろを乱さず寵よほこらす恩とさせて隠謀の方人にもどれもひて吹嘘せし濫右衛門も忠勤をいげひゆるに漸々に立身して今いれのれが上に立ければ今さうねましく思ひいかにもして彼等父子を退送けりやと時節をまちて居たりまぐ頃自動之助病によりてしばらく私宅に下り打臥居るをさいひとし手越の里の白拍子都といふ女と玉兎之助にすゆめて下やうに呼よせ酒宴の興をりえけるか此都年々廿や二ツ三ツ過ぬれどもたぐひまれなる美女にて大掖の芙蓉の水を出るが如く未央の柳の霞をおびたるに異ならず曲舞糸竹のまぐべの殊ますぐきて頻鳥の聲をやはらげ綾羅の袖をひるがへして

舞かなづるさた古の祇王祇女佛なごにも専おとらまじく見えけれ玉兔之助其艶色に
 透ひて動之助に見かぬ連日館にとりめれきて手越にかへさす妾の如くめしつりひて執愛い
 と深のりけり都も玉兔之助が美男あるよめで、誠心をかたふけ鴛鴦の契淺からざりし、バ
 蟻右衛門は心中にしほましぬとよろこび遊び相手となりてなほよからぬとのみえず、めけ
 ればます、嬉酒に耽佚遊宴樂にのみあかしくらし玉ひ美酒珍味席上にみち野曲臨臥日
 夜に絶す、恰妓家媚門の所行に似てうさてかりける有さまなり、ゆる放佚の行路を見りね
 て譜代古老の臣等かゝる、和漢の先蹤をひきて屢諫舌ひる、タへはと雖もつやく、用
 たまはず日をおひて悪行つものりなれば、もし此事管領のおん耳よいらを、おん咎あらんは必定
 なりと安さこゝろもせず、湖水を踏こゝちして胸をいためざる、いさかりけりしかるに、動之助
 長病平愈して出勤し館のありさま、殿行跡前にかゝれるを見て、大よおとろき見るに、まの
 びずして詞を盡し理を亂し、さまた、諫まうしけるが、老臣等の詞すら用ひたまさざれば、い
 つか駭年のも、諫をうけいれ、さふへ、耳にぞに聞入たまはず、無益の舌を動して、我遊興
 を妨る條奇怪さよとく、退けど阿たまへとも、動之助の小膝をすゝめ、な不強て諫けるに

ぞやがて氣色のり扱は汝都が爲にれもへうへられたるを、ねたみ諫言にとよせて、彼をし
 りぞげんとせらるならめにくさ、奴がまうし條がなと、敦固まのせ、まひて動之助が誠忠の諫
 とのしりたまひを、殊更此とき大に亂酔しておのしければ、怒の外皆をひきあげ、まひ白
 鞘巻をとり柄に手をかけ給ひては、せ、手打を見ゆるに、ぞ都はわはてまをひて、といめん
 としつるを、かたいらにありける蟻右衛門いそごとしく押へ、近つけず玉兔之助とす、で
 に刀を抜りけ、まひいど、わやうのりし折しも、執權職山咲庄司雪森が、妻淀瀬次の間より
 ひしり出こと御知慮なりといひ、袖にすがりておし、といめ詞をや、いらけて、宿まうしこれ
 らのおんふるまひも、し上館のおん父君にさこえな、バ御勘當わらんも、いりられず、妾あしきと
 ひさことおあげざるや、せよ一旦、うれなる都とやらんを、里へおくり歸したまひ、おし、かしたまひ
 て、後妾ひそのにおん母君よ、さこえあげあらためて、彼を、おん妾となし、ふさ、びめしかへさる
 へやうよ、いからひ、いへし、何事も妾にまかせ、まひ、いれ、し、いと、なせ、や、かに、すし、けれ、バ、玉兔
 之助、これを、聞、まひ、執權職の、妻、さる、もの、詞、な、れ、バ、あ、な、が、ち、に、い、ひ、破、ん、と、も、さ、す、が、あ、れ、バ
 し、ふ、く、其、詞、を、う、け、お、さ、り、て、に、ざ、り、る、刀、の、柄、を、放、た、ま、へ、バ、蟻、右、衛、門、の、こ、れ、を、見、て、本、意、な



き顔してげり淀瀬のよろこび且動之助を私宅に退かしめ扱都にもしうぐのよしをいひふ
 くめ一度里へ歸るべしといひて其支度をせさせけるが庭の木蔭も暗くなりて此日もすでに
 暮の鐘諸行無常と告渡り都の身のうへ後にぞおもひしられる此下館の後門通りは田畑よ
 ついさ前ふは細きながれあり比しも五月下旬にてこのころつゝ五月雨もしとし晴間の夏
 木立葉守の神のしめへてしげる梢をもる月のひりりも薄き夜なりたるに時にもあらぬ覆
 面頭巾よ目ばかり出し鮫函の両刀をよこたへて武士の浪人とおぼしき者何の人待やうすよ
 て此わさりよ立といまり後前に心をくわりて居たる折しも館の塀より氷の如き刀の鋭尖閃
 めき出不破の關屋の板庇をもる稻妻にとならずかの浪人はこれを見ていふかりッ、棟の木
 陰に身をひそめてやうすいかにとうかいひ居るとはしらせして塀のなかばを切やぶり鼠の
 穴を出るが如く頭をいぶして四邊をうかいひ潜出たる曲者の暗の鳥か鳥門玉の黒装束に打
 拵てぐんどう頭巾お面をつゝみ千両箱を小脇よかへて足バやに歩み去時にくの浪人棟の
 陰よりいしりいで、曲者までとよバ、りけれバ曲者と立といまりいとくしく刀の小柄を
 扱とりてエイと聲かけとつしと打つけ跡をくらませ逃去ぬ浪人は身を避て打れとしあやう

さとどひとりこち落さる小柄をひろひとりて後日の證據と懐中しよとの木陰に身をりくせ
 り此ときかの白拍子都の手越の里へ飯るどて乗物あておくられ御者あまたつさそひて後門
 の方より出來りたる以前の浪人棟のかげよりあらはれいで刀を抜て打ふりけるに從者等
 ひらめく刃の稻妻に肝をりし魂をうしなひて乗物をすてかき風に木の葉と逃ちりぬ浪人
 ははづさて乗物の戸を引ひなち都をとらへて引出しけるよぞ都のほとろき聲立んとする
 を手やく口に手をあてゝものいひさき後抱え抱ながら刀をさう手にとりなほして胸さの
 あつさたてけれぬ都の身上血に染りあやとさけぶ聲にいでぬ苦しさにたぬきや有けん
 浪人の左の小指をくひ切ぬ浪人のおぼぬす手を放ちければ都のいとよわりする聲を立て御
 館の人ぐいづくにおいすぞ救てたべ助てよとさけべとも苦まき息は青嵐の空に音する
 とかりにて誰答ふる人もなく元結されて黒髪い風の柳と打乱れ染帷子け辻が花も泥にまみ
 れて哀なり聲立させじと浪人の都をのりさまに押伏て吭をしたゝかにさしとやせバ鮮血
 さつとやせばしり前の流れにしたゞりて時よもわらぬ紅葉を散し七轉八回身をもたぬ手足
 とふるのせ齒を噛ならして苦痛の体目もあてられぬ嗚呼いひしり哉二十三と一期として

草葉の露と消失ぬかくて浪人の頭巾をぬぎて刃の血をおしのごひ鞘におさめて此處を立退
 んどしたる折しもむらぶのうたの睡をつたひていそがひしげに來る人あり雨衣を身におひ
 ひ脛巾草鞋の旅姿菅の小笠を提灯の上におはひて來かゝりしげしき夜風に火を吹けさ
 れ月の光をたよりにて此方に來り彼浪人を行ちかひ都が死骸につまづさてうちおとろき身
 とねぢひけて人殺しの曲をまてとよびとむれば浪人の足をやに立戻りものをいひす刀を
 抜て只一打と切つけたり旅人は身をかわし前なる流れをせさとめたる土俵をとりてうけと
 めたるに土俵の小口をすつたと斬土のいらくこぼれおちあまたの蛙聲とそろへて鳴立け
 る夕月を包める黒バへの雲一面にしきみちて五月雨颯と降來り忽暗夜となりけり時に
 旅人も一腰を抜いなし曲者を打とめんと暗裏を拔足しツ、すかし見て眞額二つと斬つくる
 浪人の踊上りてこれを避れ旅人又切つくる刃の鋭尖旅人の鼻のさきにひらめきければ胸を
 ひやして飛すさり拂ひ切に切けるが互に身を入ちがへて打刀いたづらに空を切る閉てひひ
 らさはぐれては接連遊提迷藏盲龜の水を游が如く右に摸り左に接飛上りて切つくれバしづ
 んでくゆる刃の下背後のせにつさあたればいるがひしく身をひるぐへして阿吽の呼吸を

必めてよめつた切刃切刀おぼす互に打あひし丁どしと切むすふの打しも後門のか
 たより山咲庄司が妻淀瀬館を下りておのが宿所へうへり道執權の妻なぐら手傘足下も
 のかるゝしのび出立の挑灯を前にもさせて来りしが泥の裏に落ありし印籠を奴僕が見つけ
 てひろひ上かやうなものが落ありしとてさしいたせバ淀瀬のこれを手にとりていふかしみ
 つゝ懐紙ととりいだして泥をのこひ挑灯にさし付てまれを見バやとせし所は彼浪人のい
 とがのしく走りよりて挑灯つたり打落せば淀瀬が僕に仰天し泥にすべりて後に倒挑灯の
 ひるがへりて前の流れにしげりふる本草の中へ落たりし夕雨をあやみて水草の裏よりく
 居たるあまたの螢一度にばつと飛いたす其光も浪人旅人淀瀬等四人たがひに顔を見あひせ
 けるが浪人の面に袖を打あひて此場を逃ゆりんとす旅人のゆくさきに立ふさがりてとい
 めんとす淀瀬の旅人を曲者とももひたがへて捕へんとす其ひまふ浪人のつとすりぬけて逃
 去に雨のやを篠と束て降まさり夜あらし蠟とぬろし来て新樹の梢を吹あらし流の水草も動
 揺して怪けうな都が死骸の胸もとより一羽の時鳥飛出て二聲三聲鳴けるがなり空のぼり
 て一團の陰火となりはしりゆく浪人のあとをしたひて飛ゆさぬさて旅人も浪人のあととし

たひ泥水を蹴散して草駄天バしりにねふてゆく淀瀬の都が亡骸と館の扉の切穴を見つけて
 大におどろきたいらに館み立もどりてしかの事ありと告りけるに館のうちに侍宿
 の武士等手燭を持ってうけまひり軍用金うせたりとて騒動す玉兔之助はこれらの事を聞たま
 ひて都が非命に死したるを深く悲みたまひ彼を殺せしも軍川金をうばひしも察するところ
 同人なるべし其盗人をあひ捕へハッ裂にして都が怨の十が一ツをはらすすべしと且のなし
 み且怒りよき遠くことしるまじ追人を出してはやく捕へまむべし都が口に小指をくひさ
 て含み居るよしされと小指のあき奴こそ其賊かれそれを証に捕へしときさびしく命じたまふ
 まど健なる侍どもを四方にわかれて追せけるかつひに其行方をもとめ得ざりまとな
 ん

⊙陽炎としきりに狂ふ牡丹の睡猫

月影个谷判官の執權職山咲庄司雪森に三人の子あり兄を餘字兵衛といひ次を餘吾郎といひ
 末の娘を小雪といひ物領の餘字兵衛の妻淀瀬が十九歳のとき産たる子にて其後暫らく子な
 かりしがいるか遇て本妻の夕波といふ夕餘吾郎と小雪と二人を産ぬ然れども本妻妾どもに

こゝろさますぐなる者にて平日あかむつましく嫉の心は露バウリもありけり本妻小雪を産たるとさへ庄司の主君判官にしたがひて信州苦形の軍にむらひ其留主に産をしけるが本妻産後のなやみつよく死にせん／＼とせしどころへ庄司歸陣し鐘をぬぐ間だおあく其儘にて臨終の枕もどにいふりけるが此病中妾淀瀬心を盡して看病し此ときもすでに枕もどにづきそひて泣居たるよ本妻くるしき息とつきて且夫にいひけると妾むなしくなりて後后妻を他よりひりへさまひて三人の子きも等がためあしめるべしねがひく淀瀬とのをわらためて本妻となしたまひれかしといひてまた淀瀬にむらひ餘五郎小雪等を其の子の如くにもひて養育をたのひありしからば妾草葉の陰めても心を安くし子あゆに迷ふ黒暗の地獄の苦患をまぬかれなんといひおたて身まかりぬ是よよまで日數うちて庄司淀瀬を本妻よせばやといひたれども淀瀬ひたすらこれを辞退すまかれども亡妻の遺言といひ子きも等のためあれバどあなぐちにすゝめて遂に主君に願をいふしわらためて淀瀬を本妻おしたりける素淀瀬の志なほく正女なれば前妻の遺言をうたくまもり實子の餘字兵衛よりもなほ繼子の餘吾郎小雪二人の者を深くいつくしみ朝夕撫按心をもちひて育けるが物願の

餘字兵衛いかなる所存にや十五歳の時出家剃髪の望なりといふ書置を残して出奔し行方しをすありぬ此時餘吾郎は六歳小雪といまだ二歳なり其後小雪四歳の時乳母を抱かせ庄司とづらつとそひて甘繩の神事を見せに行かへるさに怒にさらひれて行方しれず淀瀬はこれをさくどひとしく心亂るゝばかりに歎悲を前妻の位牌にむかひてもいひわけなしとおもひけれども庄司みづから運去てゐる災にあひたる事なれば誰を恨む人もなく誰生死のまからざるを驚ばかりのたのみにして卜筮をおうせ神佛と祈さま／＼に心を盡し近國の山々をめぐりておぼろふかざりと残らたづねもとめけれども更に行方しれされバ失たる日を命日にして佛事をいとなみ菩提の種を植るのみなりされども凡夫のあさましきはもして神佛の擁護により活ながらへ居るともやと夫婦朝夕の物語のとしにも此事をいひ出して泣さる日となりけり此小雪の生つ美麗玉のやうなる顔なりしが高類に一ツは黒疵あり庄司々高類にも黒疵ありければこれぞ父の譲の黒疵ありと平日の口すさみにもいひけるがも之命に恙なく唯是のみ後の證據なりと淀瀬が歎いふも理なりぬれば庄司三人の子を持ながら物願の出奔し娘の夫て生死しれを唯家にある者餘吾郎一人なり是等の始終をく

いしうへは事長く讀にもわづらひしけれバ其要を撮てしるすの事扱餘五島成長もしたか
 いて淀瀬を實の母の如く敬ひしたひたれバ淀瀬も不便いやましていつくしむと限あしか
 くて今年庄司の五十五歳にいたり餘五郎は二十二歳にぞいたりたる扱父庄司が父餘五郎が
 爲にの祖父ある淨閑居士今年五十年の遠忌あたるにつき菩提のため紀州高野山へ石塔を
 建常住金を納ひべしと思ひ立主君に願ひ餘吾郎を代参として紀州へかかしひべきに定まり
 けるが餘吾郎いま若年なれば物馴たる者へ副つかひすべしとおもひ家外南方十字兵衛今
 年五十餘歳の老人にて老賢なる者なればこれを守役とし常住金二百両石塔料百両都合三百
 兩別に路用も持しめ己に行装束のひけれバ吉日をあらびて銚倉を發足しほどなく京都
 に著て旅宿をもどめ石工に命えて石塔を造らする間しむらく當地に逗留して居たりけるが
 此とき彼笑腹蟻右衛門も主川にて上京へ旅宿に逗留の間餘吾郎に出わひふがひに旅宿
 のつれくを問わひあるひ二人連立て名所古跡などをたづね旅の憂を慰めけるがこれよ
 つきて蟻右衛門の心中に悪計をねもひつさると後にぞれもはしられける○尋常の寒梅も
 拵て軍持にの布すれバ一段の清香人の心を感せしめ民屋の衰柳も移て宮苑にいれバ千尺の

翠條別に春風長かるへしといへども宜哉襦籠座兵衛が娘小蝶は手越の里に一歳住其後都
 五條坂に賣替られる富士屋の吾妻と云阿曾比となり且には古をおくり夕には新をひかへッ
 、寄ていかにあはだ波の枕さだめ愛身となる原貧家に育し娘なれと花柳の街に移植て玉
 の筭綾羅の衣十分に粧いせけれバ自然の美麗に今一しはの色まして嬌艶人をおどろかし
 め花魁娘子とぞなりにける素聰明生なれを糸竹のしらべへ更あり歌學繪がさ花むすびのた
 ぐいの艶雅たる業にいさるまでよくこれをさとし情のいろは殊更に深かりけりかくて此五
 條坂に早くも五年の春秋を過して今十九才にぞいたりける扱一日吾妻常よりもなほ美風
 よそはひて錦のくけ紐に金銀の鈴をつけたる縷を結たる手飼の猫をさよらなる女童に抱
 せ赤前垂の花車の女に日傘をさしうけさせて邯鄲の歩をうつしッ、絃歌の聲のいとなまめ
 さたる街練出ける留木の薫檀郁としてあたりの人を襲歩むにしたかひて紅の袴のひ
 るがへるさま輝媚たる牡丹花のうさ出たるかど疑われぬかゝる折し古綿帽子を頬かふ
 りふして針目がちなる布子を着杖よすずりて貧げなる若女吾妻がわゆむ側ちかく寄てはれ
 つもつれの後前につまよふと野らに半舊老猫の小蝶に狂ふ如くなり花車の女これを見

て唇をひるがへしツいひけるは年の始の破魔弓に造つけたる尉と姥の離別したるにか
 と思はるゝばかりなる姿にてかく願き道にちをこちの君にまれもつれ歩みあふ妨する臭
 ものゝ身しらす婆よかへへ退てとくく行といとにくさげにいふを老女耳あもさゝ
 入す腰を打ツ、目も文に吾妻顔を打まもりさてもたしにまざりてうつくし姿の君
 かな卒爾なるとよいあれどおん身にまみ願きとありて汚穢我身をへりみず此曲中に
 わざく來つる其いはれを一通聞てたべといへば花車の女はあやしみ扱の君たちに近
 寄て母の伯母のといつりいふ物ねぐりかさあくの袖乞のたぐひならんとく去すやと聲
 高に呟ッ、つきのくるを吾妻ハ制えて老女にむかひつひあ見うけぬお年寄妾に對して願
 とある其わけのいかなることたづねツ、傍邊の編笠茶屋の床几に尻かけてやすらひけれを
 老女わつく其わけとて別のものにもひらす此婆々が月とも星ともおもひへる兒子一人はが
 山崎の油賣にて挑賣して貧き暮をいたす者日來實体よくかせぎ女をも心に心をうつす者
 ならぬと此曲中へ商にまわりしついでにおん身の揚屋入し給ふを見て心迷ひ親の口より
 まうしにくきとされと戀病につらふほどにねもいままなりぬお愚なる奴とさましくにい

ひこらせといかなる宿世の因果にやおもひきりとべねばかひぬやこがれて死ぬならん氣
 つかひすな情を商ふ君されバ無解の聞きたまふまじ吾妻さまに此わけを告さるる歎き
 まうしてせめて盃ありと戴かせおもひさらしてやるべしといひ慰めぬへむやうく病も
 おこさうしゆる道く油をうらせツ、此所まで伴まわりしなりねがひくハ一目あふて詞
 をかけてさまのれといひつ、彼方をさし招き兒子こちへといひければ出口の柳の木陰より
 油撥を挑ツ、油じみたる古布子見るもわびまら姿なるり撥をわろして母の背後につい居ッ
 いづかしげにさしうつふきて詞をし母の兒子をかへりみてそちが切ある心底を残りし語
 てれらのせまうせといひれてやうく顔をわけかく貧き身もかへりみぬ僕が執着心語も
 いとこづらしければ是一朝一夕の事ならき去年の春ふとおん身を見そめてより片時もこを
 を忘れがたく人間の一生は秋の草に異ならずもし个様の美人と得てせめて一夜をわらすあ
 け死すとも恨あつるべしとおよびなき戀の海深さ思ひに堪かねていうばかりの金にて一
 夜をもとむべきと人につきて聞つるに一夜の揚代銀百目あれと酒食の價なにくれの費われ
 バ小判五兩ばかり金きていもとひとなりがたしといひしゆゑ唯あされてとてもかきぬ

思ありとわらめ拙き我身を恨ッ、おもひといまるべく思ひまぬ煩悩の大打とも去す戀
 慕の絆さをもひかれず我身を焦す油の地獄のれを賣るのみ赤色ばまた思ひける、古
 より志ある者の事竟に成といふ詞もわれは望と違まじきともあらずともひつき出口の
 柳の糸より細おさらべ垣の露よりりるき利分のうちより一日三分五分の銀子をのけて積
 貯今すぐに五兩の金と、のひつれば岩に咲心地のすれき又人の語るを聞け吾妻との
 引手あまたの名妓なれば富貴の人よさへ一應や二應で麻ねふとあしといひしもある況
 まづし我身なればたとい揚代といふともまていさまりるまじと思ふか病の種とな
 り人しれぬ我戀の關もりの宵く毎に瘦はそりてはとく命も危かりしを母の情の詞にて
 やうくおこたり今日此處までいさうで來つ戀の榮種の身の油しめ木にかけたるしやり糟
 是見たまへといひッ、油燈の裏より五兩の金をいさして吾妻よ見せたといひ親く身を沾すに
 いたらすともせめて一盃の酒なりと酌かりして我此痴想をいらしたまわれしと耻としの
 びて語りけるが金をののみたる紙に物かきたるを見れば
 山崎やすへり道ゆく油賣打こがすまで泣涙かな



都
 五条坂の
 遊者
 番士屋の吾妻

油賣
 餘三郎

といふ歌とかきつけたり吾妻のこきを見ていどい裏におもひ目に涙をさしくサツ、いたりしや妾ゆゑふさばり辛苦をいどいす病又臥たまふまで深くおぼしむるものうれしさよ原妾の心貧福賤にかゝらば只趣を慕ふなればいかでうおん身の貧さをさらせんや妾は物語なきとおほかれと此所は街上のはしちかなり妾が坐敷へおひせうしといへば傍邊にありける花車の女これを見てしおひへす袖乞めきたる此婆々や油賣のまづしき男をつれもきたまふは他の罪ゆるべしといひてどいむれども吾妻の耳にも聞入すいざたまへといひて桂つやをる裙さばき二人女童を脇立に三尊佛の御來迎玉の弁もらゝどもらぐ光明駒下駄の連歩をうつそ八文字親子二人の極樂にすくいとらるゝまゝちよて後につさそへ歩み去ぬ〇かくて油賣親子の者富土屋がもとに去青貝の坐敷と稱する一間よいたりて見るに風流清雅にして且美麗なり唯光耀て見る目もまばゆくぬならぬそら焼の薫室中よみちてひたすら鼻を襲へり床柱 床縁邊 柵の板袋柵の戸のさぐひはさらなり天井欄間の板障子の腰板屏風歩障の縁衣桁簾等のたぐひ都青貝を鏤たり二階の厨子文案文車文臺のたぐひ料紙硯 匣 香道具基將基双六の盤巖器鏡臺枕のたぐひ皆青貝ならずといふとさし

ほどなく離放女童等が持運酒飯の器を見るに是等もすべて青貝を鏤たり誠是仙窟よ遊が如く長文成が筆あらでり書盡すべうもあらずとおもひれけりしバしありて繪障子をさといひらさ衣のおとまひいらくとして吾妻が衣服を着かへて出る姿を見るも襪も帯も青貝織といふ織物にすればあやりの手を盡さして西湖の十景をこまやかに織せたりさて油賣の男のそを近く寄て笑を帯郎の計すでに成ぬる上りものやおん名をおかし給られかまといふ油賣のいままゝいらへもせざりけるよ明障子をへだてるかあたに入ありてたのやりに打笑さすがにかしこき君なりややくも曉給ふかな今何をつゝむきいでおのれ賣油の正体をあらわして見せやさんといひッ、立出たるは乃長笑腹蟻右衛門にてありけるさて蟻右衛門かなたあむひりひりねてまうしつけおさたる用意の品をこれへ携へ出よとよばりければおしこまりいどいらへて許多の歌妓帯間等廣蓋のうへに黒羽二重よ鹿子紋つけて白くりの袖べりしたる羽織小袖茶の下着箔の帯摩打たる切箔の疊紙平座地の一ッ印籠阿保秋山が川原軍のさまりきたる扇紫のおき頭巾書院簪子さへそへてぬらり大盡の身上の具をのこりなく載てさへ出大勢立かゝりて油賣の男のむさげなる布子をぬかしめりの美麗なる衣服を

著せのむければ 忽よき大盡の姿とあり上座なほりて 脇息に身をよすればかの老女の
 るか下座に居のりぬ吾妻のなほ打笑ッ、郎の實の油賣のいあるまじと推量せしに果して
 とかひすあどてかゝる 戯をまゝまふるといへば 蟻右衛門すゝみ出是全 戯あわらむ其い
 とれのおのれ語て聞すべし此人の我したしき友よて 山咲餘吾郎といふ人なるが此度所用有
 て上京まおのれ前の日ともあひて此曲中を見物に來りしに此主おん身を見とめて頼ま
 みぬん事を望といへどもれん身はいかある富翁嘉客にも用意のいまみぬたまひすすでに
 頃日鮎尾賀堂左衛門とかいふ金持の武士の浪人れん身を深く戀しひて 許多の黄金を費せ
 ども一夜の枕もゆるし給ひざるよしとて尋常にていまみぬ給ふまじとおもひおのれ 媒
 の意にて餘吾郎ぬしの誠心を見すべし此計をおもひつきぬ唯うりそめの戯とちねもひ玉
 ひとどいへば餘吾郎も其詞の尾につきて今蟻右衛門ぬしのいれし所のとく少しもいつ
 りならず我姓を山咲といふを山崎にとりなしておもひつきたる油賣かくまで 慕誠心を露
 かりも受おさめぬびねかしといひければ吾妻のいとうれしげにて烟花のいやしき妾の身を
 さばかりおぼし玉のると何をもちかこれに報はべるべき妾これまで 許多の客を接は入れ

或ハ酒を食るあり或色に耽るあり唯笑を買 戯を求る事のみを知て香を憐玉を惜の真ある
 人にわいせ彼を見これを見るにつけても郎が如き志誠の人の又得たしいかでか等閑よお
 もひはべるべきなるにても彼老女の何人ぞとつぬれば餘五郎いなくこれも蟻右衛門ぬし
 のとからひにて諸國の鹽場を拜にめぐるよしの旅の老女をけふ一日雇ひてきつるなりとい
 びさして老女にむりひ汝を勞して我望をどけたれば骨折代ふこれを興るなりといひて彼五
 兩の金を與へければ老女の金をうりおさめてよろこびやがて別を告て歸りかくて歌妓幫
 間等さまのの藝を盡して酒をすゝめ吾妻もみづから琴をかきあらしめて 響應ければ餘五郎
 の遊仙の夢をなほこゝちして 魂九天の上昇り手の舞足の踏ところをしらすやうやく時
 うつりて夜にいたり酒酣あるとき吾妻餘五郎の手と携て 閨房にともなひぬ〇うくて餘五
 郎の此日を始として此一條の春路にまよひ守役の十字兵衛の神社佛閣に詣名所舊跡を遊
 覽するといつたりて日毎に此曲中に来て吾妻ままみえけるに吾妻も餘五郎が美男なると趣
 あるに心をうさふけて水もくさじとぞらざりけるしかども吾妻の餘五郎を養父のめま出
 されし同家中の士なりといひ露ばかりもしらす餘五郎の吾妻が素姓とする事なし去程に餘五

郎の吾妻に深くしむしむつたてものかゝる十字兵衛がまをしのぶを愛におもひ一計
 と思ひつきて十字兵衛にいひける我石工がいふ所と聞に石塔に用うべき石當地にあ
 り合さるるも他國へいひつかりしてよき石をどりよするとあれは今しばらくいとま
 べければ汝の且前に紀の國お赴き高野山に登てしうるべき墓地を見て宿坊お逗留して我
 到るを待べし我の當地に残り石塔の成就するを待て後よりゆくべしといひりければ十字兵衛
 の老實ある者なればこれを偽の計と露しらすしかるに左様に仕るべし随分石工をい
 そがし玉いて一日もいやく彼處へかん越有べしといひて旅装束ととのへ紀の路とさして
 出たぬかゝりて後の餘五郎たれりくるものなく吾妻が許に連留して旅宿もある日の稀な
 りけり爰に又船尾賀堂左衛兵門といふ武士の浪人此年の春より吾妻を深戀慕て許多の黄金
 を費といへども吾妻の殊に彼を知らひさまゝの事に托して接さりければますます胸
 をこがし手を盡し品をへて相見ん事をもとむれども一夜のろひ臥り更ありしたしくもの
 づにいづりければ堂左衛門の深くこれを恨けり扱餘五郎の此程をばらく吾妻の許あ來ら
 ざれば吾妻のそれを愁ひ若必變よやあと思ひ屈し鬱々としてたのしまを病に托吾妻打籠

居たるに一夜野ふせりの乞食とおぼしきもの古高籠を背おひ富士屋の奥庭より吾妻を圍に
 しのび入獨臥居る吾妻を捕へて手拭を口にはませ高籠の裏におし入てこれとおひ驚のと
 ころより逃れ出飛ぶが如くにいしり去大なる川のはとりにいよりくるに此一艘の船を繫
 て待人あり彼野ふせりの此に高籠をおろして裏より吾妻を引出去口にこませたる手拭をど
 り捨て吾妻を船中に投入たり吾妻のさぬとありて人ごいちもなかりけるが稍ありて目
 をひらさうちわなゝさつと月のひかりにつきて四邊をかへりくるに此川の渺々として宇治
 川とも思しき大河あり此船にある人の則是堂左衛門なれば吾妻は唯あきれたるばかりな
 りしかるに堂左衛門の野ふせりを船に乗しめて且褒美の金とわたへ船を遙く漕いださしむ
 吾妻の船中に打伏て泣居る夕立の雨に蓮の花をそこあひ木枯の風よ玉の枝を折けるにか
 どうたがひる堂左衛門の怒れる面色にて船中に座し吾妻を罵ていづく汝賢にあらずの我
 いふ事をよく聞我汝がため許多の黄金を費といへども我を頼人のとくいみさらひ
 てあつてゐるのともいなる理を金だにもちうれ何者にもあれまみゆるが阿曾比のあ
 ひならせや我汝にからむ目を見せて十が一ツ憤をいらはめと思ひてかく奔出しぬとらへ

野ふせりも音りて口をどいめずして此船を遙むらふの芦深きところに漕入て堂左衛門の堤の上に飛のやりみづのうら携ふる吸筒をとり出しまくり手して船中を見えろし其女を此に引あけて我酒の伽させよといへば野ふせりのこゝろはいひつゝ吾妻を引立て堤にのぶらんとするに吾妻の船梁にしりぞ抱つたてあへて身をうごかさず堂左衛門のこれを見てしふとさ女めかきといひつゝ手酌に數盃をうたふけて又船中にくたり來つみづから吾妻が手をとりに引んでんとするに吾妻のたい聲とらざりに泣さげへば堂左衛門のますゝ怒りやとれ汝我に打れんとをもとむるかといひつゝ襟首をとらへて引倒しければ櫓鉦くづけてをらくと落元結されて翠の黒髪みづれけるが堂左衛門をみざりて打んとするを吾妻ふりとあちて桅も立上りいとすさまじく漲りおつる水中に飛いらんとせまを野ふせりの乞食のいてふためさて抱さといめぬ堂左衛門の盧胡汝身を投る体をなして我を赫さんとするやとどへ汝死したりども我汝を人しれず奪出させたまへ我に於て何の難義のあらんざりあがら命を失はすもやくまことなり汝もし泣やまを放て歸らしむへま泣やますはいつ迄も歸すまじといふも吾妻のやうく泣やみけれを堂左衛門と野ふせりに船を漕まめて雷の處に

歸り吾妻を岸の上へ投上て船はいづくともなく漕去ぬ吾妻と毒蛇の口をまぬりれざりと雖も此どころのすべて草花やど生しけり露濃なる野原にて方角ぶよしれを殊更夜中なればいづくを心めてに走るべうもあらず恰足なる蟹の如くなればすべさやうかく只聲をいながら泣けるもさ側づかひの女童が聲してこちらの君何にやあそいれ給ふ目を醒し給へといふに心つきて睡を醒せばこれみな南柯の夢なりたり吾妻はいとたゆげに息をつさくるし夢と見えとよといひて身上の汗をぬぐいせ居たる打しも花車の女來りて吾妻にむかひ堂左衛門ぬし御身を贖いだし給へんと議したまひて身の價を千兩にさしめ此庭の冬牡丹の花の散比凡廿日を期に金を渡して曲中を出し給へらんと約したまひぬおん身は彼主をさらひ給ふよしそのあしき心ぞかき彼主の如く金多く持たる人におもひれ給ふとおん身のよき幸ならせや身受の事もよろこばしく思ひたまへといひてそいろ笑を吾妻とこれを聞とひとしく胸つとふさがりてしやしいらへもせざりけり○遠おもんとかりなき時の近き愁ひ有とい今餘吾郎が身の上なり餘吾郎のじめの何どの路用の金のうちを遊興につかひけるが後に吾妻を揚づめにして着をさしめけるゆゑ穢の間に彼常住金の二百兩石塔料の百兩まで残らず

つかひ盡しけるよそいかにすべきと思ふを更にお衛計もなければ此はきり吾妻が許にもゆり
 ず旅宿に籠居てひさすら心をくるしめけり吾妻が方よりは日毎に文をおくりけるが一日の
 文に堂左衛門妾と贖出さんといふとにつきて急にまみへたきよしといひ越けれど餘五郎の
 ますく心をくるしめ其夜うしこへゆきて吾妻にまみへたるに吾妻のひら身受の事を歎
 きよ死思案して給りれかしとひつゝ泣のみなり餘五郎今更常住金石塔料のなくてのまの
 ざる金をもちひ盡せしとすすすにひびがたく先當座の心をなぐさめて後に良計をほせこ
 すにしろしと思ひしゆらバ我急に本國へいひつかひして命をとりよせ堂左衛門より前
 贖いたすべしとぬへバ吾妻のこれと聞てすこしく心を安んじ酒酌かひしなとして戀結を
 ちぐさめりるが餘五郎の元來酒量あさければもししも愁を忘すれん爲に酒を飲すとし
 て此夜も爰に宿し翌日も歸らず又三四日連留し四日めの日彼青貝の坐敷のし近に出で庭
 の本草をながめつゝ二人しめやりに酒と酌かひしけるが吾妻手匣をさぐりて錦の服紗につ
 いとたる横笛を取り出しこれの妾が父の秘藏せし器とまうす笛なりおん身過つる夜の物語
 に笛を好給ふよしのさまひしかさだめて堪能にわたりすらめ妾も片端をまなびぬれと愛節滋

身にしはべれば静慮なくすておきぬぬのくへをしへまのれとらふ餘五郎いひくれたのれ
 とでも拙けれど所望とあれバ黙止がふしといひつゝ并笛をいひて二ツの笛を二人ならび居
 て其手をせまへ餘五郎指を壓バ吾妻これを吹ぬ此ときのは是冬の始小春といふ時節にて殊に
 暖氣なりしが此庭の花壇に植たる冬牡丹の花霜雪の欺をおぞれす咲みざれて國色天香春
 の花にもをさくおとらす造化の不思議をあらはせり殊も奇き一ツの朶も二輪の花並
 咲て一輪の赤く一輪の白しこれいはいゆる雙頭の牡丹なり時に二の殘蝶花香をしよひ翹々と
 してたのふれぬ此二ツの蝶一ツの白一ツの薄縹の色なり是もまた奇なりといふべしまゐる
 に吾妻が手飼の猫花の下に隠居たるが忽眠を醒して二ツの蝶を目がけ縹につたたる鈴
 をからくと鳴しつゝ飛上り駆めぐりて餘念もなげに狂ひけりかゝる折しも塵さきの柴折
 戸の外面に白木の手束弓に短冊とあまたつけて持たる歌占の女趨起耳をかたよけて笛の音
 色に思われたる体なりこなたの二人のちや笛を吹すまし其聲咽々愁々として人をして腸
 を断しむ猫のますく蝶は狂ひつひに薄縹の蝶をとりて喰殺しぬ時に北風はげしく吹て杜
 丹を搖動しけるが忽赤き方の花とらくと散て白き方の恙なし餘五郎これを見て笛の手

をどいめていはくあき不思議や牡丹花下の睡猫ハ其心蝶より我之必牡丹にあり一技に二輪の花咲て赤白二色にわかる事堂天工の私ならんや昔唐の玄宗皇帝沈香亭前に牡丹を植て楊貴妃と共に愛し玉ふ是すあち双頭の牡丹なり帝これを見そふりして花木の妖なりと賞し玉ひ楊國忠よまふと聞牡丹は花の王といふ一枝に両花の王有事今すぐに南朝北朝とわれ給ひ一天下に二人の王のわわしすに異あらず然に南方の火に屬す紅牡丹水に屬す北風のために散失し北朝の聖運強ましく足利殿の徳風草木をなびりして南朝味方のももからの衰花を散し給ふ前表あらん前の年信州苦形の城にて亡びざる相摸次郎時行並に其砌打死しる大佛九郎貞直等が殘黨餘類南朝の天威を假て足利殿を亡んといかるよし緋威の鎧草に身をかためたる冬牡丹霜の剣のしのごとも北朝の烈風いかてか防方あらん今見しごとく紅牡丹の散たるハ平家に屬し時行か殘黨滅亡に疑あしとまれゆくまれ足利方にとりてハ吉祥なりと心の愁もうち忘れていどよろこむしにひけるが吾妻ハ涙さしくみて妾が實の名ハ小蝶といふ二ツの蝶ハ夫婦も同然郎と並て百歳を花に宿て過さぬと心の願も遂られき女蝶の方ハ飼猫にとりて非命に死すとおふ我方のうへの不祥ならん昨夜もまうせ

し如く堂左衛門廿日と限て根引せんといふよしされば妾ハ此牡丹の花の散時節のはやくいたらんを愁るこいよく彼が方へ根引の相談さるるとたの活存を心ああらせりねて牽牛織女の絶ぬ契を羨て比翼連理と誓ひし事も其時ハ胡蝶の夢とおぼしめせといひさして餘吾郎が膝に顔をわしめて、聲もをしまは泣ければ餘吾郎ハ背を撫捺りていたのりぬ扱前程より外の方に立る歌占の女ハ花壇の方に目もやらで頭をうたふけ今聞し笛の音ハ尋常ならず女ののける足駄にてつくれる笛ハ秋の鹿ならすよると聞夫と鹿笛これも美人の吹すさむ笛の音いろのいふのしさよとうちひとりごちて居るなるかゝるをりしも餘五郎が奴僕汗もしとくに息もつさあへき庭づたひにいとがとしく來りければ歌占の女は庭木のしげりたる裏にかくれ入ぬかの僕ハ庭上に跪き餘五郎にむかいていハく御旅宿に大變事出來いゆるお迎ひあまのりいといハくおん歸りいへりしといへを餘五郎のいふかしみそいかなる變事ぞとたづねれば僕ハいハく此にていもうしがたき事にていハくどくどくと急がすにぞ餘吾郎ハあは心ならずいそぐハしく身支度して僕と共に歸けりあどにハ吾妻が何事やと胸といいたひる物業吐息して居たりしハ彼歌占の女ハ木陰を出て又柴折百のも

とに立寄聲たかやかぬひけるの夫歌の天地ひらけし始より陰陽の二神天のちまたにゆき
 わひの小夜の手枕むすびさだめし世をまなびて今にたはざる妙道なり夫婦の相生縁むすび
 待人の来る來ざる伊勢の演歌名をかゝて浪花のこのよしあしめくはしく判じてまゐらす
 べし占といせ玉へや歌占といせたまへやといひければ吾妻はこれを聞よ折に歌占
 爰と呼入とふべしと掌を打ちあらしめて女童をよびあうくせよといひつくれべいらへの聲も
 長露地の飛石づなひに彼方にゆきうの女をともなひけれの吾妻は出て向合歌占をひきまう
 すべしといへば安きと心得のべり一番に手もわたりたらん短冊の歌を讀みへくひしく考
 てまゐらすべしといひつゝ弓をさしいだせと吾妻の心を神に念じをしへのことと短冊をと
 りあけみれば

鶯のかひこのうちの時鳥しやが父に似てまやが父も似す

といふ歌なり交しむらく考ていはくおん身の幼くて實の父をうしきや養父に育られ給ふま
 らずやといへば吾妻ははく誠によくわひぬ精くひしく叛じてふびふへといふ女又いひく鶯
 の子のまありけり時鳥の鳴音うなむさ宿歌よて度々難義のあるべけれ鶯にわうといふ字

音ありわうは逢の訓に近く又來る春の幸は逢といふ占なりたのもしおやへしゆへといふに
 ぞ吾妻の少し愁をばふさめらうれしや苦しめるまじくしかといひて喜ひぬかくて彼女吾妻
 がのたごにおきたる笛を見て目をなたす卒爾なぐらといひつゝ乞とりてうちなめめ
 れの濡髪といふ笛にはあらずやといへば吾妻はいふかりぬかあしてこれを見知り給ふやと
 づぬるよ女いとく我いかでか愚を見たりふべきおん身は伊勢の國の樂人二見太夫是次と
 いひし人の娘あるべきといふ我はかん身の姉あると其証を見すべしとて懐より笛の箱を
 取いだして見せけるに濡髪といふ金字ありこなたの笛をおさめ見るに間に髪を不容符を合
 せたるか如き箱あれの吾妻の且ねどろさ且よろこびさて姉うへよておはしけるかのねて
 母御のものがたりは姉うへありとは聞しゆおん身と妾とをづりに年三ツちかひし兄弟に
 て幼ときわかれくにありたれば少もおん顔をおやへ侍らす今日とからずも此笛が證と
 なりてめぐり逢しは父うへの導給ふにうかがひなしさりながた愧き此姿と泣くいへと姉
 の涙どおしかくしいなく少も耻づきとにわらす養父の急難をばくふとめよ身を賣しとい
 ふ事は風のたよりに聞しかさいつくも所もさたかあらねばつつかしくいれもひきながら尋ね

へき便もなかりつまづはやく聞たきと母八のおんこと恙なくおひすや否といへば養父も母御もれもひかけぬの今御出世をばしぬ夫につきての物語るべき事さまじくあり愛の人目も端近ければまづこなたへといさなひて奥の一間に入にけり時に箕腹蟻右衛門沙土七といふ僕をつれて樓上とくだり此所に出來て四邊を見まのし聲をひそめていひける此も端近きれどもあたり人なきこそ幸なれ我汝が心底を見といけしゆゑ密事を語て聞すぞりし我かねて隠謀あるにより執權職山咲庄司あ何かな罪をおぼせてうしあんと思ふ折節餘五郎が上京と幸ひ彼をそゝのりして此曲中に誘放埒者よせやと計し夕彼原聰明で思慮淺からぬ者なれば計もむなしからめと思ひの外吾妻が艶色に迷て心を亂し許多の黄金を費し父の代參して高野山に納むる金までも残なくもちひ盡せし様子なれば當分鎌倉に歸る事能ふべからせこれによりて我且彼よりさき鎌倉に歸り彼が在京の中の放埒をくひしく主君まさこをわけて讒言をもちひなばおもく切腹かろくてあらず拂ひは必定なりしものとさし其罪を父庄司にもれよばさしめて親子ともいらしなふべく思ふなり我宿望をどげあむ汝も縁あまた興へてよき武士に取立得るすべし喜ばしうらすや主用も已にとゝのひ今夜

が曲中の餘波なれば阿曾比どもを呼來りて汝もども一盃をかたふけ前祝せよといひけれバ沙土七の小踊までよろこび勝手の方へ走り去ぬ蟻右衛門はたのまげに臂枕して寐をべり膝の頭を打て拍子をとり月にこつらさ小倉山其名のかくれさりけりと曲舞々の音囀と開ツ、寛々として居る折もある旅装束したる武士庭づたひに來るをみれば是乃梅个谷郡の家臣袴田紺九郎あり蟻右衛門のかくと見るよりいそがしく身を起して立向氣づかひしや紺九郎主何等の事ありて上京せられまぞといへば紺九郎の息もつきあへず火急の事を告んため夜を日につきて上京し和主の旅宿をさづねつるに此所よおひすと聞てこれまで來れり爰の端近にて密事を語りだたししかるべき所に案内したまへとくといそがすれば蟻右衛門の益氣づりひおくまりたる小坐敷に連去てはやく様子を聞したまへといふ紺九郎聲をひそめていとく和主を我どかねて心と合せ蛇个谷の老女の味方又つき且月影个谷と梅个谷の両家を亡し其勢に乗じて盤據の旗を飄し南朝の天威を假奉りて北朝をかたふけ平家再興の時を得て我輩も一國の主とあり歡樂をさひむべまといふ企する隠謀の密書を山咲庄司に奪とられて隠謀あらわれ庄司君命をうけ上京して和主を捕へ鎌倉にひくとて旅の用意

をすると聞こいかにすべきと驚く間もなく我主人あも告たるにや我宿所に捕人をむたら
 れしゆゑ危き所を斬抜幸うして逃のはりぬ和主もどくく迹支度し給へといへば蟻右衛門
 の忽面色青草の色に變じ心あつてゝものぶにいなざりしがしはしありていふやう隠謀
 露顯のうへ片時も當地に足をどいめ難し一旦兩人わりれく身に隠て時節をうかひふ
 にしかじ再會の所なりやうくと耳につきていひけれは紺九郎と打點頭て出去ぬ蟻右衛門
 と沙土七を呼出して有増を語附せ汝もしばらく身をかくせといひて持合せたる金を路用に
 與へ主従わかれてれもひくお出去ぬりて時刻もやうつりて此日も已に暮けるが烟花の
 ならいしどて晝よりもなほ賑しく二階坐敷奥坐敷間毎く酒宴を設或は彈或は諷笑ふ
 あれば耳語ありたのぐさまと興じけるに唯青貝の坐敷のみは人けもなく灯火もたてざり
 けりかくて初夜過る比庭ささの萩垣をなし破てしのび入たる白髮の老女椽に上りてひし
 くど歩ゆき闇にも光る菊の眼とくばる廣坐敷の連棚に載ありし吾妻が手箱に探りあた
 りて彼笛と奪取懐に押入て退ら出んとしたる折しも吾妻とみづから手燭をとり姉と導
 て此どころお出來り老女を見つけてあやしみツ、手燭の光りに顔を見てヤときたいいつぞ

や餘五郎君に雇はれて來つる婆々あつたやといへば老女の見むさもせずものをもいはず去
 んとするを歌占の女弓をもて押戻せば老女これをふり拂ひて又踏出すを歌占は弓を斜に
 取なはしてやらじとさゝゆる即坐の柵しはらく挑みあらそひぬ時に怪哉老女が懐にか
 くしたる笛おのつかつ音を發しければ吾妻の驚ささてこそ曲者其懐こそあやしけれとい
 ひツ、手燭をさしつくれれば老女の手バやく打落す二人は探る暗まざれに行方もしれずあり
 にけり

是乃鎌倉蛇ヶ谷の老女あり味方を招け軍用金を集るため諸國の靈場をめぐる旅の女
 に身を扮ししはらく當地に足とどいめしが此夜笛を奪ひとりて又他國に赴きとんとあ
 ん

④ 木枯の果のありけり記念の竹刀

扱も其時餘五郎は僕のむかひ心ならざれを道を急ぎて旅宿に歸見てけるに「昨日紀の國よ
 り歸りしといふ南方十字兵衛腹十文字に搔切て朱に染りて伏居たり餘五郎これを見るよ
 りこばそもいかにあはてまをひ抱き起して見るに賊見事なる自殺にて己に息絶身上と

氷の如くに冷りさまりければ唯のまされて物だまは長かりてやうく心としりぬ何ゆゑにてなりしやといふより傍邊をみれば自筆の書置のりいそがしくひらき見るに其文にいはい

君僕を當地に歿しれり先だちて紀州高野山に赴せ給ひ僕御石塔成就の日と持て後より愛べしと命じおかれし處御留主のうち旅宿のつれづれ偶五條坂の遊君にしさしみひて勿肺なくも御先祖御追善の爲御携あそばさるに預おせられたる常住金をのりひ拾今に至りて先非と悔自殺仕しやうく殘金百五十兩御座此金子を石塔料に遊され乍憚御父若へよろしくさこえあげさせられ僕が死骸御かた付被下しハ生々世々難有儀に奉存し恐惶頓首

永和元年十月某日

南方十字兵衛

餘五郎君

とうきさうり餘五郎これを讀終て頻に涙を落せ扱て我放埒ふ金子を獲らずつかひ捨ける事を知り我罪をわのれケ身よりひて切腹しのちくまで馬鹿者不忠者といわれんといひす

我をかこひて死したる忠志たへいふべきものになら戰場の打死も後代に美名を殘さめと思へばこそ命もをしまざれ汚名をいといせ忠死せし者の古今に稀なり不忠者となりて死しるる心底をいりり思へハ腹もちぎるこちすなり今果思ひあひすれば前住富士屋の庭の胡蝶のありさま不祥なり歌占の歌に

北は黄に南は青く東白西くれなねにそめいろの山

といひて南方は青さにかたざる此をもつて考れば淺黄色の蝶猫ありまれたるハ此南方十字兵衛が非令に死すべき前表よてありしものを唯冬の蝶のめづらしとのみ思ひしは凡慮の拙き所なり彼を思ひ是をおもふに我傾國の色に迷ひ祖父追福の金を失ふのみならずあたら忠臣を殺せし事不孝といひ不仁といひ我身の罪の重き事いかり知へらもわらず今後悔すれども更よかひなしといひつゝひなしに骸に取つさて悲歎の涙あむせかへる生る人にもいふ如く嗚呼面目もなき我放埒ゆるしてくれよ十字兵衛ころろさしハ過分あれと汝よき罪をおとせいかでかなのらへ居るべき我も今自殺して汝の死路をしたは臣従どもに死出三途をとるまひ又の世と汝ケ臣と生れて此恩を報べしといひて書置よとえたる百五十兩の金を

とりあげざるにても此金といひにしてと、のへ石塔料に殘しおろかきけるやと此不審はれ
 ずなは四邊をかへり見るに十字兵衛が常に身をこまきる刀に乍憚此刀と餘五郎君へ
 記念に差上奉りしとささる紙札をつらぬ餘五郎これを見て誠には是と前年相摸次郎
 時行信州苦形にて亡びたる刻み此十字兵衛日月のおん旗を奪て我君判官と差上たる振群の
 功によりて我君より賜たる朝鳥といふ名剣にて陪臣の身に稀なる響なりとて當時羨者お
 かりしと聞我其時幼年にて思へば夢の一番幸哉我今此刀にて切腹せば主君のおん
 手打になる同然にて聊罪を賞やすがともあるべしと決し面肌をおし脱て彼刀を抜
 放しけるにこれ眞の刀にあらせ竹にて造りたる刀よて十字兵衛が自筆の文字ありこれを讀
 に

拙者此度の切腹犬死は相成可や横御短氣御慎遊され可下い

とかたつけたり扱ひ此刀の身を賣て百五十兩の金をとのへくれたるに疑なし此竹刀の
 かけといひかくまで深く我身のことを思ひくまける心底の過分さよといひて又死骸にとり
 つき泣けるがいうに思ひらへしても活て居られまどひとりごち再我差料の刀を抜ては

どく腹につさみてんとしたる折しもやれいやまり給ふなと腹をのけて次の問より走り出
 餘五郎が手に取つさてといめたるの庄司が僕路平といひて此度鎌倉より飛脚に來し者なり
 餘五郎の手をといめ汝何用にて上京せしぞと尋るに路平の手をつき頭をさげ恭いひ
 けるに拙者の昨日京着仕いおん母君連夜おん夢見あしきおるに君の御旅中を殊の外氣
 づひ給ひて拙者に命せらるる安否をとい奉らん爲飛脚に參りいなり君只今は自殺遊さ
 れはては十字兵衛は犬死になりは彼短氣をといめ犬死にならざる機にと其竹刀に書殘せ
 しの此事よいへ彼が忠死をおん憐みははいおん身を全うあそべされよき時節をもつて十
 字兵衛がおん身よかりて相累し汚名をすゝぎ南方の家を恙なく相續仕機によく御
 賢慮をめぐらされくごされかし昨夜十字兵衛密に拙者を近づけてやせし其方上京せしこ
 と幸なれおん供の若黨奴僕おしけれも口さがなければ我心腹をあらしがたし其方と新
 參なれども見處われば我思ふ處を一通りいひ置わいだ我自殺の後餘五郎君もし面目あさな
 とれおしめして卒爾のおんふるまひもあらば我になりかひり此理さこえあげてといめ奉
 れといひ殘まは子細を今十字兵衛になりりて具にさこえあげいべけれバ十字兵衛直よ

申上る事とお祈りめされて一通りおん聞くだされおん自殺をれんといまりくだされかし扱
 十字兵衛まうしはい我餘五郎君五條坂へおん通ひある事を露バウりもしらす先に紀の國へ
 去べしとある命にしたがひいま若年のれん方を手放して所遊お都れ地に長く逗留
 せまうせしは我一生の誤り今悔ともせんすべなし我已に高野山に逗留して相待すといへ
 ども御登山をければこといかなるゆゑに御逗留と氣つかとしく思ひ急歸て一昨日京着
 し若黨奴僕等も聞バ五條坂に逗留し給ひておん歸りなきよまきはしくとへば常住金石塔料
 ともに残らずおんつかひ捨の様子あければことけしうらざる事我おん側につきとひ居らば
 いかやうにも諫言をやしあけてさある御不行跡はさせまうすまじきよしなしたり残念とお
 るへどのへらまといりにすべきとれも煩なりバへ昨日石工來りおん石塔残らせ成就せ
 しもある代金をまうし受たくいといふ旅中なれば金をとへの償へき手段もなく情なや
 ん國元にてい少しもあしきれん行跡のなりしが畢竟傾國の色よ心を亂し給ひての事なら
 め尋常の諫にてい御本心よりへり給ふまじと思案をさめられたれば我一命をさしわけ奉り
 てれん諫まうすなり又朝鳥の刀の身にもかゝがたき物なれども時の用よは是非なければこ

れと賣代あして金子百五十兩とのへおさぬこれを百兩石塔の價につかりされ残る金にて
 石塔を高野山へのせ玉ひせめて父君の御願望のなかバを遂られ一日もこやく鎌倉におん
 販りありて我書置ともつておん身の曇を晴され必く我切腹をおん悔をなきやうにまう
 し上べし父君のおん目々ぬおて餘五郎君の守りにつきそひ來る我なれといづれの道よも切
 腹せざればまうし分ちぢさしおなじ死る道ならバおん身にうり其罪を引うけて死すべ
 しと己に覺悟をさめめたり是おん父君をおさむくお似たれども其罪の冥途よりれん説をま
 うすべく思ふなり此度の放佚無慙と御後悔おそされ此後の阿曾比ぐるひの勿論すべてあ
 しされん行跡をかたくおん慎みあるやうに我にありてよくくさまえわけくれよといひ
 残し兎角君のおん事のみ苦に仕國に残せし妻子や孫の事なども心あかりあといの事を
 どもさぶめて氣づかいしく思ひいんが夫等の事一言もいひ残さる心うちを御推量
 ありバされいへかしさばかり厚き十字兵衛が忠心も今御自殺遊ばしての氷の泡と相成ひ此
 處をよくく御分別遊ばされくごされかしとくしく物語りて悲歎の涙せさあへず餘五郎
 もこれを聞て益歎きに迫りけるがしバしありていひける十字兵衛らひひ残したる詞と

いひ此竹刀の書置といひ死ぬも死なれぬ義理あれを生害といひまざるべしさりながら夫にし
ても十字兵衛に常住金をつりはれ石塔をり高野山に建たりといひておめく國へと歸り
がさき理なれば我のしぱく身を隠しせめて朝鳥の刀を買もて十字兵衛が家名を立
る便とすべし汝と十字兵衛が此書置を携て鎌倉に歸り我の面目なきとて京都より直に
行方しれずなりしと父母お告てくれよといひふくめさて十字兵衛が亡骸と病死の体にして
鳥邊野に葬りの金を用ひて石工の價を償ひ石塔に書簡をそめて高野山に送りつかひし此
度召運たる若黨奴僕等は此所より直に暇をつくりし路平一人と鎌倉へ歸らば旅宿をあげ渡
し十字兵衛が忠義の魂をこめたる此竹刀の我一生の守にすべしと餘五郎これを腰に帯て此
所と立退浴外の菜島村といふ處の小家を借昨日に變る浪の憂身となり手すあら羨望の業
をなしてしばらく月日をねくりけり〇うくて路平は鎌倉に歸り主人庄司夫婦の面前に出で
十字兵衛が書置といひだしかやうくと告たりけるに庄司夫婦とこれを聞十字兵衛が忠死と
ハ歸しらす彼日來の老實に似す不忠のいたり曾語にたねたる行跡なりとて怒り強く頭に十
字兵衛が妻子を召呼右の始末をいひ聞かせ書置を見せければ十字兵衛が妻眞弓是をみてあき

れりて兒子南餘兵衛と共に且驚且歎けれども庄司の怒りつよけれハ少の宿死もなく其家
財を獲らず取上妻子を嗔方拂にぞしたりける十字兵衛が妻眞弓といふと夫は年四ツ五ツま
さりて半白の老女なり兒子南餘兵衛といふ前年妻をうしなひ窓太郎といひて今年五歳の
男子ありかくて餘兵衛窓太郎を背れ母の手をひきて年ひさしく住馴たる鎌倉を立退涙に
袖もはしめへすこのむ木陰も雨漏こちして立よるべき所にあければ眞弓とあけうち歎
き夫十字兵衛の目來ものかさ氣質にていさかも邪みたる心を持き行ひの正しき人あ
るに今更年にも耻す阿曾比ぐるひも主人の金をつかひ捨給ひしと妻子の前も耻給ひずやよ
も本心よひあるべからず物に狂ひやし給ひなん自殺し給ふとも汚名と世上に隠れなく彼が
類の武士の風上にも置まじき者さきと死後までも辱められ給ふ所は心づき給ひせや家名
と汚すのみならず子や孫まで不忠者の子共等と一生人に指さしれ忌嫌のれんを不便とほ
やさきや怖めし十字兵衛の情なき夫やと涙にひせびツ、うさくせき主人の罪を身にか
づきて忠義のめめ死せしと夢にもしらぬを哀れなる餘兵衛も歎きと盡されどもつてま
あるべきとならねば母をなぐさめツ、つひも鎌倉を出去ぬ切儀路平といふある所存やあ

りけん直に假を願て行方しれずありにけり

②我雪とれもへば輕し身受の千金

餘五郎旅宿よりひかひ來て歸しより後の吾妻が許に音信をせされば吾妻といと氣づかりし
く思ひ文かき人を雇ひ旅宿まつつとし音信を聞けるよ使歸りていへるハ餘五郎ぬし旅宿を
明わさして國も歸り給とすいつちへ行玉ひけん行方しれずとやすといひければ吾妻ハこ
れを聞とひとしく胸つぶれて露現もあくあされまきひッ、さてはおやく黄金を費し玉ふも
ゑにしかなり給ひしに、やさりとでもかうくと打あかして歸り給はぬこそ怖しけれと或は
恨或ハ悲ものも咽ふとふらず夜もねられず月日を過れば死あ、ちもあけれさいかあむす
べる露の命強面消も失あで魚れ物を思ふのみなりゆくて日をおくりけるに鮎尾賀堂左衛門
富士屋に來りて吾妻が身の代金とハのひつこをいよく身受すべしといふよぞ富士屋のわ
ると吾妻をよびてあうくといひ聞せ堂左衛門ぬしの方へゆけと云よ吾妻はいらへごせ
辛只泣てうけがのさればあるじはいといらたら花車の女にいへると吾妻身受の事をうけが
はぬは我まのいふりなり彼の姿に背を捨おきてと外ハの阿曾比等よあしき癖つきて

我活業の大なる妨となれば打呵てうけがのせよといへと花車の女心得いといひて吾
妻にひかひ或ハゆる、理を説さかせ或強くいひこらせを餘五郎あらでハ夫にせまじと
ねて心に誓ひをればハムらにいひてもうけひりす花車の女ももてあましてううくとあるじ
に告るよあるじは大に怒りいでさらハ辛目見すべしとて吾妻をとらへて上着の衣をぬかせ
まづかに肌着一ツにしてまおさ帯にて高小手手にくくりつよく打擲ければ吾妻ハ聲かる、
までに泣さるるを庭に引ぬろして遙隔たる假山のはとりの松の木に繫おきぬかばかりの
名妓をりく情なくあつかふも利をのみ貪る烟花のむじんなる人心なるべし此夜堂左衛門此
の樓上に舞妓歌妓をあまたつとへて酒宴し笑とよめき席上ゆすりみちて興しかりこれハ堂
左衛門吾妻に辛き目を見せ此方のたのしげなるを聞せて靡すべき心なるべければハハ
をしらざる愚わざにて吾妻ハ嫌ハ、るも宜なり此時ハ己にこれ霜月にて寒氣殊に嚴く空の
けしきハげしう風吹おれていみしう降くだる雪粉も揚ととして柳絮の飛にひとしく鵝毛
を散すぐとどく見るうちに高く積て一面に玉を敷りとうたがはれ假山泉水庭の木草洲濱形
草手形立石詩石瀟落し架垣石灯籠のたぐハ庭上の好景前裁の莊嚴すべてみな白妙も埋れて

添くるしう遺水もいといさうひせびて池の水もぬもいはすすなるは吾妻と松の木につな
れて薄綿の肌着一重なれば寒氣肌まどうり身上いらさき手足凍てたへがさるに身をまぶ
れを松のこきるの雪とこがれるりて身に積ぬ彼方の樓上には舞妓の立舞影明障子にう
つり歌妓のうらふ聲も聞ゆぬ

けふは越路の人の月あすはいづくの人の花扱もかさての沙婆世界おもふてたびね白糸
の昔おさしとやあふくは染てしんくの糸のもつれの物思ひ

どうたふも我身のうへと思ふばいと悲く泣きわりてあなくなるまやたへがさやぬもふ岸に
のそのすまじぬものぬ方に花咲とは身のうら草のわけしらぬ情なき心ぞかしいかに妾を惜
とも雪責とはあまりぞやりくまで苦痛をさせんよりと一思ひに殺してよとくをさきて泣
叫び彼方の樓上の騒にまぎれてさこぬされ難ひとり哀と思ふ者だになし雪とますく降
まさり吹雪に打れて撲地倒れさふれての起上り涙と血と相和して灘のごとくに流しッ氷
の地獄八寒のくるしみ絶身をどちて紅蓮の衆生に異ならず元結されて顔にみづれかたりた
る黒髪も雪積て白髪のごくなましは身も氷すくみて倒れ伏息もたもげに喚てど居たりける

かくぞ時刻もうつりッ小夜もやうやく更わさりと坐敷くの人語もやみ雪も降やみたる
に庭するの竹林さやくと鳴てのまれる雪散乱れわやしけなる者つといでたり吾妻ハ此と
さやうく頭をわけ雪わかりにこれを見るに覆面頭巾廣袖の衣服手甲股引まで雪にまがふ
る白装束しのびの者と見えたるが雪踏分て歩来つ小脇に抱るを千両箱に吾妻身受金と書た
る札をつけたるを彼方の坐敷の床の間にすゑあさて身を轉し此方に歩み来りて吾妻が背後
に立まひり氷なす刀をすらりと抜放しければ吾妻ハ驚き括れながら飛退けるよく思へ
はうゝる可貴をうけんより死ぬにしかじと思ふにぞ覺悟をさはめて身と投つけ襟さしのべ
ていざ殺せといふ案にたぐひて曲者が吾妻をひましめをさき拂ひものをいはず背に
おひてもどの所なくいりいで玉座を踏ちらし雪烟を蹴立ていづくともなく走去吾妻ハ夢の
裏になは夢を見ることらして此者負れぬさぬ思ふに千両箱を携てしのび入人を盗て逃
去し世にめづらしき盗人なり是のなすいはいれあるべし

丸 蕨屑は花を見落し胡蝶の狂乱

夫と初おき餘五郎の浴外の菜島村といふ處に隙あらはなる葦の屋の憂節滋き柵をもとめて

獨ひとりいふせく暮よるせしが夜の雪ゆきいみしく降ふくづれる壁かべのひまをもる寒風かんふう肌はだを斬きるぐ如ごとくなれば
 臥ふしちがら目めもわはせ終夜しゆうや來きた方かた行ゆく末すえのとなどおもひついでて夜よをあらし鳥からすのなご渡わたる比くら起おこあ
 がり火ひ打うちとりて火ひを打圍うちいり爐いろり裏うらに柴しばを燒やしてわより居ゐたるよ外との方に人ひとのうめく聲こゑさこむけれ
 をいふりしみツ、氷こほりつさる戸ととからうじて引ひわけ見るに小雪こゆきと降ふ止とたれど滿地まんぢにかたく
 つもりて一面いっぺんの白妙しろたへとなり氷柱つららの劔つるぎを逆さかし植うみたるやうにて見みぬて身み上うへいらゝぎぬ門首かど
 の雪ゆきをうさ分わけつ、竹たけの編戸あみせをおしひらき外との方かたを見るに赤あかさひた鹿子かのこの小抽こそでと着きて黒髪くろがみを
 乱みだしたる女身めみをなかば雪ゆきにうづみうづふしよ伏ふしてうめさ居ゐたりいりなる人にやどますく
 いふりりつ立寄たちよりて引ひ起おこし見るよ是こゝ乃すなはち吾妻わがまなればこと思おもひのけずとろち驚おどろき急いそぎまをひて
 身上みづかの雪ゆきを打うちつらい氷こほりすくみて息いきもたえくあるを抱いだて裏うらに入い醒さ薬やくをのませ燒や火びに身みを
 あたゝめなどしければやうく人ひと心こゝろ地ぢつさて目をひらき餘五郎あまごと見てこころも夢ゆめのといひ
 さしてとりすがり且まうれし涙なみだにむせびけり餘五郎あまごの吾妻わがまの背せ中ちゆうをよせりていたはりツ、
 いのあるゆゑにて彼處かゝに居ゐつるぞとたづねければ吾妻わがまの涙なみだとおしのこと雪ゆき責せになりたる
 事ことの始はじよりわやまき者ものしのび入いて身みの代しろの金千両かねせんりやうを殘のこしたる背せにおいて五條坂ごじょうざかより此こゝとこ

ろまで走來こまりすてたきて行方ゆかたしれずなりし終おわりまで詳つとに物語ものごとりければ餘五郎あまごのまれを聞きて眉まゆ
 と顰ひそりこころ得えびの事ことかかるとなたの身みの代しろを償つぐなひながら何ゆゑに奪さらが如ごとくせしや又千
 両せんりやうといふ大金おほきと出しとなたを奪さらて我門わがかどにすておさし不審ふしんありとも且何人なにかの仕業しわざなるや我
 の少しも心當こゝろあたりなしとなたのいかにといふ吾妻わがまも不審ふしんはれず妾めかけも更さらに心當こゝろあたとべら唯
 夢ゆめとのみおもひるゝなりさりちがら身みの代しろを償つぐなて妾めかけ難義なんぎを救すくひ出し處いもあやめるべき
 におん身の住給すまふ此門首このかどにすてたきてもさし妾めかけをぬん身にそいせ給たまはる深ふかき情なさけの志こゝろあ
 る人の仕業しわざなるべしとされらくまれば身みの代しろの金價かねれたる我身わがみなればおん身みと夫婦ふうふあなる
 とも妨さまたなし今いまあらためて妾めかけを給たまはれしといふ餘五郎あまごいとくこれまでのそなたの深ふか
 切過分きりかたにのほもへともいこれありてそなたを妻つまになしがたしこれまでの薄うすら縁いとあきらめ
 て五條坂ごじょうざかに歸かへくれよかならずくつれあき者ものとあおもひをといへば吾妻わがまのつと膝ひざをすゝめ
 ていそがとしくいふやうさての前に誓ちかひ給たまひし詞ことばはみあふ處ところにてはべりしか此際このときに至いたてしか
 のさふとごめめて外とにいひかひし給たまふ女めあるゆゑなるべしとる事ことのはべらばなごてとく
 にはのたまごぬを飾かざしや情なさけなやと息巻いきまきつゝいひて餘五郎あまごが胸板むねいたをどらへ右左みぎひだりにより動うごし泣な

叫にぞ餘五郎のほどくもてあましいはれありていふにさる類のことにあらせといへし
 うらば其いはれいふに問詰られあけていこれぬ餘五郎が胸の裏の苦しき何といひま
 の百合の花さしうつふきて詞なし吾妻の餘五郎が体を見ていよく心變せしに疑なしとれ
 もふよぞますく恨み泣悲みけるがとて五條坂に歸て堂左衛門が方へゆくべき心なけれ
 ば此にて死しよしと覺悟と極餘五郎が傍にありける一腰をとりて振放し吮よつきたて
 んとしてよく見れば是竹の刀にて

拙者此度の切腹大死に相成不才様御短氣御慎遊され可被下

と奮付てあればいふかかしてみればぬき猶豫けるが餘五郎其手をどらへていよく自害とまで
 おもひ話たる誠心の黙止ぐければ口外しぐたき事なれどもうちあかして聞すなりとな
 と夫婦になられぬといふいれの原其竹刀より起るなり个様くと彼常任金石塔料の金つ
 かひ果しふるより南方千字兵衛我身にかはり罪をかづきて切腹したる事旅宿を立退て此
 所は栖をもどめしまでの始終枝葉も残らず物語鎌倉月影个谷判官の家臣ある事も此とさ
 始て語りければ吾妻のこれを聞て扱の妻り養父とれたなと君に仕ふるれん方あておんせしか

と打驚我身のうへの事もつばらに語りければ餘五郎も彼原同家中菅元溢右衛門が養女
 あて動之助と兄弟なることを始て知縁われを千里を隔ても逢易く縁なれば面を對しても見
 えのたしといふ常言もうべなりと感歎す吾妻ふたゝびいひたるの十字兵衛のとやらん
 さばかり忠義の人なるを非命に失ひし皆妾が身より起る事なればつれといれぬとのた
 まふを實理なりさりあがら今更妾が心の誓を破他に嫁すべき心なし此身をいうにすべき
 といひさして聲と放ち身をもたへつ、泣叫ければ餘五郎も其心根を不便におもひて涙さま
 ぐみいなく十字兵衛を失ひしのをなたの身より起るといひながら畢竟我放持なるゆ
 ゑなりそなたの養父の急難を救ふために身を賣しとなれを一旦孝の道も立ぬ我はそれのみ
 ひきのゐて不孝不仁の罪深し十字兵衛が此竹刀の書おきをひあしうせまじとおもふばかり
 にかくなたへて居るぞりさりながら同家中菅元氏の女と聞うへいそなたの身とあやま
 たしてのあはさら義理のねば十字兵衛が靈魂に託言し此竹刀を媒人として妻とあし朝
 鳥の刀の行方をたづね買もとして鎌倉に歸參を願ひ十字兵衛が家を立彼が靈魂を慰すべ
 なりといへを吾妻のこれを聞蘇生するこちして喜ぶ事か語りなまよとに餘五郎立上りて

佛壇に扉をひらく裏を見れば刀懸義剣信士俗名南方十字兵衛永和元年十月某日と書付る白木の位牌をすゑて香花を手向懸に祭る体あり吾妻のこれにむのひて念佛をとなへどうく涙はどいならず餘五郎の手向の水を汲替て合掌し南無幽靈頓證佛果菩提南無阿彌陀佛みご佛ととなへつ、同向に時をうつしぬ此下には物語るべきとあし〇かくて吾妻と餘五郎が妻とありわびしきくらしといひす羅綺の重衣にたへざりし昔にありて木曾の麻衣わびましく身をやつせども川竹の愛さるぬけの秋の蟬聲のしぐれを想めつ禮ひさゆひ前垂の姿を今の氷仕業心汚ぬ身ばれに鍋の數なき庭窟阿彌陀佛の誓にもすくふにたらぬ白粥の煙もやそき竹火箸流しの水の飛鳥川菜刀を研どにかくて米漸桶に底抜くあるにかひなき吹竹の飢え堪ざる節もわれと翠の帳紅の針の席を敷かへて破屏風古夜着を鴛鴦の衾とむすましく物ならぬをいふせくもおもこで日をおくりけるが昔調たる琴の音も松風の時雨どかひり鉢敲寒念佛の聲もや氷りて世の人のすさまじきものにいふなる師走の月もかよふと胸敲星佛賣の交加街上は年木積車の音さへいそがけしげにて年浪のよきまぬ氷に柳もさく寒梅の花のうほりを曆の奥に巻納てすでに此年も暮にけり明れば永和二

年の春なり餘五郎始のはとは十字兵衛が歿しおさたる金の餘にて朝夕の煙を立しぐ坐して食へば山も崩坐して飲ば海も乾の理なれば今は殘あく用盡しこれより後いかにして日とふくるべき何にされ活業をはじめせむとおもふうちある程あく彌生の比とありや夏は近々れば時の物とて夫婦どもにはんじ物の團扇の繪をうきて鏡の價を取ぬ此家のめぐりすべて島あるが時しも菜の花の盛に朝夕黄金の色は目も見れどもおのが身にと一錢のたくとへもなくやうく其日くをおくるのみなりとて十字兵衛が命日よわたる日餘五郎手づかり菜の花を折此花の色に似て金色の佛に成かしと思ひつ、これを佛壇に供す吾妻と手向の水を茶椀に汲てとこぶとて取落しけるに物にあたりて二ツに破ければいつにならぬやまらせしこの氣かゝりよ妾が汲る手向の水冥途にねいす十字兵衛の心おかなはぬもあら原我身より起て非命に死しる人あればさも理なりと涙さしくみつゝいへば餘五郎の打笑ひさばかぞのあやまらといつせんもしられず氣にくくるの愚痴ありといふにぞさもあらんりといひて再別の器に汲らばてぞ手向けるかくて餘五郎は十字兵衛の墓参すとして出去吾妻は夫のからさしおさたる團扇の繪をうくたて時刻やうのりけるに餘五郎鳥邊野より

歸りて裏に入んとせしよ家の傍の竹藪の陰より武士に仕ふる奴僕とおぼしき者出來りて窓
 の下に彷徨けれを餘五事はいふりッ、裏に入らずしてこれを窺ひ居どりしらざるや彼者と
 窓の下にて咳すれハ吾妻の繪をのきさして立窓より顔をさし出して何にのわらんたがひ
 に轟き或の點頭或の笑ひをとして彼者もいかにへり吾妻の再繪をかきてぞ居たりける餘五郎
 の此体を見て益いふかりけるがさあらぬ顔して裏に入ば吾妻の出しひかひおもひしよりの
 おん歸のはやかりしなごいひて常にかゝる事なく晝飯とくのへてまゐらすべきといひて庵
 腐に入ぬ餘五郎の手を又き物思ひ願して居けるにしばらくありて外の方に案内を乞者あり
 餘五郎立出て編戸をひらき見るに金鍔白柄の両刀を帯衣服もなみならず富たる武士の浪人
 とおぼしき打扮されハ何人にやとおもひしよ編笠とりたる顔を見れを五條坂にて見知たる
 鮎尾賀堂左衛門よぞありけるしうれども見知たるのみよて初對面さればうれともいひす何
 等の用ありておいせしぞといふ堂左衛門いはく委さといゆるやかに語るべきゆるしひへど
 いひつゝ遠慮もなく打通りて坐につき某今日和主の宅をたつねて來つるハ別事にあらず
 和主に賣べき物ありて來つるなりとて錦の袋に入たる白鞘の刀を出しこれをとくと見ゆへ

といふ餘五郎これを取しぐく扱て見るにおもひかけす十字兵衛の賣代なせし朝鳥の刀
 なりもしひが目にやと打かへしくつらく見るに其紋星の行々如く其光波の溢るゝが
 如く水に蛟竜を斷陸にハ犀革を斬べき金鉄の精おのづからあらはれて疑へらもあらぬ
 ぱうち驚き此刀のいかにしておん身の手あしやといふ堂左衛門いはく頃日刀剣を商者
 のもとより價得たり是和主の買得さればなりがたき刀ならずやいかにもさありおのれも
 どもまくおもふなり價いかにゆきやといそがしくいへハ堂左衛門すら笑て價ハ則金
 千兩なりといふにぞ餘五郎のあされて詞もなかりしがしはしありていひたるハおのれ見給
 ふ如く貧身なるに殊更千兩といふ大金をいうでかといふる事おたふべきや其價の半を
 減じ給へらハ古郷へまうしつかいして金とどのへ買とるべしそれも急にハなりがたけれ
 ばしばらく日そのべ給れかしといふ堂左衛門いらくとハ万金にかゝても此刀あくてハ
 和主古郷に歸るとなりがたうらん素千兩の内一錢にても不足してハ賣がたしもし金を
 といふる事なりがたくな其價にあたるべき物にかえて賣べきな理得と思案せられよとい
 ふ餘五郎いらくりる貧家にいりての千兩にかもべき物あらんや堂左衛門いはくいさあり

しかも活寶あり其寶といふと別の物にあらす今と和主の妻とありし富士屋の吾妻なり
 吾妻に離縁状をすめて某渡さば即坐に此刀を與ふべしといふ餘五郎の當惑してし
 答もせざりければ堂左衛門の彼刀を袋に入我わながらにこれを賣んどおもふよりあらず和
 主が歸參の便となるべき刀なれを情をもつてかくいふなり得心なくハ夫までなりいとま
 ずすといひて立出とすさき回どより庖厨の口に立て様子を聞居たる吾妻心そがしく走出
 て堂左衛門を引止めひさしくよてまみぬまゐらす喜さお今のこまいしと彼處にて廻らず聞
 りべりぬ妾夫をすゝめて其刀と買すべければ今一時待てよといふ堂左衛門頭をふりてい
 へく餘五郎が体を見るに得心せざる様子なり我しりて賣べきよあらずかくいひ出してハ片
 時もまちがたし他人に賣にしといひて又立上るを吾妻いあや引とやめ何事も皆妾が胸
 よあるぞかし是を見給へとて二枚の團扇を取てさまいげせば堂左衛門取あげ見て此團扇の
 繪は童もよく知たるはんじ物なり別又意ありや吾妻いへく今一時まち給はくおん身斧
 琴菊べし若又夫得心せざる時ハ鎌倉と云妾が心のんじ物合点ゆさふかき目くばししッ
 ハ心わりげよいへば堂左衛門其意を悟れる様子にて打黙頭しからば一時ハ猶豫すべし我此

村末の酒店ハ待荷昏の比を限りに來べければそれまで黒白をせのちやくべしと詞をつぐ
 へて飯けり此時傍の竹藪の裏より以前の奴僕顔を出し此方の様子を窺居る吾妻と餘五郎
 が側にゐん身ものをもいで何を思案し玉ほぞやとく離別の證書を書て妾にいとま
 とびねといふ餘五郎いへく汝しかいふハ彼刀と買しめて我を鎌倉に飯參さすべさ心あるべ
 けれといかほぞ彼刀がほしとて一日妻せし汝を入手に渡して我武十道の立べたや殊更
 同家中齋元氏の娘あれハ我とどひ鎌倉ハ歸參するとも誰右衛門のに對しかうくど何
 の顔わりて語らるべきやさりとて刀買もせざれば十字兵衛が家たすそのもゑに我ハ
 唯前程より胸を割るハばかりに苦くおもふなりといふ吾妻いへくいなハ刀ハ買とも買
 ぬともそのわん身の心にまかせ玉へ妾ハ夫に管す實ハ堂左衛門主にそひたく思ふ故なりと
 いふにぞ餘五郎ハ唯惘然て吾妻が顔をうちまもり居けるが忽面色變りまくり手していハ
 く最前よりの様子いふかしく思ひつるにさてハ汝が心の變しよな吾妻いへくのたまふまで
 もいへずいかに心變しなりそのゆゑハよく察しても見玉へかし我身五條坂にありしと
 さの綾錦を身にまとい口にハ美食に飽たる身がぬん身にそひしより貧さくらしをちし去年

の冬もとき衣の單めて寒夜を過し馴ぬ手鍋の水仕業春も越路に歸らざる此わかかりをよく見玉へ辛苦にはとる我委苦井にのぞむ水鏡も昔の影のなきぞかし彼につけ是とおもふよか
 くだのみかひなきおん身を慕河不足なき堂左衛門主を嫌しハ妾が一生の誤り今後悔するゆ
 るにいとまをとり彼人に連添て借老の未までもたのしみを我身にせんとおもふなりとくと
 く離別の證書とりさてよとて硯と紙をつき出せば餘五郎と怒の皆ひきあげツ、汝これまで
 の實心に打て變し其詞五條坂にて誓し言も反古にする心にや返答せよといらだてば吾妻は
 打笑ツ、遊女の詞にいづり多く薄情なるハ常のならひなりいつまでも實ありとおぼし給
 ふは愚なり我を恨むは理ならおん身の愚よりとあきらめて去状をとく書てよといとよ
 くさげにいひけれを餘五郎ハ大に怒り聞ハ聞はど畜生にもおどろし女今ハ見るも穢しど
 て前程彼が取落して破たる茶碗を取あげこれはを見よもどハ全さ此茶碗も一旦破れば繼と
 あざのす手向の水と覆せしも夫婦離別の前表にて覆水再器にもどらむ曆手の此茶碗の破し
 片ハ三行半是が則去状がなり是持て何方へなりと出去と吾妻が顔に投つたり最前より始
 終の様子を窺居たる彼僕此時舌を吐微笑してなほ竹敷あくれ入ぬ折まも撞出す晩の鐘胸

にこれゆる黄昏時約せし時刻と堂左衛門戸なし駕籠を雇て來ければ吾妻のいとうれしげに
 出むかひ餘五郎どのも得心よて妾にいとまたびなれとくく運てといとががする餘五郎ハ
 堂左衛門ハ打對ハ心の腐し不貞の女縁を断てつうのすなれば約束の如く刀を渡せと氣をせ
 けと堂左衛門ハおちつ死てしからば離縁状と此刀を左右取ゆべしといふよぞ餘五郎ハ
 いそがしく行灯に火をともし去状をのけて渡しければ堂左衛門も餘五郎に刀を渡しこれ
 でさらりと時あさねやハ餘五郎云までもなければ共是から吾妻に指さす事もならざるぞ此方
 の女房いハ給へといひて吾妻ハ手をとれば餘五郎ハ拳をにぎり齒噛して怒の涙はらくと
 落れを吾妻ハ願て打笑未練な男と嘲つ、懐紙と投つけて戸なし駕籠に乗うつさば堂左衛
 門立寄て駕籠の垂を撲地おろしいをげくど下知をなし駕籠を飛えて走り去ぬ餘五郎ハな
 げ怒に堪ざりしが嗚呼よくく思ひめぐらせば不貞の女を追出しハからず此刀の手に入し
 ハかへりて我運強さ處なるべしとひとひさして手をかけたるを早足を飛して蹴倒せば起上りて一腰を抜放し
 をせり出其刃とさといひさして手をかけたるを早足を飛して蹴倒せば起上りて一腰を抜放し
 眞額ニツと斬つけたり餘五郎ハ彼刀の鞘ながら丁とうけとめ又斬つくるを打拂ふ拍子ハ鞘

の飛散て抜射の鋭尖彼僕が鼻頭に閃々ければ敵しがなく思ひけん早足を出して逃去ぬ餘五
 郎の持たる振射を一眼見てこのいかにと驚きッ、灯火にさしつけてよく見れば先
 刻見たる朝鳥の刀にあらぬ偽物なれば尻居に倒て只惘然たるばかりなりしべしありて吐息
 をなしたての我を誑んと偽物を去しらへ眞の刀とすりのねて渡せし我今怒に迫てあら
 ためざりし不念なりこれとおもへば吾妻心の變し一朝一夕の事にのわらせ今まで眞心
 とおもひせしも我を感す計束ならん先刻今の奴僕ノ意越に聶まも堂左衛門夕内通をい
 せしに疑なししかる時はいまた枕はりのさきども其心の姦通なりはじめの娘し堂左衛門と
 心を合せ我を誑の偽の刀を與へる人畜の淫婦いで追去て堂左衛門もろともに四段とあま
 せめて此憤をいらすべしと裾端折てかけ出しがいなく我韋駄天の足ありともよやど時
 刻のびたるうへに行たる左角もしれされば追去べきあてもあしおもひまのせをまのすはど
 彼が如き人畜の女としらす遊女のならひの虚言を誠と思ひ不實の締にありし皆是我誤
 なり何面目よながらふべき穢しき此刀と偽の刀を投捨て佛壇の下戸棚わけて取出す一腰
 を抜放し腹かき出してやどく突たてんとせしが是乃十字兵衛が遺物の竹の刀されば我

ながら狼狽しと心つきてこれを見れば
 拙者此度の切腹犬死に相成不や機御短氣御慎遊され可被下候
 と書付あれバ氣の張弓も弦されてダつくりと嗚呼十字兵衛の忠義の魂を籠おさたる此竹刀
 死したる後の後々でも不言しておのづから我を諫め此書置たとひいかやせしのびがさ事
 わりとも我命をまつたうせざれば此書置に對し顔なまとおもひあやまて竹刀を押戴自
 殺をどいまり十字兵衛が位牌おひひ合掌して我誤を託おけりかゝる時まも二ツの蝶て
 ふ窓より裏に飛入て灯火を去たひ燈籠のめぐりを飛しが二ツの蝶もろともに油皿におち入
 ぬ餘五郎これを見ていひく爾雅翼を閱に菜の花蝶に化すといへり蝶又菜種の油火をしたひ
 遂にれの夕身を焦すに至る是いひゆる爾に出者の爾に反る理なり是を姦夫堂左衛門淫婦
 吾妻に比する時爾我を誑我又爾を誑べしめぐる因果の丸行燈豈其報なからんや彼我
 よ偽の刀を與へたされば我又偽の狂人となりて彼等が行方をたづね眞の刀を取もとして我
 本意を遂べしとひとりおちて十字兵衛が位牌と竹刀を懷にかくし入みづがら髪をかきい
 き手向し菜種の花を把うちかたげて狂ひ出れ眞晝の如き夕月夜に里の童がまれを見つけ

背後につま氣ちがひし泡齋よといひのやす餘五郎の扇をひらきて蝶の如くにひらめかし
これを見よ童等蝶の菜種の花を狂ふ吾妻の我を狂ひする踊人が見たくの北嵯峨へ去て見
よ北嵯峨の踊り花笠をしやんと着て踊る振がおもしろきとうつゝなきこと云て菜島を踏ち
らしつゝ狂ひ去ぬ

⊕白露や無分別なる性命の質物

爰に又浴外北岩倉に幻竹右衛門といふ武士の浪人ありけりさぶまれる活業のあしといへ
ども何不足なき住居の様子見越の松も世にすねた丸木造の門構庭の植籠亭坐敷苔を賞美の
手水鉢水草のしげる池水も清か濁りよと目にのしれぬ主の心なり比の卯月のをへりなるが
此家又仕ふる兩個の奴僕石燈籠は火を燃し手水鉢の水汲りぬちとして一ツ所又集寄一箇の
僕いひなるの其方いかに思ふて世にめぐらまさい此池の四季咲の燕子花毎月上十五日の
其花枯凋下十五日のあれあの如く花咲て勢よしそれにひさかへお旦那上十五日紫燕の
花の凋時日常の如く健においすなれと下十五日紫燕の花咲時疔瘡の病をわづらひ玉ひて
外出をならす病床に籠居玉ふこれも又稀有な病よあらずやといへば此方の奴僕が云くいや

それ方も猶もつらしさといふの我等か傍輩彼新参の露助が事彼の近頃まで妻もろとも此村
すゑに住しつゝ啞もてものいねばかゝしき活業もなく貧さくらしをして居たるが
何よりあらん急に金の入事ありて其金なくての命もかゝる事と夫婦が歎くをね旦那の
聞つけ玉ひ露助の首と五十兩の質物に取玉ひさぶめの月がされとをたどひ首とさらふども
お旦那の心まかせになさるべき約束ありよし其さめめの月も今月が限にて今日の則晦日
なれば月がされたらぬにあらんと女房がそれを苦にして昨日お旦那へ日延の願に來たり
しがいかさ我々の置質物どちがひいかにしても流す事のならざる質物人の首と質に取と
の世にめぐらしき事ならずやと口囁ひなべて奴僕の辨なるべしお折しも障子の裏よ
嗽の音たてつゝ主人の聲していひけるのあな叫話さ奴僕ども夜に入まで何口たゝきてひ
まゐるゝぞとくゝ下家へ退けといふも彼方の障子とまかりそめに呵るにも烈言の主人
の氣質奴僕ども打驚いらへの聲も口の裏下家の方へ退ぬかくて時刻もやゝうつり亥の
刻の土圭ひいけを亭座敷の明障子を左右に開き此家の主人竹右衛門瘦衰たる姿よて左結
の鉢巻の病よ悩む籠居よ呉郡の綾の袷夏の風すら厭にや後を圍金屏も四邊耀一間の

裏錦うらにしきのこ夜着よせを打懸うちかけて病床びやうとこながら机つくえに向むかひ歌書うたがきくりかへす傍かたわらよかしてまりたる奴僕しもべの露助頭つゆすけがしらに燃もす蠟燭ろうそくの流ながるゝ熱あつき窮屈きゆうくつさ宵燭よせろう涙なみだの泣顔なみだを皺しぼめてこらへ居ゐたりけり竹右衛門書たけえもんがきを讀よみさして露助つゆすけが面おもてを見みやりいのみ露助つゆすけ苦くるさか堪たがたさかすこしにても身動みぶするど蠟燭ろうそくの倒たるゝぞといへへ露助つゆすけうらめしげにて物ものいひたさる瘡かさの悲かなさ指ゆびを以もつて掌てのひらにたとひ晝夜睡ちゆうやねいずども仕つかへまゐらす心こゝろ延ひなれど拙者せつしやが頭かぶを燭ろう臺たいにし給たまふいあまりとや情なさけあしと書かて口くちに指ゆびさし仕方しかたすれバ竹右衛門たけえもんのこれこれを讀よみて白眼びやくがんつけ情なさけなしとい何なに謔げ言ご証書しやうしよの文ぶん言ごを洩ありやく忘わすしかといひひの傍かたわらの手箱てはこと探さがて一通いつうを取とり出し今更いまさらにあらためて讀聞よみきすにハおよべねども忘わすしならバ再また開ひらてて之これを讀よみ其その文ぶん左ひだりの如ごとし

質物証文之事

一拙者之 活首一箇

右貴殿方へ質人仕金五十兩借用す所明白也尤五箇月を限受戻可なり若定の月されは拙者之首御取被成いども違背や間敷い仍て証書如件

北岩倉村

借人 露助

相文 妻 關兒

永和元年十一月某日

幻竹右衛門殿

竹右衛門これと讀よみといりていはく此通このとほりの文ぶん言ごなれば受戻うけかへさぬうち汝なんぢか首くびハ我物わがものあり殊ことよ此月このつきが其そのさだめの五月いつのひのけ目め今日けふハ乃晦日なつぐひにて今一時過子いまひととせをこの刻ときに至いたればハや明日あしたの分ぶんなれば質しちの流ながれる灯とう臺たいにするハおろり我心わがこゝろまかせたどひ首くびを斬きとも違背いひなるまじ我心わがこゝろにそむのハゆるさじと呵しつゝ、再また机つくえに打向うちむかひ餘念よねんなく書しよに見みとれて居ゐたる折せりしも一陣いちぜんの風かぜ颯さつとあろし來きて庭木ていぎの梢こゝろ々々飄う々々と吹ふならし池いけに盛もの紫燕むらさきつばねの花はなゆらくと動うごとひとしく花はなの裏うらより一いち道の陰火いんくわ閃ひらくと燃もえて此方こなたへ飛來とびきたしが忽たちまち一羽ひとつばの子規こきと化けて机つくえ上に羣振ぐんしんし二聲ふたごゑ三聲さんごゑものかきしげに鳴なげり竹右衛門たけえもんいとがしく露助つゆすけに對むかひたと何なにが出でやうともかあらす此方こなたをふりむくを見るなくといふ間にすむくり背後うしろの方かたは縁みづのの髪かみとふり乱みだり色青いろあざさめたる女の

幽靈男婦とあらわれ出竹右衛門を外背にかたてさもちらめしげある顔色なりさしも強氣の竹右衛門 忽わなく瘡病胸をおさへて苦しむ体露助のあな怪しやと思ひつ、彼方を見んとふりむらば竹右衛門いひたる、又此方をむくか汝が首の我物をれ、汝が自由に動かす事ありむらさぞむくな見るかと前程より制すを汝に聞ぬると聞られて向もむかれぬつくりつけ猪首になりて坐し居たり、初竹右衛門の幽靈に打ひのひ懐望を滅して成佛せよとす、むるよまど迷て出をるの立去退とよ、ハ、リッ、刀を抜て斬拂へ、幽靈の消失て時鳥の明障子に飛つ、口より血を吐出して障子の紙にれど、こひしといふ假字を習つけ、り露助のしひかね我を忘れてふりむく拍子よ頭の蠟燭撲地れち時鳥の、又再一團の陰火となりて飛去ぬ、此時土圭のひくを聞はず、是子刻也、竹右衛門の落たる蠟燭のいまだ消ざるを取手燭に立て机にすゑ、露助が襟首つかみて膝もと近く引よせて聲わらへげやをれ惡き奴か、五十兩の金なくて、一命に管るといふ危急を救ひつ、うしたる思を忘れ、證書の文官にさへたがいて我詞を背く横道者と習つ、病よ屈せぬ強氣の主人、手速川意の繩を把て露助を高手小手にく、し上椽より下へ蹴落しければ、露助の外背むさわけ怒れる体いこねを顔にあらは

れたり竹右衛門のなほ白眼つけ質物に繩をかくる、世間のならひと知ざるや、今すでに子の刻の土圭ひくけ、汝が首の質物はとや流れぬ我、曾試見んどももふ新射の刀あり幸ひ汝が首を打放して刀の斬味を試べしや、奴僕等土壇をつくとよ、ハ、れをハツと答て、奴僕等土俵を打出て露助の前に積、重椽さきに燭臺と立ならべて下家とさして入あどは晦日も月を耀けり、此時外の方ひそやかにしのび足よて旅乗物を昇来り、門外にけゑ置て、従者は残らず歸りけり、是何人歟、しれがたしさて竹右衛門の白鞘の刀を携へ、庭下駄とさしてしづくと庭にとり立、露助が側近く寄此刀を試に、究竟なる汝が骨組よしくと、打點頭、手水鉢の水を柄杓に汲とりて刀に灑を露助のわるびたる、さし見せず座をしめ直して覺悟の体刀のいかなる斬物か、知ねども病やうげなる手の裏で我骨されるの、おぼつかあしと口よいはねを、目顔にてそれと悟らす、嘲笑ひ惡さにもくしと、竹右衛門すでに刀に手をかくるやとく、危き折しもあれやよし、ばしまちてよと云つ、跳こむ露助、妻の於鬘鏡を袖にかくし、夫をかこひて、竹右衛門に打むかひ、昨日も参りてきこぬ上妻、身を賣て金をと、のふるまで、今し、バ、し、日、を、延て、給、い、れ、と、願、ひ、い、べ、れ、と、聞、入、な、さ、い、始、よ、り、試、物、に、し、給、い、ん、ど、の、お、ん、心、に、て、あ、り、け、る、か、さ、あ、ら

ばそれと始よりなぞ得心いさせ玉ぬるるりながら活首を質入の証書を山せしうへい今更
 悔てかへらぬこと是非試ねばあらぬとならば妾が身を斬刻夫の命とたすけてよ慈悲と情
 ぞこれまうしと掌を合せてうちなげよ竹右衛門と聞入妻女のためしの用にたぬ幼すな
 退て居よと鞘にてこあらへ突退て又露助に立むかへばぬないかにのたまふとも夫の妾と殺
 させぬと右にとりつさ左にすがり蹴ても踏てもありすまに夫をかこふ袖屏風立つ屈つ青柳
 の風にもまるゝ乱髪よその見る目も不便なり露助のこれを見てかゝる慈悲なき竹右衛門い
 めにとり聞入まじ益なき詞をつひやすなといふを目顔で悟らす瘡とくく斬じこれも目顔
 で覺悟の体こゝろぬつとて竹右衛門又立かゝるを於關のなるも隔つた拍子に竹右衛門の左
 りの手頭を見て驚さやア此小指がさかれてあるといふを聞て露助の何小指がさかれてあるかと
 我を忘れてものをいへば竹右衛門のこれを聞ては汝のいつりの瘡ありしか我を誰大
 膽者観念せよと刀を抜首落さんと斬つくる露助のやく身をかひし一聲さけびて力をさめ
 いましめの廻ふつと断士俵を把て受とめけるが刀のさされるの土俵を斜め切おとし土は地上
 に散乱す時ふ不思議や許多の蛙聲ふりたて、鳴けり竹右衛門のいそがしく刀をおさめ



てふめらへハ露助と願て竹右衛門何ゆゑに猶豫するとくく斬とるり髪からわけ身をすり
よすどバ竹右衛門と刀を抽よかしのくししばし頭をうたふけて

斬たくもあり斬たくもあし

といふ誹諧の句をつくりて吟せれば思ひもよらむ表にすゑたる乗物の裏に聲ありて

盗人を捕へて見れば我子なり

と聲たりやかに吟ずれば竹右衛門は眉を蹙儀といふ字と二ツに斬バ表に人といふ文字今
表に入ありて我句に附句の當意即妙何人にやゆりしよといふかしみつゝいひければ猶乗
物に聲ありて不審のうへありそれへ通て對面をせしといひつゝ乗物の戸をさどひらきて立
出しの五十歳計の老女にて女なれども両刀を帯し武家の行儀にや摺笥の拾の衣に唐錦の
帯いや正く首桶を小脇に抱てまづくと打通れを竹右衛門の一眼見るより大に驚さふは母
人まゝいすやおもひかけざるれん入来いりあして我栖を知し召ひやと猶いふかり席を拂て
上坐に通らばれば老女は怒の聲ふるゝま我を母といひるゝすら穢しよと他の事いひぬ
ささよりはらくと怒の涙どおどしけり露助のせさよせさたる面色にて妻於關に毗眼すれ

をこゝろなめてかくし持たる藁苞の裏より両刀を取出し一腰バ夫に渡し一腰ハおのれ小脇よ
かいこみて夫婦もるとも竹右衛門が右左ふ立ならびそり打かけて且露助いひけるハ夫土の
金鉄の精を育すゆゑよ名劍土中に入バ其精天よ徹といへり傳聞蛙鳴丸といふ名劍鉄精を育
する土を斬ときい迫りて蛙の聲を發するよし汝今土儀を斬し刀こそ蛙鳴丸に疑あし其刀を
所持する汝ハ去年五月下旬鎌倉月影个谷の下館の後門にて都といふ白拍子を手にかけ逃
れ去し曲者に疑あし其時我其所に行かゝり前なる流をせさどめたる土儀をとり汝刀を受
どめしに今の如く土を斬忽蛙の聲を發するてハ傳聞蛙鳴丸あるべしと推量せまが其夜
の櫓子の汝が心におぼぬわらんといへバ於關も其尾につきていひけるハしののきあらず都
が死骸をあらため見れを口の裏よ小指を合今汝が左りの手頭を見るに小指なし彼といひ是
といひ都を害せし汝ある事明白なり露助又いひけるハかくいふ我ハ都が爲に弟なり前様
の怪しみもまさしく姉の亡靈にて時鳥血を吐明障子よおとゝこひしと書たるも姉の怨魂冥
途の鳥となり汝を打まめんと我を此あ導るるに疑なし蛙鳴丸を所持する者こそ姉の敵な
きとおもひ其時螢の光にてはののに見たる汝が面体もしやそれのどれもいしゆゑいつり

て瘧とあり五十兩の金の入用ありといひて試つるに我活首を質物にとらんといふもいふ
しけれバ其詞にしむがひて金を借し此家に入こみてなほ實否をたせしうへ汝が首を此
方へ受取姉の仇を報ん爲かり素入用なき金なれば封の儘此にあり此金を戻すうへは露を
かりも思となしといひつ、懐より金の包を取出して竹右衛門が前におき日來尋し姉の敵
如此明白なればいざ立合て勝負を決せよといひつ、刀の目釘をしめし於關もろとも詰寄
たり時に彼老女夫婦に向ひやよしばしまていふことありさては其方さちの都が所縁の者な
るの勝負を急いうべなれど此方にも別あ又兪義すべき事われればしりの問ひかへて居よと
といめ置懐中より印籠を取出して竹右衛門が目前に出し汝此品におはへあらん去年都の殺
れ一同日夜下館の軍用金千兩を奪取し其盜賊一重の扉を切破て出る様子我其所へ行
り拾ひ取たる此印籠沃地に遠山の詩給しるるとかねて汝が所持の品しかのみならず人を
して購しめしに汝千兩よて五條坂の遊君を身受せしと云ふ噂彼といひ是といひ彼金の盜賊
は汝なる事明白なりそを都に見どがぬられて手にうけたるに疑なし我君よりかの金の盜
賊なりびに都を害せし者を兪義せよと夫庄司とのに命せられる其役めを妾に申しのぬ夫

にかいりて鎌倉を旅立汝が行方を探求めやう、此栖に今日尋常りしも人手にかけ此母
が手づから汝が首を打て父御の耻をすゝがバやとるれゆるに此首桶現在うみの此母が此役
めをわざと望て我子の首を打たために鎌倉よりとるゝと尋て來つる心の裏せのやうにわ
らふとおもふを斬たくもあり斬たくもなしといふ難句に附たる我一句盜人を捕へて見れば
我子なりと思より自然と出たる十七文字此母の盜せよとと産つけぬぞ渴しても盜泉の水
を飲す熱はれども悪木の陰に息すといふ激戒を知ぬ汝にあらざれどもかならず天魔の見入
しならんあな悪や不忠者不孝な奴と誓て老の手弱腕にて襟首とりて捨倒を扇を把て打擲
しつゝ怒の涙海泣身をもだへてぞ倒れける露助のなほ詰寄て姉都を役せしひいかなる恨
ありてかど解せざりしに老母の今の物語を聞て合點ゆきぬ積りさねたる罪科も此方の恨
姉の仇いざ立むのへいざと夫婦もろともへげし言老女のふたゝび聲かけてやよ待し
ばし彼が口より盜賊きりと白狀を聞たるうへて其方等に仇打の勝負をばさすべきが首ハ
妾が受とらねを主人よりさめりたる此首桶のおさまりつかす此方の役めいすまぬいざ子
兒白狀せよといふと詞の責具竹右衛門の最前より唯手を又さ頭を低不言して居たりし

がやうくと顔をわけ母人さまお聞われ夫婦の者も我いふことと心をしづめてよく聞と坐
 をあらため威儀を繕ひひける。我本心をあかさきて夫婦の者や打れやと思ひしが母
 人のおん疑をとらす爲餘儀なく實を語なり若殿玉兔君白拍子都が艶色に迷ひ玉ひて放佚無
 慚のおん行跡親人を始館中の老臣かはるゝ詞を尽し理をさめめて諫言を奉れどえん聞
 入なく悪行益つものり玉ひた家の滅亡あやうしと諸臣みな薄氷を履如くおもひるゝよしう
 けたまへり我浪人の身を幸とし西施を呉湖に沈楊貴妃を馬嵬に殺せし例にあらひ主君放
 埒の病根と絶べしとおもひつき罪なき者を手にかくるゝ情なく殺にしのびずといへどもね
 家の滅亡大勢の歎にいかへられずと心を決し去年の五月鎌倉あくだり下館のめぐりを徘徊
 せし折うら續く五月雨もしばし晴間に棟の陰身をひそめて居たる所に黒装束のしのびの者
 館の扉を切破て出しゆる曲者までと呼とめしに小柄の小刀手裏剣に打つて跡をくらませ
 逝去ぬ程なくかの都乗物にて出来しゆる従者を追散し都々對て不言す心の裏におもひける
 の後日に汝が所縁をたづね此身を打れて修羅の苦患と救べしと誓ひをあしてどいめの刀を
 つらぬさしが彼苦痛に堪ざりしや我小指を食切ぬ時しも燕子花の盛よて都の血は流にま

たゝり燕子花のゆかりの色を紅に染かへしが都が怨魂燕子花にどいまりしにや彼花の裏よ
 り一團の陰花燃出都が胸もとより一羽の時鳥飛出てもものあしげに鳴去ぬ其時行ちぐひた
 る旅人の我推量またぐらす露助汝にてありけるか我都を手にかたり後此庭の四季咲の燕子
 花毎月上十五日の花枯凋下十五日の花咲て我又上十五日の常の如くなれども下十五日の瘧
 病をわづらひ夜なく都が亡靈來りて我を惱ゆを寐食ともにならきて如此瘦衰活
 なから餓鬼道の苦をうくるなり彼罪あくして刃にかゝり死したればうがまぬもうべと思ひ
 一日もいやく彼が所縁の者に打れて恨をはらさせ成佛とさせばやど所縁の者を尋るうち露
 助の面体都がおもさしに似るゆるもしや都が血すぢの者かど心を付しよ金なくてば命に
 うゝける事ありとて夫婦の歎といふ事を聞かよびそをに就て實否を探り試みやとかもひつ
 き活首を買入せし金をくりしつゝのいさんとわざと難題をいひかたりしよ速みしかすべしといひ
 しゆるさてこそ一物ありと知無分別なる置所露といふ字の露助が露の命の買物は我と風雅
 のためし物わざと情なくあしらいて燈臺となし辱めて側近くつゝへしも怒を起させ其實と
 探んさめなり又新躬の刀と偽りて蛙鳴丸の奇特を見せしも汝よ我を疑いせ汝が素姓をしら

んためあせしよとなり今日時いきりて恨をといめし燕子花の所縁の色いさの汝等なんぢらが索性そんせうを知り
 正是まさかこれなり都がみらびく所ところならん昔輕むかしかるの大臣遣唐使だいじんせんたうしに渡りしに支那しなの人不言ひことば薬を飲しめて瘧おとし
 となし身を彩畫さいが頭かぶ燈臺とうだいを戴しめて火を燃しこれと名て燈臺鬼とうだいおにといふ其子彌宰相やいしやう支那しなに往
 て父を尋ぬといへとも姿變すがたのりたれば面を並て知さりけり燈臺鬼とうだいおに涙を流しッ、指頭ゆびすきを食切血
 を出して詩を書これによりて其父なる事を知れりといふ汝瘧なんぢとなりて我をわざひく我汝を
 燈臺とうだいとなす時鳥血ときまづちを吐おどこひしといふ文字もんじを書て姉の靈れいあることをしらしむ都是輕すくの
 大臣だいじん燈臺鬼とうだいおにの昔語むかしがたりよく似たり爾なんさむかり身を苦めて姉あねの敵かたきを打んとおもふ下郎げらうに似
 ざる佛心ていしん義心ぎしん感かん感かんせるにあまりあり母御ははみのうくいしき謂いとくくの通り其夜母人そのよていびと又ゆきひし
 どの露つゆしらす我幼年わがせうねんの時より持てかん見しりある此印籠このいんろう其所そのところに落ありしゆゑに軍用金ぐんようきんを奪
 ひしも拙者せつしやか業わざならんとかん疑うたがひと無理むりあらず拙者せつしやが詞ことば露つゆ計けいも虚言いつはりあらぬ証據しやうことまうす
 此小柄このこがたの小刀こがたにひとてさし出しぬ

⑤紫の蛛もありけり池邊の盗人

當時老母小柄そのときまはらばこがたの小刀こがたをうけとりつらく見ていひけるは是これはこれ放駒はなはなの色繪いろえの彫物細工はらものこまかの

妙まほうよのつねならず其盜賊そのぬすびとが此小刀このこがたを手裏劍しゆりけんに打しどなさいふ事こともあるまじきよりあらざれ
 せもさは忠義ちゆぎをいもふ者ものか千両せんりやうといふ大金たいきんを出し五條坂ごじょうざかの阿曾比あそひ吾妻ごめいとやらんを受出せ
 ししいりあるもゑぞ奪さらはれし軍用金ぐんようきんの千両せんりやうと阿曾比あそひを身請みまがひの千両せんりやうも符合ふあひするも疑うたがひあり汝
 浪人らうじんの身を以て千両せんりやうといふ大金たいきんをいりにして貯たくわえど又汝また十六年じゅうろくねん以前いぜん剃髮ていぱつの望のぞみのよし書置かきおきを
 殘のこて出奔しゆつぱんしたる身みをもちて今いまに剃髮ていぱつもせず活業かつぎもなき浪入らうじんに似合にあすならくならぬ家宅かたくの
 結構けつこう衣服調度いふくぢやうどに美麗びれいを盡つくすこれ以ていふくししこれをも返答へんたうありやといへば其御不審そのおふしんの實じつ
 うべなり遊君あそびくん吾妻ごめいを身受みまがひせまに謂いわり元來拙者くわんたいせつしやが初はつ一念ねんをついで語かたりて聞きせはべらんぬ
 のれ十六年じゅうろくねん以前いぜん出奔しゆつぱんしつる意趣いしゆとやすいかねて母人ははひとれかん詞ことばに我原驥女われはらきよめの時汝ときを産うたれば
 汝なんぢの總領そうりやうかれども妾腹てかけらなり餘五郎よごろうの弟あになれども本妻ほんさいの産玉うぶたまひし子こなり我われと本妻ほんさいの遺言ゆいげんよ
 りて後妻ごさいとなる其思そのおも甚た深かし必かならず餘五郎よごろうを鹿略しかりやくにするとかかれとのたまひし事もわり原父もとちち
 うへと翁子おきなにて餘五郎よごろうが實母じつははは山咲やまざきの家いへの娘むすめなれば實じつに家の血ちひぢといふは餘五郎よごろうなりこ
 れよりてれのれ父ちちうへにまうし家督かとくと餘五郎よごろうに讓玉ゆづりたまひ拙者せつしやの別家べつがさせ玉たまはれと願ねがひたれ
 ども總領そうりやうをぬき次男じなんに家を續つすべし理ことわりやあるこれ順義じゆんぎよあらせどのたまひうけひき玉たまの

ざりしゆゑやむことを得ず出奔せし餘五郎に家督をとらせたりゆゑにひしるまめは如く拙者幼年より歌學を好みゆゑ家を出て後なほ螢雪の功と積て古今傳授を相續て歌學を教て世を過す手着とし貴人當家も弟子多それゆゑよろづに不足なししかるに餘五郎五條坂の吾妻といふ阿曾比に相馴てつひに行方しれをありつるよし然則我存念も水の泡家を續べさ子なくての出奔したる我までもかへりて不孝にある道理なれば且餘五郎行方を尋ばやと五條坂に到て聞し其在所を知者ありておしへし吾妻の餘五郎を尋てあるじの長の意に背き雪責よせられて命もあやうしと聞しゆ若吾妻餘五郎が爲にあらぬ死をあしてハ餘五郎が罪を増道理と存じおのれあやしけある姿に打扮て富士屋の後園にしのび入身代千両を殘まおき吾妻を奪出し餘五郎か栖の門外に捨置て歸り翌日又五條坂に到彼長に對面し吾妻が年季の証書を取戻しぬ表向より彼を身受いたしてハ餘五郎が放埒な不世に廣く聞ゆ歸參の妨になるべしとそれをいとひてしかとからひひなり其身代千両も或富家に古今傳授をいたしつういしる謝物の金あり彼を身受の証書にも拙者が本名をあらわして餘五郎が名をうくしゆゆ今五條坂の小歌にも吾妻うけだす山咲餘字兵衛とうさうと聞唯此うへハ

餘五郎に一功を立てさせて歸參をさせ父うへのおん心をやすむるが願にてハハ母人さま此儀をねがひ奉ると心底をくひしく物語ければ母の感涙れしとゆつ今疑はれしぞや義理ある子の餘五郎に家を續せさくおもふの我も又うねての願ひはすまて母子ともよ心の合しも不思議ありと心どけたる物語と聞て驚く露助がはるか下りて手をつかへさていおなたと餘五郎さまのねん兄君にてはかといへハ竹右衛門うち點頭いかにもさわり幻竹右衛門といふは後の變名實の名と山咲餘字兵衛これにはすて我實母泥瀬とのとすすあり長物語りに時刻うつりぬいざ夫婦もろとも我を打て都に手向よとくく打と覺悟の体露助と頭を低今のおん物語をうけたまこれハ姉都を手に懸給ひしは原忠義もゑになされし事にいへは恨むべき理あり殊更主人に刃向劍のあるべきやといへハ餘字兵衛いふかしみ何といふ我をさして今更に主人といふは何もあらず汝かりに我奴僕となりつれどもそれハ原仇を報ん爲の計畧なれば我の主人に似て主人あわらず露助いなく其御不審の理なり拙者去秋姉の敵を尋るため鎌倉お下りおん父山咲庄司さまの僕となり名を路平とやせしが鎌倉にて其敵しきさればおんいとまを乞受うへ見ればおよハぬ事のおほければ雨といふ字の笠を着て

露助と名をわらため此村末にうつり住ぬ去年十月とれなる御母君の命により餘五郎君の御安否を聞ため京都へ飛脚に參しも侍女衆の取次にて拙者の新參といひ奴僕の身きればおん母君のおん顔を見奉りし事もなく拙者が面いなや更におん見知あるべからず穢の間にいへどもれん父君お仕へたる拙者おれバ餘字兵衛さまも 則 御主人しらぬ事とて最前よりの無禮の儀をひとへに死し給われ身と轉てぬりづけを餘字兵衛の打驚さていしかありけるか父に仕へま者おれば我と打ともいひがたしさりながら所縁の者に打るべしと都に怒し言を透ぬい彼恨といらすまじいかふすべきと思案の体於關は悚々すみ出唯今の其小柄妾に一目見せてよといひつゝこれを乞取つらゝ見さだめいと驚たるおもゝちにてこの是放駒の色繪の彫物裏に二見の二字を鐫是の妾が目おねわぬる物にて兄鯨松が所持の小柄に疑なしさてい彼千兩の 賊と妾が兄にていべりしかといひて虹のやうなる息をつき面目なげにうちむらば露助もうち驚き何といふ其小柄の兄の所持の物とやとく其跡を物がたれとみそがすれば於關いひく今まで運とふおん身にも妾が素性を詔らされば知たまひと妾が父の伊勢國の樂人にて二見太夫是次といひし者母と於破矢とまうせしが母十五歳の時男子

と産幼名を鯨松といふ其後連て女子二人を産其一人の妾よて今一人の 則 妾が妹幼名を小蝶といふ二人どもに幼時別かれゝに他家へ去兄のの家にありしが兄の身持あしく勘當をうけて行方しれず其後父の亡人の數お入母の妹の小蝶を連子にして鎌倉小助の駕籠の塵兵衛といふ人に再縁をしたるよし七年以前其塵兵衛といふ人旅人忘れし金をわづかりおきたるに其夜盜人よ其金と奪れて分説おく其急難を救ために妹小蝶は手越の里お身を賣後五條坂へ賣りぬられいよし彼富士屋の吾妻といふ人 則 妹の小蝶なり去年おん身鎌倉に奉公の留主の間朝夕の着手にまより歌占をありいひとし五條坂にゆきていからず妹吾妻よあひ委事を聞いべりぬ兄の行方は今にしれざれども此小柄の父の秘藏せし物にて父存生の時兄よ讓しと聞ば兄ならで持べき物にあらず故に彼盜賊は兄にさはまりいと語りければ露助とこれを聞今あらためて汝よいとまをつかおす夫婦の縁とこそまでなり其ゆると賊人の妹を妻に持てい盜泉の承をともし飲白波の立田の山に共に入ておなじのさしの名を汚をいつれをなり 必我を恨なといへば於關涙を流しかのたまふの無理ならず悪人を兄よ持しが我身のめしき宿世なればぬかでおん身を恨べきといひ終て一腰を抜放ちはどく自害と

見へにけり前程より門外に彷徨て櫛子を窺一箇の武士やよはやまるなしはしまてと聲かけ
て走り入於關が自害の手をとりむ於關のいふかり此人の頭をつら〜見てはのかよ見れ不
ぬある顔なりといへばうち點頭さぞわらん今匿名告も面目なしといひもはてす刀を抜て腹
かさ出し突立れば皆〜このともいかにといひて驚きぬ彼武士のいと苦げに息をつき餘字
兵衛の御親子の更なり露助も對面するの今がいつめ拙者の則これなる女の兄前の名
の二見練松今の名の鮎尾賀堂左衛門とやす者我富士屋の吾妻に執心深く今餘吾郎が妻とち
りしを嫉おもひ朝鳥の刃を買取これを媒鳥となして吾妻をなづり餘五郎を誑き偽の刀を與
て去狀を取吾妻を賺し出して我隠家に運歸しよ吾妻が我も靡たる体をあせしは刀を手に入
ん爲の計にて我に油斷とさど眞の朝鳥刀のと去狀を奪て逃出しゆゑます〜嫉怒にせま
り餘五郎もろとも打捨んど彼所へ急ぐ道すたら此所を過しに此に吾妻が噂のれ何事よや
と彷徨て委細を聞うち妹於關が自害の櫛子を見るにまのひすといめしむこれにつきて我身
の懺悔ぬん聞われ我志あしきゆるに父の勘當を受其後漸々に零落して遂お野ぶせりの乞
食となり鎌倉を徘徊せしが小助の駕籠の塵兵衛といふ者旅人の忘し財布の金をあらため居

たるを垣のひまより窺見て其夜塵兵衛が家にしのひ入其金を奪ひ出んとせしが十四歳は
がりなる娘の寝顔のうつくしさにしづらく見とれ頻に嬋媛の心を動し幾多く逃出しがの奪
ふる金七十兩にて衣服腰刀をとのへ都にのぼりてしづらく彼地を徘徊せしうち偶五條坂
に到阿曾比等のもさのひを見物せしに其うちにかの塵兵衛が娘あり前に比れば亦同十分の
美色をませり其名を聞バ富士屋の吾妻といふ彼阿曾比となれど我望みをとぐるに安しと
喜しく思ひて富士屋に到り吾妻を揚てまみえんことを望度々のさくせくといへども彼我
をいみ嫌て一夜の就もゆるささればます〜心をなやまし何よまれ金おはからていと悪念
増長して再又鎌倉お下り月影个谷の軍用金千兩を奪取し盜賊其放駒の小柄のぬしり則
是拙者なり其後我吾妻が爲に金銀を瓦石の如くすれども兎角靡されば寧ろれが身を贖出
あしかしといふひりの千金を用んどれもひしに雪の夜行方まれすなりぬ今門外にありて此
妹が物語を聞かかの塵兵衛が娘ハ我妹の小蝶にて吾かの金を奪しゆるに其金のうひりに身
を賣て吾妻といふ阿曾比となりし物語夫といひ知れ我の又其金を吾妻が爲あつかひ捨しも昔
是惡の報ならんしかのみならぬ塵兵衛を現在母の後夫としらす母も面を合さされ彼所

は居どの露いものす妹小蝶は幼時他へ別かひしおれたるゆゑ素たがひは顔を見しらせしむることいひひきあひら同胞の妹を懸慕種々鼻悪をなせし事豈天罰をまぬかるべしや我れをいみ嫌一夜の枕もゆるさうりし今おもへばせめて我幸ひにて畜生道におちいること脱たりめぐる因果の小事の不孝の罪の火の車とれに引かぬ二人の妹の孝もあり貞もあり彼等よりちて年来の悪念と今一時に轉て善み到り此自殺みづからそれと名告て出獄悔に罪を滅きて死ねばせめて未來をたすうりなると云終て於關にむかひこれ妹今更て兄弟の縁を断しぞこれ露助於關の我と兄弟あらねばおなじかざしの名汚さじもとの如くに運るひくれよ又別にいふまどあり奪るかの千両の半の其儘船岡村の我隠家に残しあり和主とりてうのおん館に返しくれよとのむく云残して刀を懸さりく引まひせば於關の苦痛を見るに堪悲歎の涙もむせぬへるさすの強氣の堂左衛門刀を投捨かの土壇の道寄てみづから我襟髪をのきわけつゝいざ餘字兵衛との軍用金の盜賊を成敗しておん身のありりを立玉へといへば餘字兵衛目をしたたけ都がために打るべしとおもひし我の打れがたに義理出來りのからすして懐に入籍鳥を手にかくるをまたくしならぬ世の掟

せんすべなし南無阿彌陀佛と聲もろとも首打おとせば於關の軀よとりつきて聲を放て泣きけふ老母淀瀬も露助も暗に落涙したりけりかくて餘字兵衛堂左衛門が首を取上げて露助に對我此首を受おさめたれば汝の首の質物の其儘返しつかひすなりとて質物の証書を投與へ前程返せし此五十兩の金の堂左衛門がむらひ料につうはとて金の包を於關にあたへさて堂左衛門が首に彼小柄の小刀をさしつらぬ首補も職て母の前にはし出しいざ軍用金の盜賊の首おん受取くごさるべしといへば老母のうち點頭此首を受とれを我うけたまひる役目もすの彼しのをづく五月雨に汝が着たる濡衣を今ぬき捨てあさらのありとて喜べの餘字兵衛また露助にむらひ我會て剃髪の望ありといへども都が爲に打るべき心ありしゆゑにいまだこれを遂す今汝が刀にて我髪をさりせめて都が恨をばらさん母人さま家督の儀に餘五郎に續しめたまひ拙者に剃髪をねん免したまはるやうに父うへは願てよといひつゝ露助が刀にて髪をさりけり今より祖父の法名淨閑の一字をとりて山咲密閑と名と更め神祇釋教戀無常を狂言綺經にとりなして誹謗の連歌といふ一派をひらき讚佛乘の因となして都が菩提のためにすべしといひ終て片手に手燭片手に斬たる髪を握つゝ庭下駄を

踏ちらして飛石づたひに池は臨手燭をわけて水鏡に面をうつし嗚呼病になやみて我ながら見たがふばかりに衰たり

窓開が姿を見れば餓鬼つばた

と口すさみりるが再又一陣の風おろし来て庭木の梢を吹ならま池水皺して愁か如く忽紫燕の花揺動して一道の炎火閃々と燃上りければ手燭を撲地取おとし又ふるひ出す瘡病に身上わななき足軟てうち踰限を踏とめつ、吐息さへも苦げにて炎火むむひ

のまんとをれを夏の澤水

とたからうに脇匂と吟と恨をのらまて成佛せよ南無阿彌陀佛となへつ、手に持てる鬘を池水に投入れば又燕子花のらくと動て花の裏より紫雲を生じ靉靄として空になびき一羽の時鳥飛出て一聲鳴つ、光を放て西の空に飛去ぬ此時窓開か胸中忽朗になりて病の頓に癒たりなり是都が怨盤窓開が一句の妙に感伏し恨をいりして得脱し成佛したるに疑なしと露助於關愁ひの中は喜びを交わり鬼神の心をも感せしむるといへるはかゝるたくひなるべし窓開又母にむのひおん聞およびもいべし主君判官の御秘藏に二振の劍あり其一振

は小鳥になぞらへて朝鳥と名給ふこれ日中の駿鳥あつたどりて陽の大刀なり今一振の此蛙鳴丸にてこれ月中の蟾蜍にかたどりて陰の大刀ありおのれ小年の時主君より拜詣の劍あれどもかく姿をりへて隠者とされば用べき所あしこれを餘吾郎につかひされしたされかしといひてさし出せば母の益感歎すかゝる折しも門外におん迎ひとよばりて泥瀬の徒者等提燈把て来りければ老母の首桶と蛙鳴丸と携て立上り我の一旦旅宿に歸るさらばくと別を告しづくと歩出て乗物にうつりなれば窓開露助於關もどもに門あくり此時露助南方十字兵衛が忠死のことを語らざるのこれを語れば十字兵衛が志ざしを失理あれはなるべしさらぬだに短夜なればはや曉に近かるべし夜の明ぬ間と窓開は露助於關に下知をなし空櫃を假の棺とあして堂左衛門が軀とあさめさせねびれたる二人の僕をよび醒さて擔しむれば露助夫婦の左右よそひ鳥邊野さして出去ぬ窓開の其跡を見おくりつ、
袖白妙の卯の花の雪の夜もしらくとあくるしのめ朝紫の杜若の花も悟の心
ひらけてすはや今こそ草木國土すいや今こそ草木國土悉皆成佛の御法を得てこそ失にけれ

と謠曲杜若の切をうさひつゝ歎息して一間の裏に入より時に又池のあたり救々音しけるか燕子花のしげりあひたる裏より衣服の更なり覆面頭巾丸縫の帯手覆裏脚に至まで都て一様の紫に打扮たるしのびの曲者あらわれ出て四邊をうかひひ振足しッ、亭坐敷にのり彼處ゆありし朱塗の手箱を奪取身を轉して出んとす窓開の奥の間より出來りこれを見つけて呼戻せば曲者は刀を抜て斬つけさり窓開の身をひねりて手やく刀と打落し朱塗の箱を取戻して腕ねち上ッ、唯一言紫の朱をうばふをにくむといひて引すゆる時たちまち鳥鳴て夜のはのくも明わたりぬ此曲者の謂ならびも彼箱の裏なるはいかゝる物といふ事六の巻にしるして詳なり

㊦窓錢のうさ世をいなす主人の合力

扱も南方十字兵衛が兒子南餘兵衛の母真弓一子窓太郎もろともて前の年鎌倉を啞方拂ひになりて彼郷を立退身をよする陰になけれバ一所不住に拾叟けるが母いひけるハ夫十字兵衛の不思をなし給ふうへに自己刃を以て非命に死し給ひぬれバ冥途の苦患もさぞうしとおもひやらるゝなり故に今よりれもハ立西國願禮してせめて夫の罪障を消滅し佛果を得給

ふよすがにもとおもふなれど我老て足弱ければ遠國の歩行のなとすこれといひにせんと打歎いふ南餘兵衛と元來孝心深き者されバ母の望を遂めんとおもひそのよきおやし立よいかおもえておん供いたまひべしといひて頼まうけがひ少の貯を出して親子三人着すべし禪衣小笠手覆裏脚のたぐひの旅の具をどゝのへてあらかじめ其支度となま二箇の網代を作り前に母後に子を乗しめ摠摠を以てこれを荷長き旅路に出立けるが少の路銀もいやくつかひ盡しけれバ道すぐら往來の旅人に一錢二錢の情を乞て其日くをぬくりぬされバ南餘兵衛うたひもあれぬ願禮歌をうたふにのづから謠曲の節のまじれるも理あり母はかれたる聲の齒をもれてうたへバ窓太郎の願禮に御法施と舌もまのらぬりたことの聲いと哀よてわさまへのなき幼子の父親に荷れながら柄杓打ふる片手業に風車まはしつゝ遊ぶ体を見る人毎に涙を落し情をかけぬいなかりけりかく物を乞ッ、行旅され道もはかどく木をひろひて飢をしのぎ流を掬して渴をさすけ野原の露に袖を片敷木の下草にひそ臥て夜を明すなど悲き事の數くけいひつくされぬ旅あれども御佛の擁護やありけん恙なく日敷をうさねて三十二ヶ所の靈場をめぐる第三十三番目美濃の谷汲よ到て満願し夫より又

都の方へのぼりもさぬ○俊成卿の歌よ「よろづ代に千代をかさねて八幡山君をまもらん名にこそ有けれ」と詠せられし八幡山の京を去こと四里餘にして則山城國の南界あり當時男山護國寺の本尊白檀の藥師佛開帳あるよりて參詣の人群集し綿々絡繹として往來しバらくも絶すいと賑けるにこそ是も乘じて利を得んと思ふ者此所彼所に假家をつくり酒肴温飽可漏子を商家わり沙糖餛飩頭齋餛飩菓子を買家あり心太買の店にハ水機崗に巧を盡花賣の軒よは青柳の糸をなびりす山崎の小櫃の繪も深草焼の彩色にけおされ搗餅の螺の形も編笠焼は像を奪はる賣卜は著を拾藥賣は長劍を撫す宇多天皇に十一代の後胤伊東が嫡子といふ曲舞女あれハ蟹の燒蕪の夕煙とらたふ琵琶法師あり福廣聖の辻談議妙高尼の針供養鐘鐻の勸進高足駄の行者綾織八から鉦のよぐひさへたのがさまハ集り立り幻戲川玉縁竿のたぐひの奇妙の術を施者ハ更あり一寸法師の蟻の舞輕業の骨なし骨あり伊勢國より活捕てゐて來つる鬼女親の因果の子に報つる蟹浦寺の蛇女猿の俳優犬の籠脱賴政の射て落しつる夜鳥所有が箭よりけつる怪鳥のたぐひは更奇とせず若狭の八百比丘尼が嘗殘しつる人魚朝比奈の三郎が捕へ來つる焰魔鳥など見も及ハぬ鳥獸聞もつたハぬ奇人あやしとわ

やしきものを見する假家所せさまで立ならびて標の幟交の幕片々として風にひるむへり楊弓の音辻打の大鼓よまじる哨哨の笛かまびすしきこゑて諸人の耳目をおどるかしむゝる中に蕪簾掛假家つくりて外の方に怪き獸の形をゑがきたる招牌をのけ出したるあり片膚ぬきたる男戸口に立扇をひらきて往來の人をさしまねきッ、聲たかやかによびひいへるはこれ此招牌を見給へともこれは雷獸といふものよて雷につきてありく獸なりこれは安房國二山の雷狩に活捕得たるありこれ見給へ家土産あよき話柄ぞ招牌に露をりりもいつはりあらハ錢取いまじ見給ひて後たこしねハ聲かるハバウリ言ハ見物の諸人蟻の如くに集ひ蜂の如くに群て假家の裏に入こちおしあしひらめさあひぬかくて日も西にうたふさけれハ參詣の諸人足をとやめてれのぐさまハ家路を急ぎて歸去けるが忽寂寞として跡に残れる物は早瓜の皮に蜘蛛の形したる魚の骨の野ざらしめきたる懐紙の屑繻絁の塵破れたる蕪履のたぐひのみあり前程より彼假家のほとりに物を居ふる勸進聖あたり人なきを見て彼方とさし招きけれハ笠ふりく着る煎じ物賣荷を擔てこハ來たる彼勸進聖頭髪をうくせし頭巾をとれで是乃箕腹蟻右衛門なり煎物賣笠をとれば是乃袴田紺丸

郎なりさて蟻右衛門四邊を見ずはし聲をひそめていへるはあのれ鎌倉より貯來つる路用の金を五條坂にてつかひ果しおもひのけず俄に浪くの身となりつれば他國へ立退べき路銀なくせんすをもなければかど姿を扮し物をしていたづらに日をおくるなりといふ紺九郎いへるはあのれも互の如く貯なきゆゑにうく煎じ物賣となりてさまよふきりかくては隠謀をくどめてつるかひもなしかの蛇ヶ谷の老女今しかくの所にのくれ住よし且路用の金を得良計を施して彼所に去老女にした夕ひて宿望を遂るあしうと二人語居る處に蟻右衛門が奴僕沙土七いそがはしく來り兩人にむかひていへると去年五條坂にて再會の所とかやうくどのさまいしゆる彼所にありて數月待託候へをも音信だにしたまはざるゆゑやむとを得ずふたゝびのぼりて所を徘徊しおん兩所のねん行方をたづね他他のことはおきて且のやくさこゝのあぐまの山咲庄司頃日上京してれん兩處を捕へんとしのびくよつづねひよし御油斷あるべららるといふ蟻右衛門これを聞て打驚しおらば此地にも長居いならせといひて當惑の体なり紺九郎いらく庄司京都に逗留して居るとならば我く兩人不意をおとひて打とるべしといふ蟻右衛門頭をふりていらくいなく彼無双劍術の達

人なれば容易よ手をつたすの危しだまし打よするにしくべからずといふ沙土七又いへる山咲餘五郎狂氣して此邊を狂りさひよし庄司を打おやしめしおらば彼をも打玉へ生おさひて狂人といへども後日の害あるへしといまたいひもをこらざるに氣ちがひよ泡齋よと童等のいひはやす聲聞ゆけれバ沙土七彼所を顧てかれは正しく餘五郎いはんといふ蟻右衛門いはくしからバ汝面をのくし暗に彼を打捨よといふを耳につきて耳語けれバ沙土七の打うなづく蟻右衛門は紺九郎をともなひつひに此所を立去ぬ沙土七と願りふりして面をかくし裾端折て帯に高くかいはさみ刀の目釘をくひしめし假家の蔭に身をよせて待居たりさて餘五郎堂左衛門が善心になりて腹さりしことと露しす彼が行方をたづぬるためあ僞狂人となり髪振亂し竹の枝を打うたけて足もしせろに狂ひ來る後につきさる童等口々に言晋て打笑へバ立留り童等何笑ふ物狂かおろしいとやうたてやあ春よとぶつも花さそふ菜種の因を蝶しらす菜種と蝶の果をしらす薬住虫のわれうらと狂ふ袂に風の葉の亂れて露のれさもせず寝もせでひすふ夢心とうつなるといひて泣つ笑ひつ伏まる童どもも立去て折よしとや思ひけん沙土七は物陰よりあらこれ出て唯一打と斬つくをバ餘五郎

はむくと起て身をかとし聞やいなうの空なる風だも松に音するならひありといひつゝ、扇をひらめかして又さきりつくるを拂のけ真葛が原の露の世に身をうらみてやあけくれんどいひつゝあしらふ扇の手練こなたの行もしとゝにて秘術をゆくせと手にあひ中頭をのぞめバ身を沈め裾と拂への飛上るひらめく剣の雲の電光餘五郎が身のとらさく波上の燕子に異あらず狂ひめぐりかためぐり一ツ所をいく度ももさて歸りのへりてい又行雲の旗手より折のらおどす青嵐は梢木の葉もはら〜〜泥の川音さら〜〜雲の端袖もひら〜とかなたへなびきこなへなびき狂人走ば不狂人も打もらさじと早足を出しあとをまゝひて追去ぬ〇時は五月の半なきバ送梅雨も降すよくつゞきて天氣快晴なりしが此日の夕方より雨を催す雲起りければ道行人も家路を急往來絶たる八幡堤に編笠深く着たる武士一僕具して歩み來り辻に立たる石地藏の陰に立やすらひて僕をちかづけ何ありあらん耳語ければ僕の手をおし揉つゝおふせの如く今朝はどのからひいふかか武士のよし〜といひて打らなづき又何やらん耳につきて耳語懐より命財布を取出して渡しけるに僕これを受取てうちうなづたバかの武士のもと來し道へ歸りゆくしもべのあどにといまりて金財布

を掌よのせおもみを試て獨言にいへるのさして石瓦とちがひ金のおもみの別なる物ぞ五十兩といふ金をしもべの我よわづら給ふも我正直をしり給ふもゑならめ人の日來が大事なりと無益ことを暖折しも沙土七、餘五郎を見失ひこのくまかしのくまに目をくぱりつゝ此所まで尋來しがりのしもべが獨言をいふを聞て暗に喜び稻村の陰に立かくれおは様子を見を窺をりしも暮六ツの鐘鳴々と耳に近く響きければかのしもべのころつき財布と懐にかし入て足バやに走去んとしたる所に沙土七つと出てゆくさきに立ふさがりものだにいなす彼しもべが懐に手をさし入財布を掴て引出せば彼しもべの沙土七が腕をとらへて財布をもぎ取賸のふと盗人め我命より猶大切の此財布汝よとられてすむべきか妨せを一打にすぞ其所退く通すまじさやと一腰の柄よ手をかけ臂をおしりて罵は沙土七と盧胡毒蛇の見いれし其財布とく〜渡せとよ〜りて又財布を奪取逃去足にとりつきて引戻し取返さんと捻合まが沙土七が一身の貪欲手頭に凝わつまりしにか打と擲と財布を放さず互に双袒かし脱て警をつかみ合或の倒或は起上に重り下の敷れ汗もしとゝに息もつきあへず力と盡て揉合ぬかくありける時男山の見せ物師等錢箱木戸札大鼓哨响のふぐひの見

せ物の具を携て歸道丸木をもつてつくりたる圓の裏に彼雷獸といれこれをさま荷ひにして
 來し夕や黄昏のはの闇裏に組つほぐれつ争此方人二に撲地つきあたりぬ此方の二人
 の暗裏に見せ物師等をたがひに相人とおもひたがへて或と蹴倒し踏倒しければ見せ物師
 等のこの狼籍者よ醉狂人よといひで慌まどひぬけつ潜つ身を避とす彼僕いそのとまきう
 ちに見せ物師等を盗人の加勢ならめどなはれもひたがへて一腰を抜放して打振ける其刀の
 光り暗裏にひらめきければ見せ物師等これと見て膽を消雷獸の圓を其儘地上に捨置てぞ
 逃去ける沙土七も刀を抜刀さきもしどろの探り打空にひらめく雷の光をしるべに打こむ
 刀丁々しどろ打合しが勝負つクね刀を投捨ちば財布を引合て取つとられつ争時しも電
 光いそがしくひらめきて雷聲嗷々と鳴出しけるが彼雷獸雷氣もよはされて忽勢猛
 くなり繫たる鉄の鎖をひきさきりつさしも堅固よつくりたる丸木の圓をめぐりと押破りて
 躍出總身の毛を逆立鼻を吹いからま牙を咬ならし眼中より光を放て狂ひめぐりければ二
 の者大に驚き身を避つゝなは財布をあらそふづみに財布の紐雷獸の首にひき掛りけれ
 ば二人の者のこれをとらてめどおとるゝ退めくりける時雷聲漸く近く鳴て空より一むら

の黒雲まひさうり益暗くありてあやめもいかさざりしが雷獸と此雲に飛上り首に財布とひ
 き掛たる儘にて矢を射〇如くに天上してけりあの僕も沙土七も電の光に就て空を見あげこ
 れをしたひて退ゆらんにも翼なればせんすべく唯惘然としへ立居たりしが兩人一度よ
 尻居に倒れて大息つきてぞ居さりける〇夫孝と百竹の先あり孝天よ至る則て風雨時に順び
 五日に風吹十日に雨降孝地に至る則る万物化盛し草木もよく花咲實のり五穀豐饒なり孝人
 に至ら則り其家に衆福來りて貧人も忽福者となる古今例すくあからせされば孝行
 の徳の尊きとたとふべき物なし孝なる人の天の憐をかうふりていみじき福をうけたも孝
 からざる人は天の憎をうけておそろしき災にあふと影と響の如し原孝の字をつくるに老
 の字のあたへを省て子の字を添さり昇老なる父母の傍に子ありてよく仕ふるを孝とするの
 謂なり老たる父母をもちたる人此字の形にあらんすんばあるべからず去程に南餘兵衛の西
 國順禮をなし終て母の願望を遂しめそれより山城國より狐川と左よとり河内へ越る坂道
 の村末に人の住わらしたる古家を借母子三人しぱらく此に月日をおくりぬ其家のさまは二
 階づくりみて奥の間もありあがら軒端くふみ壁くづれ骨わらはにうちよろばひ窓にの籠

葛とひまとい庭には葎生茂り板敷も朽蝕子も破床の下より草生出なごまていふせさのいり
 んかたなし素一銭の貯もあくなすべし活業もなければ童の習物にするいろくの笛
 牧童の横笛盲法師の節截嗽吹哨笙の笛のたぐひさへ手細工につくりてこれを賣ある
 鹿笛にかあし秋をおもひ燿笛にわびし春をむかへわづかなる價を取て母と養ひ
 子を育れば夜の衣薄くして曉の霜冷じく朝氣の烟絶トにてつねに飢がちなり素孝心深
 きものなれば父十字兵衛が非命に死せしを今に悲み鳥邊野の葬所にしバク詣て是と祭る
 こと悲なり母のいろくの辛苦のつもりけるもゑにや聲となりて大聲にいふとすら聞
 へねバ餘兵衛の是を歎きますく孝順につかへて心をもちうる事切なり貧さなりにも母
 の味よき食をすゝめられたのれと子鹿食と食ふしかるもあは足ざるとさいおのれの飢を忍びて
 食せざり日もればかるなりされと母に食したる々しきを見せて其心を安らしむらう
 べし錢ある時の魚肉あるひの味よき餅菓子のためいと求て母にすゝめ其喜の色と見て
 たのしめり子の窓太郎のいまだ五歳にてわさまへなければ共にこれを食めといひて泣を餘
 兵衛呵こらして食しめず母の十分に食するを喜びぬおのれの常に襤褸のみを着て臥母に

衾をわつうして臥しめなや寒からん事をおもひて母の熟睡をうくりひおのれが一重と脱て
 これをおほふ母睡を醒して餘兵衛が臥する方を見やり彼が薄着をかきまみて我に着たる彼
 襤褸を又餘兵衛におほひ孫の抱き袋をばく孫あ着ておのれの寒さをいとし餘
 兵衛目醒れば又一重を母にゆづる一夜のうちに親子一重の襤褸とゆつりあふこと度々なり
 母の慈と子の孝とおほひぬかくの如し是等はずべて此前の事をあしかけて五月のなりばに
 至りけるが餘兵衛益困窮して米屋薪屋古手屋おとに債おほくいで彼輩夫をさびしく
 ことたりければさまぐと詞をつくまで云延母にしらせましと心をつらひぬ餘兵衛熱おもひ
 ける頃日母の容体を見るよ瘦のしけ日にまさりて衰なまふ様子なり我貧中にも母に
 と折く魚肉をすゝめ食の乏からざる様に心をつらまゐらするに漸々衰給ふはいふの
 し事あり試すはあるべからずとおもひ一日あやうけり魚ともどめて手づから町噂に調
 じあらしに飯を煮てかの魚肉をうぬ母の前よとなへか拙者之物賣に出いへバゆるやかに
 おれをめしおがひへりしとふことを指もて掌よ書て見せければ母はいと喜べるる
 まにてうち點頭ぬ餘兵衛の實商ひに出る体をなして立出家の傍なる竹林のうちにかくれ

入て裏の様子をうかがひ居たり母のわくありとい露しらす孫の窓太郎を側近よせていふや
 ういつもの如く汝魚と食せよ父の歸らざるうちにしく〜といひつゝ箸を把て彼魚の肉
 をじしり咽に骨をうつるまといひて食しめければ窓太郎のいどうれしげに舌打して食ふ眞
 弓と其けしきを見て胸ふさがりなるがしりしりて涙の目をおさへぬ不便や餘兵衛我に
 孝あるゆゑにいとをしき子の食を減じて我には食を飽しむ故に汝之飢ぢらにて僅の魚肉を
 食しむるも餓鬼に百味の飲食を與ふらん様に喜べり我争是を獨食するにしのぶへさ
 や若父が歸てといひ魚は此祖母がのこす食ぬるといへ必汝の食しといふべうとせとい
 ひて皆窓太郎に食しめられたのは一箸ごとに食す荒屋は晝も豹蚊のねはさうるさ〜と云つゝ
 團扇を把て窓太郎をあふぎやりぬ餘兵衛の壁の崩れたる所より暗く此体を見て落涙し扱ひ
 母人孫を深くゆつくしみ玉は我をぬらす食を我家にあふさる時皆窓太郎と與へ玉ひみづ
 からハ飢をまのびて食し玉のざるゆゑに日にすさりて瘦衰給ふなるべしと思ひて且露
 且歎けるうひやく黄昏の比となり雲の間より電光ひらめきて遠く雷の聲ひいさやがて雨降
 來べく思ひければやをら竹林の裏と出外の方より飯り來つる体をあして裏に人母の前に

ぬりづきて今日しも錢おほく得て歸ひこれを見玉〜といふを仕うさにして見せつゝ懐より
 錢の袋を把出して見せければ母の喜び思ひしよりかも歸のひやかりしぞ前程の魚いづより
 もなや美味にておぼぬす食を過せしあり我今日の何うへまされていまだ看經をせず我のこ
 れをいべければ汝のしづらく休息せよと云て念珠を袖く〜みにつまぐりつゝ灯火を把て奥
 の一間あ入あけり餘兵衛の門首の戸を引よせ引窓の戸を立なとして雨の降べき用意をさし
 方灯を取出して火灯の石火電光も壁の破れを漏風に硫黄の花と消れじと心の闇の袖屏風寐
 冷させじと子を思ふ親の心をしらぬ子のまろび寐したる窓太郎食に飽てやすや〜とこゝ
 ろよげに睡つく餘兵衛の獨手と又さて心の裏もおもひけるハ母人孫をいつくしみの切なる
 ゆゑにわん身の衰を願思はずめて日を過し玉の餓死したまはん事必定なり高祿と玉
 かりし昔しの身なりをいのはせにも孝養を賜すべきにうちをしさよ母人の心もくほどに窓
 太郎を養ひんにも糧不足なればせんすべなし唐土の孝子の親を養ふ其ために子を埋めんと
 したるもあり我運命盡すもし天日の光を見ることありてふたゝび妻妾を娶ひ子の又も得ら
 るべし母ハ再得事あたとされば寧窓太郎を失ひて一口を減じ且母の壽と去絆をとくむし

かじしかれども子を捨るゝ世の制禁なればとべからず今夜ひそのよ刺殺し母に他にあづ
 けつりのせしともいひて當座をつくるふべしと心をさぐめ壁を掛おさる刀と把て立むか
 ひけるふくとつしらぬ窓太郎の顔の愛らしさに氣れくれしあまのいとをしくていづく
 に刀を立てしともおぼやけを目もくれ心もさねて、前後不覺に泣伏ぬ折しも奥には母真弓
 が看經の聲の音も細火陰に焼捨し蚊遣の烟も鳥部野のひなしき空を見る端かともひつ
 いむせりへりてしべし歎に沈しがはてしもあるべきとなりねばとれもひなほしてすでお刀
 を抜んとしるにいうにしての抜ざりけり心づきてよく見れば此刀を壁に掛たさたる
 時窓太郎が守を入し巾着に迷子の札をくゝり付たるを打掛たさし其紐刀の鏢ふまをひつ
 さ留となりて抜ざるあり餘兵衛是をつらく見て又氣をくじく時しもわれ嗷々と鳴神のひ
 びきも遙遠里に迷子をよぶ鉦大鼓いどい哀をそねにけり嗚呼人の親の心と悶もいとせし
 て子をたづねる者あり宿世のわじき因果にて貧身にありさされ子に之怪我だにさ
 せまじとこれ此如く守巾著づけさせしが親の手にけり殺す子も劍難除と何事ぞ冥途に迷
 はす幼子に迷子札も無益なり幼て死す者は罪科もあるまじと思へども父母養育の大恩とか

くで親に先立もゑ不孝の罪の重しとさく定業すらさわりといふ况刃にかけられて非業
 又死に窓太郎佐比河原に迷ひ去砂を集て塔を積さぞな阿責に苦まん我と一生貧くとも彼を
 ばよく生立て老後の力亡は親の棺を昇めめとおもひ思ひて育し子を我手にかけて身を屠
 いづれ流の順なる水をさうしめに手向べしとはおもひきや親子の一世の縁と聞ばもふ來世
 でも逢れぬ我子永劫顔の見おさめと寐顔とつとく打まもり恩愛深き悲みに身を刻るゝお
 もひして落す涙五月雨の鏡にあまる如くあり餘兵衛の元來丈夫とて男魂失のざる者あ
 れせもゆく女々しと縁言いふの子をねるふ心の切なるゆゑと更哀深のりけり奥の間には
 母真弓、聲のかきしはここの物音歎もしらす看經の鉦打おさめ心の裏におもひけるは
 餘兵衛錢袋に小石を入折く我に見せて我ころとやをのらしむとくよりこれを悟れども
 さわらぬけし死にもてあす我又彼を心を安のらしむへくおもへむなり彼がありさまを見
 るに貧苦にいさみ瘦衰て年若けれども氣力なくほどく命もあやうけなりしかのみなら
 ず孫までも飢かちなればよく育へうもおぼやけたし此母が身ハ年老て残れる雪の日影待間
 の命あれバ何おしひべら我一口を減じ彼を絆を斷て辛苦をいふと生ささある子や孫の命に

かひり冥途に到て十字兵衛をの、死路をさづね歸りかきも苦患をすくひまひらすにしくべからずと覺悟をささめかねて亡後の經帷子にとれたるぬきたる禪衣を取出し剃刀をも携て餘兵衛を知られし曉られしと拔足するも、聲のものが耳に聞ゆねを知らぬもるる簀子のうへ折かた降來る大雨の音にまぎれて忍びつゝ、彼方の二階にのぼりぬかぬかする時しも笠の下に覆面一襲打著たる一個の武士此家に近く歩み來る其跡より願つふりに面をのくしたる曲者刀を抜るばめて着來りこゝたの武士をだまし打にせんとおもふさまなるが雷光れ、身を隠し暗くなれば又さらわれ出て打んとねらひ隠つ出度くすきどもかの武士はこれを知ざる様子ゆていとあやうくぞ見ぬにける餘兵衛泣流して居たりしが母の看經の聲やみければ見つけられての妨げせねもひつゝやめて心を取なほし畢竟母の身がりに殺す子あれば歎くべき事よあらずとおもひさき思愛の絆となりし守巾著の紐をひきさき刀をすかりと抜放してやどく刺殺さんとしたる時出がしらすか窓太郎あなやと劫て目を醒し起上りて泣出し婆々ささいいづくよおひす婆々さまを寝々すべし婆々さまのうとさけびつゝ、奥の方へゆかんとするを心つよくも引戻しおもひをさせじとおもふにぞ泣さけぶ子と引

よせり、手拭とりて目口をふさぎ引窓の繩たぐりよせて腰に結付放打にとおもひしが獵者にとどられし狼の子繫し如くにて目もめてくれぬ姿なりあかひひやそちが腰に結つけしは菩提のために讀誦する經卷の紐とおもへ南無阿彌陀佛ととなへつゝ、振上る刀の下にまゐる子の其姿と北音首に異ならざれば平日の遊びをおもひ出して鬼わたまの鬼よりもなほおそろしき我仕業とおもへば又も刀の手さささゆみけり彼方の二階の暗裏には母眞弓禪衣を身におはひ口に念佛手に念珠剃刀を把上て吭をさかんとせしめて、此方の餘兵衛もおもひさき南無阿彌陀佛といふ聲もろとも又振上る刀のひかりあやとひらめく電の目を射るばかりに家内を照し、忽一聲霹靂絹裂如くに鳴響て頭の上に落るかともふばかりにさびしければ餘兵衛が刀の手の裏もねほねほするひて窓太郎が身にとあたらせ腰よ結し窓の引繩すつばさきりぐらぐらとひたぐり戸の裏に降籠雨ともよ小判の山吹散亂して井手の嵐とうさがり彼方の二階に覺悟の母も雷鳴よおどろきてたげえず刀物を取落しうつふしにぞ伏たりける此雷一團の火炎となりて彼武士を打んとねらふ曲者の頭上に落身体碎死てけり餘兵衛是をば露しらす小判の降しをいふかりてあふさ見るに引窓に

這う、りたる萬萬に財布かゝりて其裏より乱落たる金なりけり折しも人のおどなひしてさてもきびしき雷よ必定此邊に落つらん命びろひをせし事よ和主の臍と恙あさりと眩つゝ門の戸をひきあけてつと提灯をさし出せしハ米屋薪屋古手屋の輩なり餘兵衛は拔躬を背後にかくしていそがしくいひけるハこは聞分あき人ハよすでに昨日おん身等の許にゆき此月の晦日までといひ延ておきつるに夜中の遠慮もなきとかと恨いへハ此方の口をひとしうしていなく我輩の貸をいたる爲にハ來て帳を消え來つるなり米薪古手の價のこらす受取如此といひつゝ矢立の筆把て帳を消受取の書付をさし出せば餘兵衛ハ益いぶかしみ此方より其價を償ふるおぼへもなきに受取しといひかなる故ぞとたづぬれば三人の者いひけるはさてハをん身はしらざるか今朝奴僕とおぼしき人我ハ許に來り南餘兵衛が債はいのちあるぞと問る、故帳を出して見せればのこらに拂ふて歸られたり何よまれよき仕送を持たるおん身日來見くたしる我ハも我と折ぬこれよりのちは氣づかたすいり程も貸まおらせん米薪と更にもいはせ古手なりと新衣なりと澤山買て玉のれりし幸に雨もやみぬ傘の供してまかりあんと欲に、噯宿鳥翼すはめて歸けり餘兵衛ハ頭をかさふ



けてうれといひこれといひかへすぐもいふのしるよとひとりごちたる時まもわれ外の方に聲ありて不審よおもふに 理なりこゝあけよ謂を語て聞すべしと戸をのたさせて彼武士義笠ぬぎ捨覆面かなぐりてしづ〜と打通る餘兵衛此人を見るに是則主人山咲庄司雪森なればこのそもいりよど驚きつゝ刀をおさめて禮をなま席を拂ひて上坐に迎ゆれば庄司としづゝに坐をさだめ且つやく見子が繩をといひけるにぞ餘兵衛いと面目赤けに窓を郎が腰にのこりし繩をどき目口よおはひし手拭を取すつれば庄司又財布をどらせ乱し金と集させ灯火を取よせて敷をあらため財布を見て眉を蹙いと不審なる体ありしが彼僕の男沙土七を高手小手にくゝりあけて引立ッ、走來りぬ且那是におひしますすの先刻八幡堤まで拙者おもん渡しありし金財布を此者が奪とらんといふせしめ奪れども争折まも黄昏の暗まされに見せ物師等にやいん雷獸と入る圈を荷て來りぬが刀の光にやおそれけん彼圈を捨置て逃去たる其後にて彼獸雷氣おもよやされて 忽勢猛なり圈を破てをどり出狂ひめぐれる其のすみ金財布の紐雷獸の首に掛り其儘天上にたせしゆえ取戻さんよも翼のなしせんすべなきにせめて拙者が分証の印にと此者を捕へ願かふりをかなぐりてよく〜見

へば豈いからんや此者は是箕原蟻右衛門門下僕沙土七にひもぬ繩打て引立まるとり金財布を失ひし拙者があやまど一言の分説もいはずといひて打しやれあやまりいりたる体なりけり庄司のこれを聞どひとしく掌を撲的打其にて我不審それぬ夢平のあらず怒るべからず其財布と此にあり金の數も五十兩一枚も不足なしといへば夢平はこれを見て一旦天上いたしるる其財布がぬかにして此にあるやといふかりぬ庄司又夢平に向ひ其沙土七にの僉義おはし彼所の松に繫ぬき汝守りて逃ざるやうに心をつげよといひてとやざけ餘兵衛にひかひていひけるぬ汝が父十字兵衛の從來老實ある者にて阿曾比などよ心をうとれ不義の金をつかひ捨べき者にあらざるゆゑ去年自殺せし未始を疑ひしくおもひ我腹心の者を暗に都にのぼせ五條坂よつかりして様子を聞せしに果して我推量にたぐとぞ見子餘五郎富士屋の吾妻といふ阿曾比のよめに祠堂金石塔料をつかひ捨る罪を十字兵衛おのれが身よ引受て切腹し我君より賜たる朝鳥の刀をさへ賣代なして石塔料にしるよし明白に知たるなりこれによりて我餘五郎が行方をうつね手打にもすべく思ひぬれどもさある時の十字兵衛の犬死よなる道理なれを胸をさすりて捨ぬさぬこれすこしも見子をりばふにのらず唯十字兵衛が志

と失ふましのびさればなり汝等母子をも速に歸參させ原の如く家を立つかりしらくれもひぬれども是又さあるとき餘五郎が罪をあらはささればなりがたくあらはす時の十字兵衛が心またがふこれをいかんともすべうらざれば我心にもあらで金を泥も捨玉を淵に沈めさぬしうるに此度君命をかうふり箕腹蟻右衛門袴田紺九郎等兩人を捕んさめに上京せしこと幸ひなれば此僕夢平にまうしつけて汝が住家をたづねさせしに貧けある様子も聞暗ま汝を救んため先刻八幡堤にて夢平は此財布の金五十両を渡し汝に與へよとまうしつけしに今聞か雷獸のさめに此金を失ひつるよし落る所もわやうるべきも此家のうへも落たるの正是皇天汝が孝を憐給ひてあらたみ此金を授給ひしに疑なし孝人に至る則ち衆福來るといへるのゝゝるたぐひあるべし今朝米屋古手屋の者等に汝が債を償せし我夢平にまうまつけてさせつるあり母と養ん爲に子を殺んとれもひつめたる汝が孝心感ずるにあまりあり皇天の憐給ふも理あり此金をもつて心の儘に母を養ひ汝が心を安くすへしといひて彼五十両を財布におさめて與へければ餘兵衛の是をわし戴きさて亡父の忠義のために死しむかといひて喜びつ、庄入庄司の慈悲深き志を感歎して落涙袖をしがりなり時に隔の障子を

ひらきて母眞弓のざり出庄司に向ひて恭しく禮をおこなひていひけるひさくにて健におひす御容体を拜しよろこびにねへりす夫十字兵衛不忠をあして自殺いたしむと今までも恨を居ゆに今彼處にておん物語をうけたまひりしへはしかにのあらぬ忠死のよしさありてことと喜ばしくおもひりんべり我くをねん憐ふかく債を償たまひるれみならせ許多の金をたまひる事何ともてか此大恩に報いへさといひて頻に涙を落しければ餘兵衛は驚母人の耳が聞ゆといふに母も心つきてげにもくどもひてうち驚き今何をつむべき我汝が貧窮を見るよしのびす一口を減して貧苦をすくんとおもひ二階にのりて自害せんとしるに今の雷鳴心の臓をつらねくやうにおほはしがさて雷の響も病根を打破りて我聲のなかりしかといひて我身ながら不思議におもへば餘兵衛と聞て益れせろさそと危のりし事よ拙者も又母人の爲に窓太郎を殺して一口を減し候とんと存じすでに打んと振上たる刀の手の裏雷鳴もるに自然と狂ひ打損じいいとへば母又いへるの經帷子と思ひて着たる順禮の禪衣の觀音の御影もあり今の雷鳴我自害をといめ汝が刀を狂はせしも雲雷鼓撃電刀尋段々壞の經文にたがはず日來信する菩薩の擁護うたがひなしとい

ひてひすら歡喜してげり窓太郎のわさまへもく眞弓の側に立寄て祖母さまねふたいねかしてよと膝に上りて抱きつけや窓太郎御主人さまのおん側あるぞお禮をせぬか不禮の奴と口にて呵と心にて此祖母も多に父の手にかゝんとせし危さよ不便の孫やおもひつゝ抱きしめてとかく涙はどくまらず時よ又夢平いそがはしく來りていひく沙土七めのおふせの通彼處の松に繫おさし此處の竹林ぎこに雷死とおぼしき死骸にてよく見ゆへ不のかに見知たる者のやうにればは候といふ庄司はこれを聞とひとしくつと立上り餘兵衛にともしびを把しめて外の方に出來りりの死骸を點檢するに身体はくぐけ焼爛たりといへども袴田紺九郎に疑なしたてて我のどをつけ來りたまし打にせんとしたるを今の雷に碎れて死しふるならん惶へしくといひつゝ舊のところお歸て坐し又餘兵衛母子に對ていひく汝等が兩人母の慈悲あり子と孝あり今に迅雷母の自害をといめ子の刀の手を狂ひしめて孫の命をすくひ玉ふ都是天の憐れをうふりし所なり其にかかりて紺九郎の雷に打れて死したるの彼が不忠の天の罰し玉ふ所を疑なし彼といひ是といひ天の賞罰正しき事かくの如し善惡應報因果觀面の天理彰けとして毫釐もふりなきると見よ孝の天を感せしめたる例

勝て計べくらす悪人の雷死せし例も又鮮す家貧して孝子顯る世亂て忠臣と謙といふ王長が言宜哉汝我祿を受たる昔の身ならバ其孝もわらひれまじといひて感嘆聊やまごりしが又いひく我汝をハやく歸參させたくおもへども一旦追拂ひたる者なれば私のハからひあしむはし是我苦き所あり何とぞ一ツの功を立よ其功といふの如此个様くと餘兵衛が耳につきて何事か轟けれハ餘兵衛の點頭つゝしこみうけたまひりと答けりかくて庄司ハ別と告て門外に立出ける時雨過雲散て一輪の明月皎々とかゝやき恰白日の如あり此折しも餘五郎吾妻とともに此家をさづね來り餘五郎且又庄司にひかひ禮をおこなひていハく我不忠不孝にして尊顔を拜はさへ面目なし分説の切腹より外あしと存せしかせ十字兵衛賣代なせし朝鳥の刀を買もせしこれなる餘兵衛に返し與へて彼が家と立る便にもとれもふばかりに今までなからへひなりしかるよ此吾妻姉尾賀堂左衛門とふ者を欺さかの刀を取もとしめて爰にあり我吾妻が心をしらす偽狂人となりて堂左衛門が行方をたづねみに先刻のからき途中にて吾妻に行あひ彼が本心を聞且露助もあひ堂左衛門が善心になりて切腹し

くる事れよび兄餘字兵衛との拙者を憐たす事委問いへばいよく罪おもさ
 者と拙者なり露助とすは則 僕路平がことにいさく餘兵衛これを受取といひて朝鳥
 の刀に十字兵衛が位牌をそめて渡しければ餘兵衛のこれをおし戴ておさめけり餘五郎又父
 に向ひ十字兵衛が遺しおさし此竹の刀にて只今切腹つかまつるがせめて拙者分説にいな
 りいざ餘兵衛介 錯頼といひもてす竹刀を抜放して腹お突立んどしりければ餘兵衛は
 慄れしといめ吾妻も其手にとりつきて涙を落しいひ分なきはれん身バのりか十字兵衛殿を
 失ひし其原をさづぬれば妾身より事おまれば餘兵衛の親子の衆に合すべき顔なし殊更
 前はと途中にて露助のかゝるを聞バ堂左衛門と妾が同胞の兄なるよし彼といひこれとまう
 し妾こそ死ねばならず皆さまいとまたびいへといひつゝ竹刀を挑取ておのれ夕晚につきた
 てんどびるを餘五郎またおしといめいなく我から先へ死ねばならずといひて互にどめつ
 どめられつ死をあらそひし夕庄司は態聲あらゝかよ二人を呵竹刀をとりあげて餘五郎が目
 ささるしつけこれを見よ

拙者此度の切腹犬死に相成不申様御短氣御慎遊され可被下し

かくの如くしるしたるの十字兵衛汝が性質をよく知て死したる後まで諛言をくへんと忠
 義の魂を籠残したる書置にあらざるやといひさしてはそに落涙したりけるが又いひけ
 るの憎しと思ふ汝おれども是まで其儘さしおさし十字兵衛がかどかり切なる志を失ふま
 じとたもへバありしかるに汝今自殺する則ち此書置の如く十字兵衛の犬死するのみな
 らず昨夜淀瀬我旅宿をたづね來りて物語るを聞バ兄餘字兵衛爾を家督にしたき願にてす
 に剃髪したるよしさあるときい猶更に爾死しての餘字兵衛が志を悼のみあらず家相續を
 断理なり若又強て死んだらば七生までの勘當あるぞ吾妻事の同家中背元澁右衛門の養女
 にて原孝の爲に身を賣たるよしなれば餘吾郎と格別なり汝も今死しての始の孝を失ひての
 へりて養父に不孝とあるこれをよくいひさまへよ餘吾郎爾今死んともふ一命をたもち
 こゝろさてもあらためて一功を立よ其功を立る子細の具に餘兵衛にいひふくめおさつれば
 彼と心を合せて互に功を立よしかる時の十字兵衛も冥途にたさてよろこぶべし一功立たる
 其時の歸參とさせあらためて吾妻を妻女にいたすべしといひければ眞弓餘兵衛

等も伊よりことばをくねて自殺をといめけるに、余吾郎も吾妻も死ぬに死ね義理どきり兩人ともなさるうつふきて詞なし庄司又餘兵衛も向ひ十字兵衛一旦餘五郎が爲ま賈代おしたる其朝鳥の刀再手よもせりしも反哺の孝ある爾が徳の天も通せしめなるべしりへすくも譽あり爾笛をつくることをよくするよし號笛といふ俗にいふ叫子笛なりこれ軍器の一ッあれども尋常の叫子笛の深山幽谷の濕地に於てこれを吹ハよく音を出させ爾が工夫をもつて濕地といへどもよく音を出す叫子笛をつくるべし後日かあらず用る時あらんとぬかゝる時しも傍邊の竹林をわし分て笑腹蟻右衛門あらわれ出ものをいひず刀を抜て庄司を目ダげ唯一打と斬つけたり庄司は速く身をひねり早足を飛して地上に蹴仆のけさまに倒たるを足下にふみつけやをれごまし打とハ比興至極我君命をかうふり汝と紺九郎が行方をたづぬるため上京せしに兩人ともみづから來て身を失ふ皆是天罰のしうらしむるところなり爾紺九郎と心を合せ月影个谷梅个谷の両家を亡さんと隠謀を企とること密書によりて分明なり殊更爾餘五郎をすゝめて遊里よいざなひしより事起て十字兵衛自殺まこれバ十字兵衛がためにも警敵なり彼が魂と籠殘しる此竹刀ハ竹鎗同然主君を弑奉ら

んと事をたくみし大罪人を戮するに幸の刑具あり不忠の報を思ひしれと呼りつゝ力をさめて竹刀を吮ふつらぬきければ蟻右衛門の一聲さび手足ともがさ苦む体側よ見る目のこゝちよくこそ思われかくて庄司竹刀を引抜ければ蟻右衛門の息絶さり餘兵衛のこゝろは手拭とりて刀の血と清むれば庄司の刀を鞘よおさめや餘五郎此竹刀の爾が一生の守とあして短慮功をなさせといふ常言を忘るゝなといひて興へければ餘五郎いなし戴てぞ帯さりける庄司又いひけるハ時刻うつれば我ハ旅宿に歸るべし餘兵衛爾ハ此蟻右衛門と紺九郎が首を打めとより旅宿よ持參せよ沙士七ハ彼等兩人が隠悪の證人なれば生捕の儘鉢倉に卒て歸らん夢平ハ其細つさを引立て我供せよと命ヒツ、立出れを餘五郎吾妻真弓餘兵衛もろども門おくりして庄司が背後を伏拜み感激の涙に袖をぞしぼりける

○かくて庄司ハ蟻右衛門紺九郎が首級を携へ妻淀瀬ハ堂左衛門の首級を携へ夢平に沙士七を率せて鎌倉に歸り主君判官の面前に出て庄司且かの兩人の首級を實檢ふそなふ淀瀬ハ堂左衛門が首級を出して軍用金の賊なることを告且餘兵衛が都を殺せし謂をくひしくさこぬわぐれば判官ハ其志を感賞あり紺九郎を打とりたる事を梅

个谷に傳沙土七を誅戮す是等の事をくわしくいんくゞくしければ唯ねはむね
をまゐらすのみ庄司が餘五郎南餘兵衛等二人の者に功を立よといへるの何等の功にや
後くの巻を讀得てしらん

⑤さふれたる夢のまことか茂林の闇討

夫の扱おき爰に又一段の事の端を惹出せり是れいなる事となれば月影个谷判官の息女今年
十五歳に至給ふが頃日病の床に臥給ひ一切ものもめさりければ祿をたまはる醫師の更な
り世にすぐれたる良醫をゆめして治術を盡させ給ふといへども露ばかりも驗なく漸勞れ給ひ
面瘦身はそりて日又異にむくなりまさり給ふにぞ父母の君は更なり傳の人くも慈悲
しむこと限なく病給ふおん容骸うさがるく物怪の所爲にあらざるやもしうらべいか
なる良薬も驗あるべからず此うへは兎角神佛の冥助をねがふにしくべからずとて有驗の高
僧に惘祈を盡させ諸社に幣帛と奉て丹精をこらし給ひ母君の侍女等をかへるく鶴岡
の御社日参させ給ひけるが一日一個の侍女の御社に参詣し祈念をいりて下向の折ふし
庭さよめの宮奴等瑞籬の下に集ひて物語するを聞て巨福路坂と太麻の巫女といふあり寄絃

口寄の上手にて佛教にも通達し難病奇疾物怪の祟など其もどをわきらむる事鏡に物の影を
うつすが如く實活る神佛ともいひつへしと噂するを彼侍女聞つけてまれの此社のおほん
神辻占に託して告給ふあらめと喜ひつゝ道と急て館に歸りおん母君に个様くときこえけ
れば母君もいと喜ひ給ひて判官に告ぐこと又其巫女とく叫迎よとおふせて巨福路坂へ使を立
給ひけるに太麻の巫女召に應てやがて館へ参ければ姫の病架に近く叫入給ひ叛官夫婦對
面ありて後寄絃を乞給ふにぞ巫女つゝしみて且神保をととなへ梓の弓を打鳴して冥道をおど
ろしし目を閉て無心になりけるにあな思ひよらずや去ぬる延女四年信濃國苦形にて亡たる
相摸次郎時行の怨靈梓の弓おひかれ出て巫女につき判官に對していひけるは我南帝の勅
免をうらふりて墊懷の旗を飄し北朝をかたふけて累年の憤積といらさばやとおもひ立ぬる
かひもなく運命つたなくして爾が爲に亡され股肱耳目とたのみつる大佛九郎貞直さへ知具
麻川に人水して底の水屑と成果ぬれば生殘たる味方の者も忽心變して皆足利に降参し今
の我輩の亡跡とどぶ者さよなけを無縁の鬼となり修羅の眷屬と成て嗔恚を合ひ心止時なく
永劫悲趣をまぬぐる事あたはされば其恨を散せんため當家に祟をなし先汝が娘を取殺し

て無間地獄にいざなひ去共に呵責をうけまぬひく爾等とも取殺して遂に當家を絶すべ
 くらもふありとくよりしかおもひぬれども苦形落城の刻汝が手に入たる日月のおん旗當家
 よひめありしゆゑ是にふくれて近づく事わたはせむなしく年月を過せしが近比かのおん旗
 を鶴ヶ岡の神庫におさめしゆゑに時を待て崇をなすことを得たり見よく娘は更なり汝等
 夫婦嫡子玉兔之助を始一族郎等おいたるまで皆取殺せ無間地獄に墮て怨をいらさんずるぞ
 といふ其姿の見ゆせとへとも怒聲の其人に向ひて聞か如くにておそろしなごもいふべ
 かりす母君を始此座にありし人くこれと聞て大に驚きけるり判官の半の信じ半のうさか
 ひッ、巫女に向ひ怨靈の仔細をいひて詰問玉へハ覗女のこれを聞妾先試べき事ありてと
 洗米をとりよせ梓の弓を載る小櫃めきたる物の上よ蒔散してみづから姫の枕上に持行此洗
 米を手つから拾取てめし玉へとむふ姫の侍女等に扶起されてかの器にむかひ洗米をつまみ
 取てくひんし玉ひけるにあき怪し彼米粒忽姪に化して齧さければ姫は是と見て打わな
 きあなやと叫て伏玉へば母君を始かしつきの侍女等も身の毛をたちておそれぬひぬさて
 姫を介抱して藥などまわらせけるに漸蘇生ことを得玉へり時に巫女いひける怨靈姫を無

間地獄にいざなひといへる言たかふべがらす其故の無間地獄に墮る者の此世にあるうち
 より食物姪に化して食することあたはずといへり今現お此しるしあり疑べうらすつやつ
 や物をめさるも理なりといふ判官の眼前にかゝる奇怪を見玉ひて疑を決し此怨靈を
 静んにいいかよしてよからめとのさねて問玉へハ巫女いづく怨靈日月のおん旗とれと
 なれとこれをまばらく借受玉ひて姫の病架に立置僧衆を請きて大般若經を讀しめ玉い
 靈得脱して退姫りならず快驗あるべし其故の帝釋と修羅と須彌の中央にて合戦をいたす
 時帝釋に勝ては修羅小身を現して荷絲の孔の裏に隠れ修羅又勝時は須彌の頂に坐きて手
 よ日月を握り足に大海を踏といへり時行の靈修羅の眷属よなりしとなれば日月の御旗を
 そるの王威をねとるののみあらず此理よもよるべきなりしかのみあらま修羅三十三天の
 上よ賣上りて帝釋の居所を退落し欲界の衆生を悉我有になさんとする時諸天善神善法堂
 に集玉ひて船若經を講じ玉ふ此時虚空より輪寶下りて劍戟を雨し修羅の輩を寸々に割切
 といへりされば時行の靈を靜玉のんはと般若真讀の功力はまかすといへば判官ハこ
 れを感聞し玉の傍の人におよせて謝物をとらせ玉へハ巫女ハ悉これを受納ていどま

を乞私宅よど歸けるのくて判官の俄に紫元澁右衛門をめし呼玉ひ先達て鶴ヶ岡に奉納せし日月の旗をしげらく借受來るべしとおふせけれバ澁右衛門のこれをうら給り急ぎ鶴ヶ岡に參詣し先幣帛と進め神樂を奏して神慮と慰し神司に告て彼御旗と借受みづから是を携へて歸路に臨時のやく夜闌にぞ至ける此夜の雨雲月をうくまていと暗かりけるが澁右衛門の許多の供人に前後をまもらして極樂寺の切通しを過ける時茂林の裏より黒ら裝束したる曲者兩人わらひれ出前後の挑灯を斬落し刀を電光の如くにひらめかすれば供人等の臆してたちらに逃去もあり刀を抜て戦もありし防かねて皆散々に逃去ぬ澁右衛門の懐の御旗を大事と守護すれば戦を好まそといへとも彼曲者等順風の落葉急水の游魚の如くに走りかゝりて鋭尖をへて斬つくれを止まとを得ず抜合せて打合ぬ其刀音の梢をならす松風に響あひていとものすごき林木原わたりに近き禪院の鉦鼓の音のひまゝに鳴まじる宿鳥の聲も更わたる夜の暗かりに乃ささもしどろの探り討刀の光り息づかひを心めては戦ハ或ハ石の地藏に斬つたて火花を散し或ハ同士討をして皿煙を立しばらく時をぞうつまける澁右衛門は曾劍法に達しけれバねらひよりてハしと、擊身をかひしてハ丁と斬二人の曲者に

あまた手をあひせけるよぞ曲者等の敵しむたくや思ひけん早足を出して逃去ぬ此時やうやう雲散片わらひれてあさらのなり澁右衛門の彼等を打もらしたるをくちをししく思ひつゝ一息つきさる折しもわれ茂林の裏に弦音尚く漂とひいさ一すぢの箭飛來りて澁右衛門の胸をくを飽深に射たれをさしも強氣の澁右衛門もたまりかねひとこね呀とさびて後に歎と打倒れ箭疵の鮮血懐に流れ入て御旗をけがしけれを御旗を忍懐と放出て空中にひらめきぬかゝる時しも茂林の裏より兜頭巾に錦の野袴金拵の腰刀のさらめくを帯ぶる曲者二所隨の弓を携て歩出空中にひらめく御旗を手早く把て懐に押入ッ、莞爾と笑不敵のありさす唯者とい見ぬさりけり時に澁右衛門の息吹ッへして刀を杖に起上り懐をさぐり見て御旗のなさに仰天しがつくりよわりて又倒ぬ曲者のうなづさつ、澁右衛門をのけさまに賊のへして彼タ刀を拾ひ取とめめの刀一ひぐり老翁の音を止て衣脱蛇の昇天を望むささしの其骨柄折のら撞出す三更の鐘のひびきともどもに行方もしれせなりにけり借此邊の里入等澁右衛門が死體と見つけて騒立たうち月影个谷の館に駐進しけれバ山咲庄司雪森照檢の役目をかうふり僕夢平に挑灯もたせて此所に来り澁右衛門が不慮の横死を悲しみつ

胸に立たる箭を抜取箭の根を見て必かり居たる所ありやく人の告げるにや澁右衛門が
 妻於破矢見子動之助ともしもに夢路をたどるこゝちして走り來つひなまゝに骸にどりつきて前
 後不覺と號哭現 心もなき体あり庄司も共に落涙し和主等の愁腸さやあらんわたら忠義の
 武士を可惜 可悲といひてしはし歎に沈しがやありていひけるの世の物に心りけず御旗
 ばかりを奪去たる曲者のあまゝの盜賊ならを察する所南朝の心をよする輩ならんとい
 ひければ動之助涙をいらひ君父の誓にの共に天を戴すどうけふまればとやく敵の行方と
 たづねねん旗をとりかへし首とりて亡父の靈も手向たくいへば此よしを主君にさこね上給
 ひて復讐をめん死し給ひるやうにめんとりあしくづれかしと母もろども願ひければ庄司い
 ひく父母の誓ふ居こと苦に寐干を枕とし不仕といふ語もあれば其ねがひもつどもより早速
 主君にさこねあけてめん罪をたまひるやうにとりなすべしさりながら敵のなみく者あり
 あるまじけれを心かるくおもふとなかれぬさみ立若鷹のへりてあやまつことおほきぞか
 し倫起鳥の心をつけ力草を放つことおのれ 自、よくこれを思量せよとこまやかに教訓すれ
 ば其おん詞こそ我爲の鎧腹巻拳手脇楯忠といふ字を兎とあし孝といふ字を戯となしたとい

敵 鉄 城は籠石門に隠るゝとも一念の賊をもめてたづね出し首ひつ提て立歸らんと勢ひこ
 めていひけるにど母のよるこび庄司もうれしみ勇ましく必其猛き心をたゆまずなどい
 ひつゝ夢平と願て目配すれば夢平の其意を悟り一腰を抜手も見せを動之助は斬つくれバ
 こゝろわたりと四寸のびらさ下をばらへバひらりと飛て腕首つのみ「コリヤ夢平何するぞ
 「イヤサ若敵がまづからせよ」からおさへて「ところをひらいてから斬かけなと」まづ此やう
 よど扇おしらひ夢平が刀をひつしと打落せば庄司の空虚を見すましてかの矢の根を抜と
 りつ、手裏剣にうちつくれをの草履にて丁とらけとせ「此手の裏で復讐のおん願ひか
 なふまじきや」チ、天晴見事其矢の根こそ敵を探る手がかりなれそれを證據よたづねべし
 親父の死骸の勝手次第にどりおかれよ我の一刻もいやく館に歸りて復讐の願ひを出しつか
 いすべしといひ殘し夢平を具して立歸れば母の於破矢も雪森が深き情を感歎し動之助も
 ろともにもひなしが骸を抱起せば疵口より激血のあはひ鼻とあそひて 腥 躬上の冷て色
 變諸行 無常の青嵐は溢てもろろ鶯の花寂滅爲樂の短夜に碎て消し苦の露目もあてられぬ
 あり憐なれば又も歎に沈しが森の鳥飛へたりて鳴聲し 曉 近くどありまらる鳴呼此澁右衛

門初禰籠鹿兵衛といひし時の貧苦にへず後一藤を賜りてややく心を安んずといへども今又此災にかゝりて非命に死す 正是父五大院左衛門宗繁が鳥惡其子に報所あるべし 常言に一分の惡をなせば十分の惡報ありといへるも宜なり豈恐ざらんや

⊕ 蟋蟀 枕も床も野宿の妖怪

去程に背元動之助は復讐の願うなひて俄に行装をととのへ吉日をゑらび一僕も具せず唯獨みづらら包を背おひ鎌倉と發足しおもふ旨やありけん武者修行といひなし越中國を志ろざして出去の借越中國立山の連山に蛭牙山といふ廣大なる山あり根と地角と盤り頂は天心に接り遠觀ハ雲痕を磨躑し近看ハ月魄を平呑し深嶺幽谷の蕨常ハ雲霧を籠て晴る時なし山口にハ鳥獸やわく栖ゆるゑに獵者等もおはしといへども半山より奥は人跡たぬて其奥をさゆめ知者なかりたり比しも秋のいじめつかた回國の修行者とおぼしく笈を負錫杖とつさ鉦を打ならまてりの蛭牙山の半山にのぼり行暮て宿すべし所なければ野宿すべきかいかにせんとおもひつらひつ、彼方此方を見渡すにゆるるの向ふの茂林の裏に一ツの社見ゆられバ大あよろまび草のかさふくバウりの徑路をもとめ萩紫苑女郎花のたぐひの草せもいと高

く生のびて露滋裏とわし分ツ、其處に去て見るにわはれにさみしうわれまきひて人も住ぶる古社かり笈をわろして裏に入こまやかに見るに神前とればしき處と奥深くしていと暗蝠なぞ飛さぬぎ祭祀の具も見ぬすいなる神にけはさまへかたし軒端かたふさ朽目も苔蒸て垣衣生茂り月も時雨も漏べささまなり節と崩て鳥の巢をいとなむ處とあり翠簾ハ破れて蜘蛛の糸をむすふ便どなれり床には落葉敷のさね塵うづ高くつもりて獸の足跡おほし高欄瑞籬みな朽て棘の裏に倒たりめぐりにいづく年をふるともしれぬ松杉のたぐひ深く立籠枝葉茂りて社の上より打おろす物すさましきいとんうたなし修行者は野宿するにはましならめともひつ、社の片隅に笈を置袖紙帳を取出して敷物となし暫らく休息したるが松吹風谷の水音耳近ひいさひまゝに聞ゆる鳥の聲のかれくなるいろく、又鳴虫の音の哀れなる凄涼寂寞として人めづらしげに豹蚊さへ身うちを螫にぞ目もあはねハ睡もつかずしばらくありて向うの方をゆるるうに見やれば愁ほせなる火の光六ツ七ツ乱飛狐のどもす火かどおもふに漸く近くなるを見れば百姓とればしき者大勢明松を前に照し注連をいりくる棺を昇幣帛を持此社をのぞみてす、み來つものいふを聞ハ嗚呼村一番のうつくしき此娘人

身御供ふなるといふはかりゆい事「おのう年と八ッ親の歎さいいかばかり何ぐらふて
 おん神はあさな娘を食給ふぞ悲た目を見る事よと餘所の哀を眩ッ、社の前に棺をすゑ
 其上に幣帛をさま夾み皆くひれふしぬかつらつゝおん神に告奉るおん望の犠牲をかや
 うに供じ奉れば田畑をあらしたまふ様になき奉るといふ間も身の毛をへたちて「や
 い腥さ風が吹明松を吹消れそや風がといひさして胸をひやし魂をさやして打わな
 我先にとわらそひてこけつまるびつ逃踊る修行者の社の隅に身をひそめて此やうすを見聞
 しては此社に變化すみておささき者とどるとおぼし我さぬひに此に宿を變化を退治し
 て諸人の敷を救やとおもひつゝ錫杖に仕籠たる刀を抜かけてなほうかいひてぞ居たり
 ける漸時つり夜嵐いげしう吹わたりて飄々と梢をならし青葉を吹落しぬともものびごき時
 しもわれ奥深神前俄に鳴動して足音ひし〜とひいさ翠簾をかなぐる音かとしてあらと
 れ出たる變化の姿白き薄衣のやうなる物を頭にかつきて正体と知ざれ共かの棺のそば近く
 歩みより銀の戟を打曲ぶるやうなる爪生鉄の針をうゑみさるやうなる毛生たる手を
 さしのべて棺の蓋をゆり〜と撞破りけるが不思議や棺の裏より手を出して變化の手く

びをしかと掘忽棺を踏破りて前髪ゆる若者旅装束にて包を負白羽の矢を握てわらわれ
 出たり是則別人にあらせ若元動之助氏邦なり變化の手を振拂ひ動之助を掴み殺ん勢ひな
 り修行者は變化を目がけ錫杖に仕籠たる刀を抜て唯一打と斬つくる變化はやく身をかい
 し頭をのぞめバ身を沈め下を拂へば飛上る動之助の生捕やと思ひけるよや空虚をうかい
 ひ變化の腰に組つきぬ變化は背後よ手をまはし動之助が襟首つらみ引のけんとしたる所を
 修行者が呀と聲かけて打こむ刀變化の腕を斬落せば動之助のさつと退其間に變化のすり抜
 てかさ消やうよ失たりけり修行者の暗裏に動之助を變化と思ひ又斬つくれバ飛すさりて抜
 合せ丁々しと、斬合しが雨雲の絶間よりもれいつる月のさやけさに互に顔を見合せて「和
 主のおん身ハこのはからす思ひかけすどたがひに驚き刀とひさして鞘におさめ先修行者いひ
 けるハ和主と何故お棺に入て此所に來つるぞと問けれバ動之助ひけるは其不審は理
 なり我亡父の仇をたづぬるため武者修行といひあして當國に到り昨夜此山の麓の村長の家
 み宿をくりんといひ入しに主人夫婦をいじめ家内の者都敷と悲み居るもる何事を愁るぞ
 とたつねしに近頃此鯉牙山の木枯の森の古社に邪神すみて月毎に一人ッ、おさなき女と人

身御供にとる事ありこれを供せざれば村々の田畑とあらし許多の人の難儀になるゆゑ止
 ことを得ずいとし死子をどらるゝ者敷しれず其どらんと思ふ子のある家には軒端に白羽の
 矢の立事あり是其まゐしなり我家も其矢立しゆゑに今年八ッになる娘を人身御供おそな
 ふるなり其故にうく歎なりといふ其矢と 則 我携へたる此矢なり我夫を聞うたがふ處おほ
 ければ其主人にかうくせよといひふくめ我其娘よかひりて此棺の裏に入百姓等に娘
 と思へせ此處よ昇れ來つる夕果て推量にたゞとす今れん身の斬落したる變化の腕をよく見
 給へといふに予修行者かの腕を取て月の光によく見れば是眞の腕にあらす手覆なす物
 に怪し物の爪をそろしき物の毛をうゑてめくりたる物なりけり修行者これを見又かの矢
 を見せて眞の變化にのらす曲者の所爲に 疑きし打もらせしこそ残念なれといへば動之
 助いづくいかにもさなりあみくくの曲者といおもひれすかうくならんと耳語に修行者
 も何よかあらん耳語ぬ動之助の打うあまき路上の説話草裡人のりといへばかゝる山中とい
 へども容易に密事の語りつたし拙者は此山奥に分登て様子をこゝろみひらこん「しからを
 互に立別再會の時はかやうく」と修行者又耳語つゝ枯木の枝をひろひ集て明松につくれ

バ動之助は火燧袋を取出し火を打出して明松に燃し兩人よれを分ち取たがひに思ふ言やあ
 りけん動之助は山奥の方修行者と麓の方別くに出去ぬらくて動之助と明松をふり照し木
 の下露に袖ひちて山深くのはりゆく徑路盤曲したぐひまれなる險阻なり人跡たぬたる深
 山なれを梢をつたふ山猿岩間にすたく 踏も人をあなせる風情なり 狼の吼聲ハ山響にひ
 いてすすまじく聞ゆ山蛭と肉に喰入て鮮血を吸痛に堪ざれへ蛭牙山と名づくるも宜也と
 おもひつゝあやうげなる阻をつたひ苦なめらなる壘橋を渡などしてゆくに崇越の風に明松
 を吹消れなれを岩根にひ出たる所に尻かけてやすらひ居たるに松林の裏よりわらくしき
 大男二人歩を出て動之助に向ひ 雷のおちりゝる計りの聲して曰汝の前髪ある明輩なるもの
 何等の爲よ夜中獨此山に登るや此山の半方上の人の上るべき所ああらざるに見かけに似せ
 臆ふとき奴りなどいふ動之助此者等を見るよ身材高く眼の狼の如く鼻の野豬の如く髭の
 熊に如くあるが巖素をもて編たる頭巾をかぶり滑壁手をかけ壘管の腰巾をひ山刀の長さ
 を帯一人の矛をよこたへ一人の斧を提たりなみくくの者ならば打撃へきに動之助の臆し
 るけしきも見せずかゝる山中を夜に入て獨上ること心得なくてなるべきか汝等もし妨せ

我手あみを見すべしとどいふりの者等の呵うとうち笑いよく膽ふとき奴なり汝さばの
 り手あみあらば我くと勝負を決せよ方に一ツ我輩に勝ことあらば此山にのやすべし若
 負なば活して歸せよといふ動之助莞爾と笑ひ我の武者修行のために旅をする者なればそ
 の望む所ありいでく勝負を決すべしといひつゝ立上りて身がまへすれ先一人矛をひね
 りて突かくる心得たりと刀を振飛上りていはしと打沈みて丁と斬風ももまるゝ胡蝶の如
 く雪を持たる柳の枝の弱氣も見ぬて強がごとく柔よく剛を制する手練凡人ならぬ太刀すぢ
 を見のねて残る一人も斧をさへげて斬つたり動之助の二人を相手に小太刀のあしらひ牛
 若丸が鞍馬にて木の葉天狗と戦しを今見る如き形勢にて勢ますゝ猛かりなりわ二人
 の山人何かは以て敵すべき高道してぞ逃去ぬ動之助は刀をおさめりの奴原の山賊どもおも
 へれ本熊どりの獵者もや何にまれいぶかしき者等なり此山の奥見きりめすいあるべからせ
 と思ひつゝ清水を掬して咽をうるはし明松も焼尽しされば月の光に乗じてなほ上りゆくに
 いまぞ初秋なれど深山のゆるるより冬の時の如く寒風肌をどはして堪がたしかくてもきく
 て猪のよふ道ぶにあら所に到りければ萬葛にとりつき木の根岩角を階に踏のらうとてゆ

くにやうく一條の路ある所に出たりさて四邊をかへりみるに此所と草木あせもよのつね
 ならず時たる岩石なども都て目馴ざる物なり孔雀石綠青石紺青石石英琅玕石牡丹石木賊
 のたぐひも見ゆ山中に海石のまじれるも一奇事なり蟹石蛤石のたぐひの貝石おやく路の
 かたいらにあり沙と金色あるもあり五色なるもあり方解石は盤々として餅と刻たるが如く
 舍利石は皓々とまて露の滋に似たり殊に怪むべきと野曝の白骨と散したる如く石あり
 是いはゆる野曝石なるべし是等の玉石奇石玲瓏たる月の光にのゝやきければ好景えもいと
 色す人間と出て仙境へ入しかと疑れぬ其外見もおよとす聞も傳へざる奇石おやければ動
 之助と奇異のおもひをあししうらむ四邊をながめてぞ居りける

宿かして名をなのらする化石の銅蓋

萬仞の青壁剣を削り千丈の碧潭藍に染り硯々たる蛭牙山の奥深玉石奇石交てたゝ巖を
 さりひらきつくり懸たる草屋あり苔むしたる白石樹の青龍の雲を出るに異あらすなまめよ
 伏たる黄鸚鵡の猛虎の風を起すが如くたへり深き谷川にて漲音のすさまじく石鐘乳は
 時ならぬ軒の冰箸とあやまたれ石燕の飛外は鳥もかよはぬ所なれと住バ都とおもふよ箒

火といふ此家の娘あるぞの留主は唯獨灯火に向ひ居て砧打手のたゆげなり折筋来る獵者の書狐の髭四郎あるじの留主を見えみよて鬘子のの上にのし上りだみたる聲していひけるはコレ娘夜なべ仕事をとりおきてこちのいふと聞めされあたら花を此様に深山木よして朽さする便なまよ折く来ていふ如くこちの心にしよがとて此山を運て退都の花と赤がむる氣得心なきかいくにぞといひつゝひくゝと寄をへを突倒しあなけがらばし母さまの留主といへば来てと囁り妾をせむるうるさまよ母さまに告さこぬ辛目を見するぞといふを聞かず又さし寄て猿が釋を揉やうな身ぶりをすれば娘は赤やうるさくおもひ搦衣の杵で頭をばしと打退る鬘四郎は頭を打れてこら立ッ、手負猪狼のたぐひといへと手捕えする男をたど戀なればこそ格のやうになほくあれよし〜我いふ事をうけひぬ報に此家のあると雲根の老女のあしき仕業を縣司お告さこぬやぶて愛目を見すべれぞといひつゝ立を引どめ「それを告すむべきか」すまぬと思つゝけひきたまへと「いふに娘と口ももる」こなたとせきていせいかに〜と「いりれて娘の胸に釘背座をむさむさ母に告いかにもすべしと心をさめて笑顔をつくりさばり深くおぼす心を無解に聞んも心なしいかにもとなた

よしたがふべしといへばこなたの細目になりそれは實かあうれしと掌を合して拜つゝしうらば後刻に此背後の岩陰よしのぶべしよ時分まれを吹て相圖をといひつゝ鹿笛を取出して娘に與へ灯火消て合點かどむくつけき山人も戀にと心をあやましつ先酒買て祝ふべしと穴熊の一番鎗を突どめたるこゝちして獨喜ひ歸りけり娘のあどよはら立顔よて自頭をさぐりッ、今朝結た大事の蟬髪を此やうにそこねさしたるにくさよとひとりぢぢ再砧を打居たり彼所よと動之助しはしやすらひ居たりしが遙むりふに火の光ひらめきて砧を打音聞えければかならむ人家あるらめどもひつゝ火の光を目當にゆらて彼草屋の門に彷徨ものゝひまより裏をうがひひ見てけるに十七八ばかりなる美麗娘紅のこぞめの梅の小枝に春霞立田の山の鷺とひふ文字を標に染抜たる木綿の振袖を着たるが帯をきけなくひき結び頼髪に顔にこられかゝりたるぬもいれず人の斬首を益にし人の腕を杵にまて搦衣を居たりけるかく人跡さえる深山よ人家あるまらいふかしきに世にけりて美麗娘唯獨人の腕首を砧にして平々るけしきこそ怪しけれこれい眞の變化にや何にまれば宿を乞て試べしとおもひ門の戸を打ゝさこれの道を踏迷て難義におよぶ旅人きり一夜の宿をめ

ぐみ玉へと聲をかやうふいへ娘の砧の手をといめいなこゝの人を宿す家あらず彼處の谷
 あくだきは麓み渡る道わりとくくもさひへといふにぞあやあなりちに乞けるお娘の其
 いらへもせまこちの情の心をもて此にやとぞと思ふに其心もしらで死地に入を好命し
 らずの旅人やと口の裏に咬がほのかに囁けけれ益あやまみ宿かす事のなりがたくい少
 刻のあひゞ休せてよとてなはいそがひしく戸をたけけ娘の腹立まげに立上りて歩み出戸
 を引あけて月わかりに動之助が容を見れば玉をあざむくばかりに美麗若衆なれば忽春戀
 の心を起して心頭突々と跳あかめもせま打まもり居けるがしはしありていひける主人
 の留まといひゆるありて人を宿まがたくねもへさおん身ならバ妾が命にうねても宿したく
 おもひはべるさういさ玉へといひつゝ手を取て裏に迎けるにぞ動之助の身上の塵を打拂ひ
 脛巾をとま草鞋をぬぎなぞすれば娘のいぞがひしく筒の水を石の鉢に汲入て足をあらはせ
 何にうあらん黒き石を圍爐裏に打くべて火を燃し此の深山もるに寒さもとやしいまご初秋
 なれど見玉ふとく妾の綿入を着のべりおん身の夏衣なれば寒さよ堪玉ふまじいさ火にあ
 りて身をあたため玉へあら山に踏迷玉ひさぞなわびしうおぼされん飢もしたまひつらん

れせりる石山にて幸菜二房つくり得されをばも參すべき物もなしせめてこれありとめ
 し玉へと云て折敷のうへに白糸のやうなる物を盛て出せり動之助のもてなしのあつきを
 謝し之を食に少し甘味ありて忽飢を忘るりこれの何といふ食物ぞと問けるに娘のいへ他
 物なれば知玉のぬも宜也その石麩といひて此あたりの岩窟に生る物にて我々が平日の
 食なりといふ動之助はこれを聞よく見れば折敷も石なれば益いふかり家内をうへり
 みるに砧の腕首も石にて火桶灯籠系車麻笥鍋釜の蓋播種播盆切机のたぐひの雑具すべて皆
 石なり其うちおも石の枕は昔語の一ツ家と思ひ出しておそろしければ轉いふかしみて其
 ゆゑを問に娘はいはく此處は玉石奇石おほなれば奇石が洞とよひひかしてなる谷底に川あり
 よろづの物を其川水にひたしおけられたのづから石も化石す故に化石谷とあづけ候妾が家の雑
 具すべて石きると昔かの谷川にひたして石あせしなりしかすれば万の物かさくなりて破損
 せざるゆゑなり今爐火に焼たるは石炭なり此灯火と燃石といひてよく燃る石なり明松の
 かりもして燃いといふにぞ動之助のこれを聞きて聞およ化石谷といふ此處にてあり
 しかとやうく不審いれにけりさて娘の振袖の袂を口にくいへて背後ながらによりそひて

いとつりしげにいひけるいづれの國にや京の女郎田舎の女郎とかいふ石もあるよし都
 の花の京女郎も深山木の田舎女郎も心の實も二ツのあらじ女子の念と岩をもとほし思ふ男
 をしたふては石もなるを聞とべる日陰の木々とおろかにて石も花咲谷もあり岩間ふたま
 る清氷にも月影とらつるぞかし一河の流も他生の縁今夜お宿を致せしは深き縁しとおぼさ
 すやと心の裏を母のめかし人に馴ねをおもいもく顔も紅葉の木の葉石磨かれたる水晶に
 縁をこぼす額髪くれなる匂ふ口紅の沙中の珊瑚砂顔に袂の隔垣まだ初戀の笑るめね苔の
 花の石梅に色と合てりゆらし動之助の娘が戀を幸に此家の様子をうらやまやと心にう
 なづき落花に心われは流水にも情ありさばかりにねもひたまはる志さらくぬだにおるは
 すと靡あふたる糸薄ひとつに落る白露の濡の緒はころびぬれぬ娘のうれしさかぎりなく動
 之助が手を取て一間の裏もともなひ去ぬかくて時刻もやうつり山風いいと烈くぞ吹渡る
 此家の主の雲根といへる老女もて雪をまぎむく白髪を肩も打亂しいく年ふりし女羅の古松
 にのりし如くよて面は節木のやうよからびたるが石綿といふ物をもて織なる衣の裾を高
 くりあげぬた手にの珥みじかある弓は獵箭を握りそぬりた手にの兎と提老を見せざる健さ

爽かきぬ

立つ

回乃

山此

鷺

